
time LIMit → ZERO

NOSUKE@home

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

time Limit↓ZERO

【Nコード】

N6583V

【作者名】

NOSUKE@home

【あらすじ】

Limit——Like Immortally Man——

それは、その名の通り、まるで不死。
仮面に鬼に、それに天使。

一見普通に見えて、実はそうじゃない。幾何学な生命体だけど、しかしそれが、俺達と同じ、『ニンゲン』なんだ、って。

そうは、思えるか？

……いいや。

そんな事実、普通見ないし聞かないし、まして認めるなんてできや

しない。

夢か現か妄想か、そんな奴らのタタカイに。——でも出会ってしまった。

空腹音から始まるタイムリミットバトルアクション+ちよつとズレた(?)恋愛が織なす、複雑難解な多項式。

そのコタエは一体どこに収束する?それとも無限に謎を呼ぶ?

16話までは前書、『time LIMit↓XERO』(削除済)の書き直し版です。

lim1: Encounter You (前書き)

ルビ機能を活用しています。それにより、上手く表示されない端末からのアクセスは、この作品を読む上で障害になるかもしれませんが。……まあ、保証はしません、ってだけです。

作者はプロではありません。ただのプロ志望（↑え？）です。アドバース、感想等、お待ちしております。てか、感想ぶりっず！多少表現が危ない場合がございます（R15指定は、セクシャルではなく（いや、多少は入りますよ？）、グロテスクの方の危惧を予想して）。心臓や頭が極度に悪い方はご遠慮下さい。

途中、空腹音が鳴っても決して隣の人に噛みつかないで下さい。大変迷惑になる場合があります。

lim1:Encount You

”ぐううう——”

そんな、聞くだけなら情けない音が、一人の少女から発せられていた。

しかしその主は、空腹、あるいは胃腸の不具合とか、そう言った類いを示しているだけではないだろう。

山道を抜け、森、林を渡り、或いは、深夜の街をひそひそと走り抜けた。それによって今まで蓄えられてきた、その疲労が、彼女を襲っていたのだろう。

……最も、今までもずっと疲労と空腹に悩まされながら来たのだから、別段、それは特別な状況じゃなかった。よくあること、なのだから。

サバイバルの知識はそれなりにあるのか、食用の草花、生物を捕って。

又は、街の角の、残り物を漁^{すみ}って。

しかしそれにしても、彼女の格好は不自然と目立つ。

純白、と言うには、少々汚れが目立つのだが、タイトの様なピツタリとした衣装に身を包み、更に肩、肘、手の甲、胸、腰、膝、足と要所々々に鎧の様な金具が取り付けられていた。

そして決定打は、脇に抱えている剣だ。

中世の騎士とかが構えていそうな雰囲気はあるのだが、それにしでは少女の格好はあまりにも軽装過ぎる。正直、不釣り合いだろう。それとあえて公言しておくが、ここは現代日本、しかも関東と、割と都会な場所、その周辺の、割と大きい公園の一角だ。

勿論、この少女が誰かに見付かろう物なら、いいところ哀想なヒトとして、ネタにされる程度だろうか。

「ヴウ、アアアアガッ……!!」

「っ！！」

もう一度言おう、ここは現代日本だ。

……まあ確かに、中には訳もなく叫びだす人もいるだろう。特にそれは、都会に近づくほど、その類いは増えてゆくのかもしれない。夜中の都心なんて、ちよつと奥まった所に足を向ければ、そんな類いは、見たくなくとも見ることでありうる。

が、その突然の叫びが聞こえたのは、日が落ちてまだそれほど経っていない刻だ。早い。

それだけではなかった。足音や息遣い、そして何よりその雰囲気、空氣が、その人物が普通のヒトではないと、明確に表していた。

そんな、危険な空氣を察したのか——その少女の格好が既に、その状況に合う程に危険ではあるが——脇に抱えていた剣を杖にして、その場を離れようとする。

「あ……っ」

だが、踏み出した足は木の根を蹴り、その体は前へとつんのめる。ドサツと、その装備のせいか、意外と大きな音を上げてしまい、それは相手に気付かれるには十分だったのだろう。

化け物じみたソレは、向きを反転させ、少女の方へと近付いていた。つた。

とても、変な顔。

低めで、それでも元が割と高い声なのか、それはまるで、猿が度肝を抜かれたような、それともにらめっこでもしたかのような。そんな滑稽さを表面に出していた。

そして印象的な、真まっかつ紅な髪。

その奇天烈な見た目に——何度も言うが、この少女だって十二分に奇天烈である——恐怖したからか、立ち上がった少女は剣へと手をかける。

近づくその影に、嚇おどしのつもりだったのだろう。

その、不格好で脚も震えているものでも相手にとっては、だが臨戦態勢でしかなかったようだ、数メートルあった距離が、一瞬で縮

まる。それほどまでに鋭く、また急な飛び込み、そして突進だった。彼女が一瞬の瞬きの後見たその顔は、仮面であったこと。

それと、大きく振り上げられた腕には、日本の鎧の籠手のような拳に棘が埋め込まれた武器が嵌められていたいたこと。

それらが確認はできただろうか。

「きや——っ！」

あからさま顔面を狙ったのパンチだったからか、なんとかその一撃を弾く。……いや、逆に弾かれたと言ったらいいのか。

一撃が予想外に重いらしく、両手で、降るようにして防いだ剣をそのまま吹き飛ばすほどだった。

「ガアアアアッ！！」

悲鳴のような気合いと共に放たれた、続けての二撃目。

甲に短くも鋭い棘を生やしたその拳は、その華奢な頭へと吸い込まれていった。

障害無く直進したそれは、一撃で原型を崩す。それでも二回、三回、四、五……——

最期、頭を杭で止められた藁人形と化した彼女は、腕^杭を引き抜くと同時に、ブリキの人形の様に地面へと崩れ落ちた。

踵を返しゆつたりとした足取りで、籠手^{ナックル}から、その髪と同じ、真っ紅な血を滴ながら、彼女は歩み出した。

当然、後ろで何が行われているか、確認することはなく。

やられた筈の少女が立ち上がった。

「——貴女、暴走してるでしょう？」

聞こえる訳のない背後からの声に、しかし特に驚いた様子もなく振り返る。

もし、彼女の言うところの”暴走”でもしているのなら、もしかしたら驚くという行為ができなかったのかもしれないが。

「ア、アアアア——！！」

咆哮一閃、すると再び空いた十数メートルの距離がゼロになる。

先程の剣もなく、数瞬後には命がないであろう状況で、今度は揺

れることはなかった。それどころか、余裕にも目を細めるその表情はどこか、微笑みすら感じられる。

「今、助けてあげるから――」

そう言葉を発した直後、木を軸にして大きく左へと回り込み、跳躍。

その時に足払いされてバランスを崩したのか、紅い少女は、その拳を大きく木へとめり込ませてしまう。

その隙に白い少女は飛ばされてしまった自分の武器を拾い、半身を切り、その大きな剣を片手で軽々と構えたのだ。

何故だか、先に構えた時と全く同じ姿に直つていたのだが、その構えは、先の構えとは全く違う、一切の隙が無かった。

それこそ、正に”別人”のように。

木の幹に突き刺さった拳を引き抜き再び、外れてしまった標的へと拳を構え、直進する。

それを『白』は、すんでのところで横にずれ、元の自分の立っていた場所を、横風ぎに斬る。所謂、日本剣道での”抜き胴”と呼ばれる技に近いだろうか？

しかしあるうことが、『紅』は直前で急ブレーキをかけ左拳で剣を抑え、更に振られた勢いと、そこに撃ち込んだ右拳の勢いをそのまま使い後方へと大きく跳躍したのだ。――相当な無茶苦茶だ。

その、普通は出来ない芸当の一連の流れを見たためか、『白』は、一度距離を取り直し体制を整える。

『紅』もそれに倣ったか、直ぐには攻撃してくる様子は見られない。”暴走”とやらはしていても、彼女が戦闘を軽んじていないのが、そこから伺えた。

「……貴女とは、暴走していない時に交えたかった」

そう、目の前に構える、紅い少女へと話し掛けるのだが、また低く唸るだけで何も答えていないも同然だ。

「うん、分かってる」

それでも、何かを伝えたい、という気持ちが伝わったのか、少女

は相槌を打つ。

本当に言葉が通じていようか？本当に分かっているのだろうか？
だが今のでお互いの実力が知れたのは事実らしい。二人とも、低く、そして力強く構え直す。

鋒は胸に、拳は頭に――

それぞれに狙いを据えていたその状態は、『白』が動き出すことで崩れる。だが、その後の動きに、『紅』は動き出すことができなかった。

それは単に彼女のスピードが速まっただけではなく、その鋒から表れた四本の蔓が、彼女の四肢をそれぞれ絡め捕ったからだろう。

そして心臓と剣の距離が、一瞬でゼロとなった。

「宿り――」

「暗い！」

「――っ！――」

止めの一撃は、しかし、またしても突然、十数メートル先から発せられた叫びにより中断させられてしまった。

普段なら、そんなものに気を止めることはないだろう――そもそも、戦闘途中で意識を反らすことが普通ではないだろう。

だが、その少年の発した声は、彼女の手を止めるには十分なものだっただけだ。

――『もう、暗くなっちゃったな』――

「……ちがう」

それどころか、対照を視界から外す。

頭の中に流れるテロップに、大きく意識を持っていかれたのだ。

「ちがう、ちがう……っ！こんな――」

「ウガアッ――」

「！？」

気の迷い。その少しの隙を見逃される訳もなく、『紅』は蔓を引

きちぎり、距離を置くべく後退する。

それに気付き追い討ちをかけるも、『白』にはもう、先程までのような覇気は無く、つい一瞬前に見せた瞬速も、的を正確に射抜く剣技も、四肢を抑える蔓も、まるで嘘のように見受けられなかった。そんな心境にも関わらず、『紅』は、ここぞとばかりに予想外の技を繰り出してくる。

——衝撃波。

今『紅』が繰り出したものは、そう呼称するのが良いだろうか？ 勿論、そんな技に反応できる訳もなく、攻撃を防ごうとした拍子、まだ当たってもいない内、彼女の体は大きく吹き飛ばされしまったのだ。

「くっ……！」

「！？——ヒト……？」

そして吹き飛ばされた先には、声を発したであろう少年が立ち竦んでいた。

今ので、巻き込まれてしまったのだ。

「しまった——」

その偶然の部外者を視界に入れ『紅』は、その大きな拳を振りかざす。

——『んー、じゃ、お前は今日から——だ。さっきマンガに書いてあった名前のパクりだけど、カッコイイだろっ？』——

「うん、……カッコいい」

少年を視界に捉えたことでまた起こったフラッシュバックに、少女は、独り言を呟くように答える。

少年と拳の距離、実に一寸。

目を瞑っていたために、前髪を流したのがただの風か、それとも拳圧かは分からなかっただろう。

そんな、本当にギリギリのところ、その拳を止めていたのは勿論、

『白』が鋒から出してた蔓だった。

止められているその腕には、蔓が無茶苦茶に巻かれてはいるが、それでも止めているのには相当な力が必要だったのだろう。柄を握るその手は力み過ぎで痙攣し、こめかみには血管が浮き出てきている。

「って、ホントに止まってる？」

それでも少年は、いや見ていなかったからこそ、そんな素っ頓狂な声を上げるだけで固まってしまった。

「早く……逃げ、て……！」

「え、あ、ああ！」

『白』が必死の形相で彼を促し、それでやっとその場からの部外者がいなくなる。

瞬間、いったい気温は何度か下がっただろうか？それほどまでに、彼女の顔には顕著な怒りが——何に対する怒りか、それは柄を握る指に活を入れ、蔓は腕を絞め上げていった。

「ギアアアッ……！」

力は弱まるどころか、万力の如く更に強まってゆく。彼女が力を強める度、蔓はその腕から醜い旋律を奏でる。

そこまできて限界を感じたからか、『紅』は、絞められ、形を歪めてしまった自分の右腕を、関節から叩き割り、引きちぎった。

腕を犠牲にしてやっと動けるようになった彼女は、一目散にその場から逃げ出すのだった。

「逃がさなっ——！？」

一方の『白』は、立ち上がろうとして、やっと気付いたらしい。彼女は敵に吹き飛ばされ、地面へと転がった時から両足が折れているのだ。

そして剣を杖にしようとしてまた気付いたらしい。柄を強く握りしめ過ぎて、その指が、指として機能していないことに。

仕方なく、彼女の体が動けるようになるまで近くの木の下に寄りかかって休んむのだが、最低限立てる程まで回復するだけでも、思

いの外時間が掛かったらしい。

そこから分かることとして、無理をし過ぎたのは外側だけでなく内側も、だったのだ。勿論その頃には相手の姿は見える訳もない。

「れお……」

そして立ち上がった数秒後、彼女の口からは一人の名前が呟かれる。

のろのろと歩を進める彼女には先程のような覇気は全く感じられず、だがその道程には、今までのような迷いはなかった。

話は、物語が動き出す数時間前へと……――

……――

「何故、俺はこんなところにいる……？」

「し、知らねーよ！俺が聞きてえっての！」

そこは監獄だった。

……少なくとも俺たちには、と付け加えたいのも山々だが、隣にいる彼はコレの原因だ。

「大体、あんな所に誰か居るんだって分かってたら行かなかったよ！」

虚しく響く、分かっていたら論。

「はいはい、アンタら何で”こんなところ”に来てるのか、しつかり分かってんのよねえ？」

「いや、俺は分からないです。コイツに拉致されてただけですから。」

「テンメエ、裏切る気か！？」

裏切るも何も無いと思う。むしろ最初に裏切られたのって俺じゃないのか？

「だから、アンタら同罪なの。……分かってんの？」

そして下される、至極真つ当な教師の言葉。つまりここは職員室なのだ。

弁解をさせてもらえば、俺に至ってはただ”巻き込まれた”だけなのだ。

実際、そこで尋問されてるショージ——多々良尚司、悲しくも友人だ——に、「イイモン見せてやるよ」と言われたからついて行っただけだった。それがこの様。……弁明なんて意味は成さなかったのだが。

「反省文……何枚にしろ？ 因みに言っておくと、反省文の基準は十枚」

「分かったよ書けばいいんだろ、十枚！」

そしてニヤリ、と背筋に悪寒が走る笑みをされる。嫌な予感しかない。

「んゝ惜しいっ！ あたしが予想してたのに五枚足りないっ！！

ってことで二十枚ね」

「はあ?!」

「だから俺は——」

と、さっきから言っている事を言おうとして止まってしまう。ああ聞いてくれないだろうな、この人は、と思ったからなのだが。

「俺は、——何？ 厳しく聞こえても、アンタらの将来を心配してのことなの。それも分かってる？」

案の定釘を刺されるが、そう言われるとキツイ。

いくらやってることはひどくても、一応担任教師なのだ、心配等と言われれば何も言い返すことなんてできやしない。

「まあ？ 覗きなんてやって、見付かるようじゃまだまだ大した人間になれてない証拠だけだねっ」

「ちよっ——!」

そしてけらけらと笑いだすシイナ先生——八木シイナ。女性だが男子生徒からは友達感覚に扱われるような先生で悪い人じゃない。

……はず。——を見て、どうしても言っておきたいことが浮かんでしまった。

——それが教師の言う言葉か、おい。^{セリフ}

「ホント、多々良はともかく峰渡^{みなと}はもっと、ちゃんとした友人選びなさい？例えばカナみたいな」

その”カナ”って奴の話題を出した途端、今度は違う意味でニヤリとした顔を浮かべるシイナ先生。

ついでにそいつの事を説明しておけば、カナってのは八木カナ。

名字の通りだがシイナ先生の実の妹で、俺たちの同級生。クラスはお隣A組で、学級委員なんてのも勤めてる。

「俺はともかく、ってなんだよ！レオだって何も、嫌々俺とつるんでるわけじゃねーだろ？！」

「まあ……ね。それに先生には悪いですけど、八木さんはちょっと苦手なんで……」

どうも堅物イメージが強いのと、クラスも違って関わりが殆ど無いこと。後はこの人の妹だから近寄り難いのだ。

「まいいや。とにかく、二人は今日は居残り。反省文書き終わるまで帰んなよ！」

「「はい」」

そんなこんなで、俺達二人は放課後を潰すことが決定したみたいだった。

ここ、私立六花園^{りっかえん}学園高等学校は、実績もそんな大したことのない、その割りに地元じゃ割と名のある進学校だ。ちょっとした住宅街の側にあるからなのか入りやすいレベルの進学校だからか、生徒数も千人弱と中々に多い。

そんな俺は後一月も待たず、そう、コイツが更衣室の覗きなんて提案さえしなければ、平和に一年生生活を終了できたのだ。……せめて、言うだけは言わせてくれ。今までだって散々巻き込まれただ

けなんだから。

——まあ、今回だって、結局そこまで大事にならなかったこと、俺は見られてないこと等々が重なってくれたお陰で反省文二十枚で済んでいるんだけど。

学生寮もある。住宅街、つてのが一番の理由だろうけど、入寮者は数十人といない。シヨージとはそこで相部屋という仲だったりする。

「早くしろよ、先帰っちまうぞ」

もう三十分も前に書き終わったシヨージに急かされていた。

「そんな事言われたって、書くことが無いんだよ」

「んなもん、」女子更衣室を覗いてごめんなさい、もうしません”
みたいにテキトーに書いておけって!」

確かにしようとしていたのかもしれないけど、そんな事実はないし、認めたくない。

……だいたい、シヨージが怒られるのは当然として俺は理不尽に怒られているんだぞ? 反省文を書く気なんて一切、起きやしない。そんなんだから、遅くなりそうだから先帰っててくれ、と伝えるとなんとも軽い足取りで教室を出て行ってしまったシヨージ。ヒトの事は言えた義理ではないが、まったく薄情なダチだ。

しかし本当にどうしようか。いっそ”もう尚司君のような悪友に捕まらないように気を付けます”とでも書いてやろうか?

「まだ残ってる人がいたの?

はあ……もう下校時刻とづくに過ぎてますよー」

暫くうんうんと悩んでいるたから、突然入口の方から声をかけられた時には驚いてしまった。

日も落ちていたし、部活動時間もとくに過ぎていただけに、用務員でもない人に声をかけられるのはかなり意外だった。

「八木カナ……」

この、いかにも真面目ですオーラを出した女子がシイナ先生の妹の八木カナ。

見た目……と言うよりは表情が物語ってると思うけど、結構な堅物だろう。まあ、ルックスだけならシイナ先生とは真逆の——甘栗色のサイドテール、そして低身長が相まって”仔犬みたいで可愛いらしい”と、特に女子から人気らしい。——存在ではあるものの、確かに面識が薄いのもあって俺は苦手意識を拭えないでいる。と言うか、この人が男子を妙に厳しく見すぎ、との噂があるんだが。

左腕に着けてある腕章を見るに、生徒会の活動か何かだろう。前に、副会長当選していたのを思い出す。ま、ご苦労なこった、ってね。

「シイナ先生に言われてな、居残りだよ」

と、まだまつさらなままの原稿用紙をひらつかせてみる。流石にすぐにソレと判ったのだろう、大きなため息をつかれる。

「あなた、何かやらかしたのね。……お姉ち——八木先生には私から言っておくから、もう帰ってちょうだい。遅くなると親御さんもご心配されるでしょうし」

言ってることはやけに真面目だが、言ってる内容は予想外に優しくかった。

今まで感じていたイメージや、後は永遠原稿用紙に向き合っていたストレスから、と言う名目で少し、イタズラを思い付いてしまった。

「お前、俺の事好きなのか？」

「なっ……っ！！」

言った途端、見る見る内に顔が真っ赤になってゆく。

流石にこれは逆鱗に触れたか。やってしまったなあ、なんて多少の後悔と、もうどうにでも無くなれとの諦めが渦巻く中、雲行きだ

けは怪しくなつて――

「どどど、どうしてしようなるのっ?!」

いくどころか、これまた予想外にあたふたしまくる八木力ナ。

凄く慌ててるし、噛んでるし、なんだか逆に罪悪感に捕らわれる羽目になつてしまった。

「冗談だつて。それと、俺、そこだから」

廊下側の窓から見える、校舎裏にある建物を指差す。

素っ気なく振る舞おうと、咳払いをした後にあつそ、なんて言つて教室を出ていく副会長サマ。最後に見えた顔の赤さはきつと、羞恥によるものだけじゃないつてことはよく解つた。……後が怖いな。

結局、あの後延々と時間を食いつぶした挙げ句、提出しに戻つて来てみればシイナ先生は先に帰つてしまつてたらしい。他の先生に聞けば、八木力ナが報告に来た後に帰つて行つたらしいが。――仕返しなのか?

急いで寮に帰ると丁度、おばちゃんが食堂の窓口を閉めたところだつた。シャッターを叩いて呼んでみたのだが、見事に無視されてしまった。……ここ、時間にだけは厳しいんだよな。

それで結局、近場のコンビニにお世話になることを決めたのだつた。勿論夜の外出には基本的に届け出が必要だが、窓から出ていくから関係ない。

そして肝心のコンビニだが、これまた普通に出ていっても十分ほどかかるのだ。まして俺達が出なきゃいけない場所つてのが

「暗い!」

……のだ、思わず叫びたくなるほどには。

窓伝いに進み、奥の柵を越えると学校裏の公園へと出る。公園も

相当に広く、ナントカ森林公園で名前だったはずだ。

それだけ広いなら外灯の数もそこそこあるだろう？って思うのは当然だけど、生憎寮から出られる場所は林のと真ん中。外灯なんて勿論無いし、道だつてあるわけじゃない。灯りが無ければ目印も無い、俺も慣れるまでは何回か遭難しかけたこともあるほどだ。

そんな中、月明かりと遠くの外灯に照らされて何かがうつすらと見えてくる。よくよく耳を済ませば妙な金属音も、そこから聞こえてくる。

気になつて近付いてみると何かが戦っているかのような……

「なんだよ、あれ」

近付くにつれ、だんだんとそれが人影ではないかと思えるようになってくる。けどもし、これが人の動きだとしよう。それって少年漫画とかのバトルシーンじゃないか、馬鹿馬鹿し——

「くっ……！」

「——！？」

けど、突然目の前に転がってきたモノは、誰の目から見ても紛れもなく

「ヒト……？」

だった。

「しまった——」

見惚れてしまっていた。ただ白いと、そう思った。

月明かりに照らされたその真白いそれは、俺の注意力の大半を持つていつてしまう。だから、”もう片方”に気付いたのは、その右手に装着された大きな籠手ナックルが俺に向かつて振り上げられた時だった。手の甲の辺りからは鋭い針が生えていて、当たったらいかにも痛そうだ。……じゃない、痛いんだ。何考えてるんだろ、俺。

——思えば、今日と言う日は普通に考えても最悪だった。朝遅刻するし、授業中に当てられれば問題に答えられず恥をさらし、昼は狙つてたコロッケパンが売り切れてて、……代わりに買った”購買部の底力パン”——あれは酷かった。そして放課後はショージの奴

に付き合ってたら覗き未遂、反省文は届けられず晩飯も抜き。仕舞いには訳もわからず殺されるのか、俺……？

それにしても、目の前の”少女”はまるで止まっているかのようにスローだ。アドレナリンが過分泌すると止まったように遅く感じるらしいが、これがそうなんだろうか。

「って、ホントに止まってる？」

「早く……逃げ、て……！」

「え、あ、ああ！」

白い少女の顔があまりにも必死で、俺は考えるよりも先に脚を全力で回していた。

「一体、なんだったんだろ」

ふと手元を見れば、レジ袋にオニギリが3つとペットボトルの麦茶が入っていた。人間、無意識にでも動くことはできるんだなあ、なんて、変な所に感心してしまった。

何か考えだそうとすると先程の事しか思い浮かばない程には気になってるらしい。

——本当に現実だったのだろうか？

——見間違い？それとも何かの勘違い、思い過ごし？そもそも勘違いしたり思い過ごせるモノだったろうか？

——映画の撮影……にはしては、マイクもカメラも、それに、証明が無くちゃ無理、だよな、きっと。

——それじゃ、なんであんな、二人とも俺より断然線も細かったろくに、女の子が戦い合ってたんだ？しかも漫画の中から飛び出してきたかのような戦いを。

そんな考えがループし続ける。自分に妄想癖でもあるのかも、な

んて事まで考え出すともはや、苦笑いも出てこない。

だから別に、現実を確かめたかった訳じゃない。誰に云うでもなくそんな事を呟いて、寮までの帰り道からちよつと外れたところへと足を進める。

ここら辺りだろうか？正直こんな広く、目印も無い所じゃ正確な位置なんて分からないだろう。だいたい、本当に暗いし。それでも周りで、さっきのような大事が起きてない事だけははっきりと確認できた。

多分その時は、あの白い少女をもう一目、見たかっただけなのかもしれない。ちよつとした希望と恐怖心を押し込めて、元来た寮の近くの柵をよじ登る。

「え？」

部屋に入った時に捉えた情報は、もう一度見たかった真っ白な髪と衣装。そして青空のように透き通った瞳と、俺のでもショージのでもなさそうな、

”ぐううう……—”

可愛らしいほどには貪欲な、お腹の音だった。

どうやらそれは、俺の希望と恐怖心、そして買ってきた弁当を消し去るには充分過ぎたらしい。

lim1: Encounter You (後書き)

「……食べるか？」

思わず聞いてしまった。

さっき見た表情が、今はこんなにも間抜けに見えるのも不思議だ。おにぎりを出してやると心なしか、目がキラキラしだしたようにも伺える。そしてそれにそのままかぶり付くと、今度は少しずつ濁った目へと変化してゆく。

「うん……」

「違う違う、ここをこう剥くの」

コンビニおにぎりの食べ方をレクチャーするなんて、人間多しと言えども中々にレアだと思う。最近じゃおにぎりを買ったことの無い人は殆どいないんじゃないだろうか？

「ほら、これで食べてみ」

中身を取り出してやっても食べる気配は一向にない。その間にも空腹音は鳴り響く。

仕方なく、さっきこの娘がかじって跡になってしまった部分を口にする。うん、うまい。

その後に残りを差し出してみると、おそろおそろだが口へ運んでいってくれた。パリっ、と効いた海苔の音に一瞬びっくりしつつも「……うん」

頷いて、二口目、三口目と次々に運ぶ。具を口にしてしかめっ面になってしまいが直ぐに嬉しそうな顔へと変わってゆく。

そして二つ目、三つ目。

「ごちそうさま」

「ああ、お粗末様」

って、俺の分……――

lim2:Lost Children

目の前で、一人の女の子が体育座りをしている。

ただし、肩甲骨辺りまで伸びた真っ白い髪をツインテールに纏めてあり、その瞳の色は青。明らかに日本人離れし過ぎだ。

レオタードのような密着した衣装は所々擦れたり汚れたりしていて、とても直視できたものではない。又、間接や胸、腰辺りは鎧のように金属に覆われていて、そして決め付けと言えばソレ。

「これって、やっぱり本物？コスプレ用とかじゃなくて？」

俺が問いかけるとコクンと頭を揺らす。あまり認めたくはないのだが、本当に本物であった物騒なモノ。

白い彼女はおもむろに立ち上がりそれを掴むと、鞘だろう筒から本体を抜き出す。そして大上段に構え、

「――！」

ふっ、と軽い風切り音。そして俺の背後で音を立て崩れる二段ベツドの上段。……どーすんだよ、これ。

本人は此方に振り返り、「ほらね？」なんて顔してるんだが、俺は彼方あいつに対して啞然とするしかなかった。

因みにあえて言うておくが、この二段ベツド、上がショージだ。

俺より体格の大きいショージが普通なら下なのだが、そこはショージだから許してやろう。

それとそのショージだが、俺が部屋に帰ってきた時からピクリとも動いていない。俺がいない間にいったい何が起こったのだろう。

……ともかく、いつになれば、彼はこの悲惨な現実を共に直視してくれるのか。

そして俺が何も言えなかったのが悪かったらしい、彼女は再び大上段に構えると、って――

「やめいっ！」

「？」

可愛らしく首を傾げてみてはいるものの、とにかく人は切っちゃダメ、絶対。

物体”S”は、かろうじてショージの頭上ギリギリで止まってくれたようだ。茶色い線がヒラヒラと舞う。……赤い筋は額に描かれなかったみたいなので、ひとまずよかった、と言っても大丈夫だろう。ショージだし。

止めを聞いたら聞いたで、その物体を鞘に納め再び、何事も無かったかのように同じ姿勢へと戻る。またにらめっこが始まってしま

う。

自ずと少女の全身を見直してしまう。

まるで登山でも——もつと酷く言えば冒険でもしてきたかのような汚れた方。それにそれ一枚なのだろう、よくよく見てると体のラインがはつきりと……——

って、俺が知りたいのはそんなことじゃないだろう。煩惱を消し去る様に頭を振る。

「なあ、君はさっきの」

「おい！一体この娘は誰なんだ？！いきなり扉が真つ二つになった——俺のベッドがあ！？」

「？」

さっきの戦っていた娘だよね？……と続く筈の言葉は、不本意ながらもショージの復活に遮られてしまった。

とりあえず、先ずはショージを落ち着かせるのが先、かな。

「落ち着け。いや諦めるショージ、どうやらこれは現実らしい」

勿論、その半分は自分に言い聞かせる。

「落ち着いてられっか！何処の世界にいきなり扉斬って入ってくる銀髪美少女がいる？！そのベッドもコイツのせいなのかそうだろう！？」

自分よりリアクションが大きい人が近くにいると、妙に冷静になれる。そんなことを何処かで聞いた気がするが、どうやらホントら

しい。こっちの興奮は冷めていく一方だ。

それとなく美少女、なんて言っていたのはこの際華麗にスルーさせてもらおう。

それより聞き捨てならない事を聞いたんだか——扉を斬って、だつて？

部屋の入口を覗いてみると、これまた綺麗に真つ二つになった扉が崩れていた。

「……だめだった？」

「つたりめーだっ!!」

ショージの怒声にびつくりしたのか、困った様な顔を向けてきてくれる。

だが残念な事に、その非常識さを庇えるほど、俺は男ができていなかったみたいだ。逆に目線を合わせないようにするので必至になつてみる。

「ごめんなさい」

ともすれば、今度は立ち上がって綺麗なお辞儀。そろそろ、この娘が本格的に分からなくなってきた。

だいたい、そんなんじゃない火に油だ。あのショージがそれで許すはずが——

「分かった！今回は許す」

「許すんかいっ！」

「ありがとう」

許してしまった。こんな時つて、俺はどんな反応をしたらいいんだろう？

再び見る事になってしまった綺麗なお辞儀を目の前に、そんな無意味な思考を試みたのだった。

寮管は五分ほど経った後に部屋へと上がってきた。

部屋の――と言うか扉の状態を見ただけで胃を押さえていた。「ここもか」、なんて不吉な言葉が聞こえたのは、きつと気のせいだと思っただが、これで持病の発作か何かが起きたりしなければいいな、と。

お約束だとは思ったけど、女の子は咄嗟に布団にくるめてしまった。まあ、寮管も気にした様子は……いや、気にする余裕がなかっただけだろうけど。

壊れたベッドや扉を、とりあえず部屋の隅に置いて片付けた事にしておく。幸い木屑とかは殆ど出てなかったようだけど、ちゃんとした方付けは明日にしよう。

ショージに関して言えば、まだ九時前だと言うのにぐっすりと眠ってしまった。こんな状態でも寝れる、奴の神経がよく分からないと言うか、コレがさつきまで気絶してた奴なのか？

とりあえず一段落着いたようなので、俺はもう一度コンビニへと行くことにした。

「どこ、いく？」

そんな言葉と共に、意識だけが俺を追ってたのか、ちょっと前屈みになりながら小首を傾げてくる。それが不覚にも可愛いと思ってしまった。

それより、その言い方だとまるで着いて来るように聞こえるんだが。

「メシ、買いに行こうかなって思って」

「ごはん……？」

「ああ、さつき君が食べちゃったしね」

それに何を感じたのか、また妙に落ち込んだ風な表情を見せてくる。

「……だめだった？」

「いいや、別にもういいよ。お腹空いてたんでしょ？」

無言で、それでもちよつと遠慮がちに頷かれる。

その反応を見た後に、窓枠に足をかけて乗り越えよう——としたのだが、何かに突っ掛かったよう感覚に一瞬、後ろへ倒れそうになる。近くにあつたベットの柱につかまり、なんとかその場に堪えてみせる。

振り返るつて見てみると、制服の背中部分をつままれていたようだ。片手でこれだけ強くつまめるあたり、この娘はかなり力があるんじゃないだろうか？

「どうしたの？」

「わたしも、いく」

そんな気はしていたが、やっぱり着いて来る気だつたようだ。まあ、ここに留守番させるよりかは安心だろう。

「……分かった。ここから出るけど大丈夫？」

「だいじょおぶ」

それは愚問か。きつともつと跳んだり跳ねたりしてたんだろうから。

そのまま着いて来るかと思いきや、机の横に立て掛けてある物騒なモノを脇にかかえだす。

「それは置いていきなさいっ」

「……だめ？」

「ダメ！」

この娘には、一般常識とやらが尽く欠けているらしい。って改める必要も無いか。

「ところで君の名前は？」

コンビニからの帰り道、一番大事なことを聞きそびれていたこと

に気付く。むしろ、今の今までそれに触れなかったのが不思議かもしれない。

因みに、例の物騒なモノはちゃんと彼女の脇にかかえてある。何度言っても聞かなくて、結局俺が折れただけなのだが。

大丈夫だろうか？なんて考えてもいたけど、偶然にも外では他の人には会わなかった。それに格好が格好だからだろう。コンビニの店員も最初こそは目が点になっていたが、会計の時は苦笑いされただけで済んだ。……暫くはあそこへは行けないか。

「なまえ……？」

「そ。俺は峰渡礼鈴。——いつまでも”君”、とかって呼ぶのも変だしね」

すると君、君と呟き出してしまふ。どうしたんだ？

「……しろみ？」

「いやいや黄身じゃなくて——って、もしかして”しろみ”って名前？」

ふるふると頭をふり否定される。と言うことは、それはネタとして狙ってたのだろうか。今一この娘が掴めない。

「あ、後、さつきそこで戦ってたのって、やっぱり君だよな？」

「……ん？」

ついで、さつき聞こうとしたことも聞いてみる。だが思いの外反応が鈍すぎるみたいだ。

「ほら、もう一人が俺に殴りかかってきたの、止めてくれたでしょ？」

「……？、？」

どうやら本当に分からない、と言うか分かっているらしい。

……確かに、よくよく振り返ってみても、あの時戦っていたであろう彼女とは雰囲気全然違う気がする。

そんな事を言っても、あの時に見た白い髪、翳^{かざ}していたこの剣、それに、あの必死な声——

全文偶然の一致なのかもしれない。けど、こんな真っ白い髪の女

の子なんてそうそう日本にはいないし、ホンモノの武器だって普通目にしない。声は……はつきりと覚えられるものでないにしろ。

「まあいいや。とにかく、君の名前を覚えてくれないかい？」

「……なまえ、ない」

「え？名前が無いって、どうゆう？」

疑問をそのまま口にする何故だか、今までで一番困った顔をされる。

まあ、つくづく変な娘だとは思ってはいた。けど、まさか、名前まで無いなんて事は流石に信じ難いが。

「ひつよー、……ない？」

と、理由を聞いたら疑問を疑問で返されてしまった。

「う、うーん……、必要だと思うよ？」

「そお？」

頭を左右に揺らしながら、再度ウンウンと深く考え始める女の子。

……と思いきや、明らかに質の違う音が、大きく下の方から鳴り響いた。

「おなか、すいた」

もう苦笑いしか出なかった。

仕方なく、帰り道の途中、公園内にあるちよつとした広場で早めの、遅い夕食を取ることにした。

袋からおにぎりを二つ取りだし、片方のシャケを渡す。もう片方の梅干しは俺が頂くことにした。……って、両方とも俺が買ったモノのハズなのだが。

「それにしても君、よく食べるなあ。」

「ん？」

ペースはそこまで早いわけじゃない。だが、見ていて気持ちのいいほどしっかりと食べてゆくのだ。……本日五個目へと突入したおにぎりを。

もちろん合計で六つしか買っていない。つまり、結局俺は一つしか食べれていないのだ。なんだか、今日はホント、やけに虚しい日

だなあ、なんてのも今さらか。

そんな食べっぷりを見ていてふと、変な思いつきをしてしまった。

「んー、じゃ、”くー”、つてのはどうだ？……いやく”う”か？」

「くう……？」

「そ、君の名前。勝手に決めちゃ駄目だった？」

よく”食う”、”空”腹の女の子。

安易すぎるし、どうも子犬や仔猫っぽい名前にしか聞こえない。

けどこの娘にはそれがまた妙にピッタリな気がした。——つて、歳

の近そうな女の子に子犬仔猫、とは少々酷い気もするが。

くう（仮）は何度か自分の名前を口に出して反芻すると、今度は俺と彼女自身を交互に指差しお互いの名前を繰り返して唱える。何が楽しかったのか、繰り返して、笑っていた。

初めて見る、野に咲く一輪の百合の花——

その笑顔が枯れるのは、見惚れてる時間すら与えられない程に短い間だったのだけは、嘘じゃないだろう。

ダンボールか、それとも発泡スチロールか。そんなものを割った時のような鈍い音が耳についた。

——赤い手が、身体から生えるなんてありえるだろうか？

——それはやっぱり、くうが異常な生物だった、と言う事なのだろうか？

その手が身体の中へと吸い込まれるや否や、くうは力が抜けたかのように、いや多分、本当に抜けていたのだろう、地面へと倒れ込んでいった。

空気が、変わっていた。

「く、う……？おい、くうったら、そんなとこで寝ると風邪ひく、ぞ……っ？」

振り返らない方が、もしかしたら恐怖することは無かったのかもしない。

それよりも先に気付くべき、いや、認めるべきだったんだ。くうは、先ほどの”片方”で、ここは”戦場”だった、つてことを。

改めて見て、初めて分かったことが二つほどあった。

気持ち悪い顔だと思っていたのは、どうやら仮面らしい。そしてまるで、その仮面から生え出てきているかのようにも、又は血を吸い上げたかのようにも見える、真^{まっか}つ紅な髪。

そしてもう一つ。胸の辺りが裂けて校章は確認できなかったけど、この服って、学校指定のジャージなんじゃないのか？

振り上げられていた右拳は、何故だか先程のナックルは無かったが、今度はあの時のようには止まらないだろう。下手なスロー映像の様に俺を狙う。

「———！」

体だか頭だか、とにかく転がり込んだお陰か、そうゆう急所には当たらなかつたみたいだ。その代わり、右肩から下の感覚がない。

……良かった、腕は付いてる。

肩でも打ち抜かれたのだろう、一瞬後から一点が熱くなってゆく。

「ア、アアアア——！」

獣のような叫びと、トドメと言わんばかりの大振りな拳。握られてるのは左の拳。ナックルが無いさっきの一撃とは威力も、——ヤバさも、桁違いだろう。

「くう……」

ふと顔を上げると、ちょうど目の前にくうの顔があった。その顔を、姿を、無性に瞳に写したくなる。

——赤く塗られた白い少女の

——その金色の瞳が近付く

——唇に、温もりが触れていた

心臓が締め付けられるような、そして数字が一つ少なくなるような、——体から溢れ出る力が、何かに邪魔されるかのような。

その行為がキスだと認識できる頃、目の前の現実^{ぜっぽう}は、大きく霞んでいた。

「死なせないから——」

拳が、俺の頭の真上で静止している。そんなのは本日二度目だ。

這い出て見上げると、赤い髪の女の腕には蔓のような物が絡まっていた。さっきもこれで止められていたのだろうか？

腕から飛び出していたその元を辿ると、どう言う事か、くうの持つ剣の切っ先に繋がっていた。

「くう……？」

「抑えてるの、……辛いから、早く——！」

元の体勢が悪かったのか、俺は半ば、体ごと突き飛ばされる様な形でくうの後ろに下げられた。

俺がくうの後ろへと突き飛ばされた直後には、蔓は女の奇声と共に千切られていた。

——ちよつと待ってくれ、状況が理解できないっ！だつてくうはさっきこの赤女に腹を……？

「くう、そのお腹——」

その後ろ姿を見上げて、中心が破れ背中の一部が露出しているだけだった。

「くう」じゃない……」ネルヴェ」

「え？ネルヴェ？一体どうゆうことだよ！？」

「話は後——彼女、暴走してるから」

そう言うなりくう、いや、ネルヴェ？は赤女に斬りかかる。火花が散り、それが左のナックルで剣を弾いたことを物語る。その後力ウンターを入れるかのような右足での回し蹴り。それは当たったのか、はたまた上手く躲したのは判らず、それ以降の動きなんて目で追うのが無理だった。

ネルヴェ？暴走？お腹を貫かれた傷は？

俺は悪い夢でも見てるのだろうか？まるで最初の、さっきの戦いをリピートしたかのように、くうの感じも……あんな感じ、だったような？

何回かぶつかったり離れたりを繰り返しているのを見ると、大まかな動きだけは判るようになってきた。勿論攻撃の瞬間とか、後は攻撃が入っていたか、ぐらいしかざっとは確認できない。

バトル漫画のページでも捲っている風景に、次第に強まる肩の傷みがそれは現実だと教えてくれる。

「何なんだよ、おい——」

結構な距離もあり聞こえたハズもないだろうに、くうは赤女に大きく横風ぎをすると、その勢いを使って文字通りの一息で俺の目の前へと後退してきた。

「なあお前は……一体何者なんだよお？ 一体今はどうなってんだよっ？！」

「L I M 。今は、彼女を止めようとしてる」

「り、りむ？それに止めるってこっ、説得とかじゃ——」

「煩い。……時間がないから、黙ってて。」

「時間って、何が——」

言うのが早いか、再び踏み込む。今までののが本気じゃなかった様な目が慣れた俺ですら終えない程のスピード。明らかに別人の動きだった。

先ほどまで互角以上にやりあってた赤女ですら防ぐのが精一杯のようだ。が、それも長くは続かない、突然のように叫び出す赤女に、次瞬には左腕がついていなかった。

予想外に、溢れる血は少なかった。

唯一剣撃を弾ぐことのできた装甲は切り落とされ、彼女には自身を守るためのモノが無くなってしまう。そして、避ける間も無くその胸に剣を突き立てられる。

——ミストルティン宿木

そう、聞こえた気がした。そう、頭の中にテロップが流れる。

その剣は胸を貫通した様子もなく、直ぐにそのまま鞘に納めらる。同時、その場へと崩れ落ちた赤女は、その場を赤い池へと変貌させた。

”ネルヴェ”が戻ってくる。

目の前に立つ少女は返り血を浴びてすらいない、真っ白なままだった。唯一赤い腹回りが、その白さを余計に恐ろしく立てていて、

「来るなっ!!」

と、青い瞳の少女を拒絶していた。

「れ、お……?」

「リムだか何だか知らないけど……お前は——お前は、人を殺して平然な顔をしてられるのかっ!!」

「——っ!」

事実を言われた事より、俺に怒鳴られた事に驚いているだけかもしれない。あるいはその事実の善悪すら知りはしなかったのかもしれない。

彼女は只々、迷子の子供のように顔を歪ませ、その足で一步踏み出すだけだった。

「近寄らないでくれ。……もう、目の前に現れないでくれ——っ!」
「なんで、れお……?」

そして差し伸ばされるその手を、俺は叩き落とす。それで最後だった。

肩の痛さや目の前の死体で酷い吐き気を覚える。

とぼとぼと、見失った目標親を探すその背中を、同じく迷子になっ
てしまった俺が追える訳が無かった。

l i m 2 : L o s t C h i l d r e n (後書き)

からん、という乾いた音と共に、漆黒の髪の少女が起き上がったのは、それから294秒後のこと。
当然のことだが、俺の顔も声も、しっかりと覚えられていた。

lim3:Rouge Reward

「俺の前髪があゝ?!」

酷い頭痛と吐き気、寝不足——と言いか完徹明けの混沌とした常態で、ショージの大声はいつも以上に頭に響いてきた。

ふとショージのを見て、くうが降り降りしかけた剣のことを思い出した。その時のことを考えると、自然と自分でも不気味な笑みがこぼれてくる。

「おいレオっ！俺の前髪知ら——って、どうしたんだお前っ?!顔真っ青じゃねーか!!」

「寝不足なだけだよ……頭に響くから大声はやめてくれ」

「お、おう、悪い」

散々な程に吐いた。最後の方なんて、液体と一緒に白いモノまで出てきてしまったぐらいだ。

肩は——帰ってきてからずっと冷していたからか、大分楽になっていた。今は多少痛むだけで、ちゃんと腕も動いてくれる。

昨日の夜に関係していた”痛み”によって、その事を思い出す。彼女は、くうは確かに腹を破られていた。今でもその紅い腕は^{まぶた}瞼の裏に焼き付いて消えない。

……でも、次見たときには傷なんてこれっぽっちも無くて、でも、服にはちゃんと穴も空いて、つまりあの一瞬で治った?——ああ訳が解らないっ!!

それで、くうはネルヴェだと名乗りだすし、あんな長い剣を軽々と振り回して、赤女と戦ってて、そいつの腕が斬られて、最期は——

「——オ、お……レ……っ!大丈夫かレオっ?!」

「は——っ!……悪い、少し意識飛んでたかも」

駄目だ、ショージなんか心配されてちゃ。しっかりしろ、峰渡礼於!

シヨージには休んでろと言われたけど、顔洗って着替えたら幾分か気分は楽になった。

朝食は流石に食べれなかった、……と言うか、今は何を見ても食べる気になれないだろう。牛乳は一応飲んだし、なんとか学校には行けそうだ。

それに、今一人になるのはなんだか嫌だった。

寮から出て直ぐにクラスメイトと出会^{でくわ}す。案の定、そいつらと話していると気が晴れる気がしたし、実際楽になった。

昼頃にはこのダルさも無くなり、昼飯も、いつも程じゃ無いにしろ、ちゃんと食べられる程にはなっていた。

なーんだ、全然なんかなくなってるじゃないか。なんて、すっかり安心しきれていた。

午後には昨日の事なんて完全に思考の隅へと置いてきぼりにして、ホームルームが終わるまでの約三時間、ぶっ通しで寝続けてしまったようだ。

突然の、とてもサプライズな来客に起こされたのはそんな折だった。

「峰渡君、椿さんが呼んでるよ」

「つば、き……?」

つばき、つばき、——椿? って、あの椿か?!

慌てて教室の入り口の方を見てみると、そこだけ教室中の、特に男からの視線で出来上がった空間が広がっていた。
トワイライトゾーン

——椿紅花^{うづつばな}

学園では多分、知らない人のいないほどの美人だ。
整った顔立ち、どこか品のある、しかしそれでいて当たり障りの

全く無い人柄、口調。女の子にしては少し高めの背丈と、それに見合った嫌らしさの感じさせない、控え目な体型。そして何より、その腰まである長く綺麗な黒髪。典型的な、最高の和風美人だ、と評判なのだ。

『椿紅花の笑顔を見た者は、一瞬で彼女の虜になる』と噂もあるのだが、その通り笑顔と言える笑顔を見せる事がまず無いのだそうだ。

そんなこんなで少なくとも我が校では男の憧れ、むしろ存在が伝説化している人物の一人である。——格言う俺も、そう言った周りの熱気に同意してるし、憧れの人物にしている。

だがしかし、そんな椿紅花が俺に何の用だろうか？彼女の表情は好意的とはあまり思えず、それに周りからの視線もイタイ。

ぎこちなくなるのも仕方なく、気持ち早足で近付いてゆく。

「起こしてしまい申し訳ありませんでした。少しお話したい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

この状況で「ダメだ」なんて言える人間ヒトがいるなら見てみたい。

それに生憎、俺はそんなタイプになれるほど漢オトコができていない。どちらかと言えば、「こんな状況で断る奴が何処にいる！？」と、声を大にして叫びたいほどだ。

そんなことはもちろん叫ばず、無難な二つ返事をして彼女に着いて行く。

そのまま階段を上ってゆき、連れてこられたのは何故だか屋上だった。普通は入れないハズの所、邪魔が入らないようにとわざわざ職員室から鍵を借りてきたらしい。一体どんな手を使ったのやら……

屋上をある程度進んだあたり、丁度真ん中だろうか？椿紅花は立ち止まり、ゆっくりと振り返る。自然、こっちの背筋もピンとしていた。

「まず初めに謝罪を——……昨日は、すみませんでした」さくじつ

「えっ、ちょ——」

いきなり椿紅花に頭を下げられる。

え？俺は何か謝られるようなことされたっけ？むしろ、昨日は覗こうとしていただけに、謝るなら逆にこっちの方だ。

でもって結果、未遂となった訳だし、それ以外の昨日のミスは全て俺のせいだ。じゃあ何が？

「右肩、痛みませんか？」

その台詞と共に、右肩を撫でられる。

そこを慈しむような、壊れ物を触るかのような。そんな儚い顔で心配をされることに、二つの意味でドキッとせざるを得なかった。余計、混乱は激しくなる。

「なんで、……右肩を？」

理解できない恐怖に包み込まれる。

忘れ去る努力をした筈だった記憶が呼び戻される。

彼女は、持っていた鞆から一枚の仮面を取り出した。そう、見覚えのある——目に焼き付いて消えない、あの仮面を。

漏れだした声は、自覚しても止まらない震えに満ちていた。

「確信が持てました……本当に、ごめんなさい」

いやいや待ってくれ、なんで彼女が謝っているんだ？その仮面を着けていたのは、髪まっかの真っ紅な、赤女なのに——？

「それと、これは本来貴方より、あの方に贈る言葉ですが。本当に、ありがとうございます」

「ちょ、ど、どうゆうことだよ！？いきなり謝ったりお礼言ったり——なんで君が？昨日のこと——っ?!」

その時は本当に目を疑った。

仮面を着けた途端、彼女の髪は紅く——まるで、昨日の悪夢がそのまま現れたかのように——染められていた。

ただその時と違うのは、この声が獣じみていず、穏やかな”椿紅花”のモノであること。それと、ジャージバケモノが制服か、ぐらい。

「驚かせてしまいますよね。でも——私たちはそうゆう生物バケモノ、なんです」

バケモノ、って……——

そんな事を急に見せ付けられたって、頭が追いついて行かない。それに、昨日の赤女は腕を——そうだ、腕が無いハズじゃないか?!「ま、待ってくれっ! だいたい昨日の赤女なら腕を切られていたじゃないか?! 君にはちゃんと腕がある! 何より、……生きているじゃないか?!」

言いながらも昨日の最期の光景を思い浮かべる。死んで、いたよな?

「Like Immortally Man」——略式で「LIM」[△]。それが、私達の事です」

Like Immortally Man——まるで不死身な人——? そ、そんなの冗談じゃないっ!!

そのあまりにも子供染みた名称と、それを説明として言い切った目の前の人物に対して、激しい嫌悪感を抱きそうになる。

いやでも、くうも……ネルヴェも”リム”って言ってた。ソレって、ことうゆうことなのか?!

目の前の赤女が仮面を外す。その真^まつ紅な髪色以外は、ここに俺を呼んだ椿紅花、そのものだった。それだけに目の前の女の子は、質の悪い冗談を言ってるとしたか考えられない。

「657秒——

それが、私の不死身でいられる時間です。その間ならば幾ら斬られようと、例えば心臓や頭が無くなっても、それこそ挽き肉にされても死にませんし、直ぐに再生してゆくんです。——こんな感じに」
鞆からカッターを取り出し、それで自分の首を切る。止める間もなく行われたそれで、一瞬だけ鮮血が噴水を造る。

が、その傷はあろうことか数秒足らずで塞がってしまったのだ。ハンカチで首回りを拭くと、本当に今、首筋を切ったのが嘘の様にしか考えられなくなる。もう、何が現実なんだか判らない。

「じゃあ、昨日のくう……の、剣で胸を刺されたのは? あの後、赤女は動かなくなってたぞ!」

「それは、私にもよく分かりません。暴走を止める技、だったのだ

ろうとは思いますが……

その証拠に、今、私はこうして貴方に話をしていくことができます」

昨日から暴走、暴走って――

「じゃあその”暴走”ってのは何なんだよっ！昨日もくうは暴走がなんたらって言ってたし――」

「その前に」

こっちが説明を要求するのが判っていたかのように、俺の言葉を遮り釘刺そうとしてきた。

「今から貴方に聞かせる話は他言無用に、……していただけますか？」

迷わず、俺は力強く頷いた。真実が分かるなら、いい、誰にも言わないと誓ってやる。

それに元々、これは誰にも言えない類いの問題だ、ってのは分かりきっていた。

「ではまず。」

……私達は、少なくとも私は、元々普通の人間でした――」

気付いたら、俺は駆け出していた。

公園、寮とその周辺、市街地も走れる限り走りぬけた。

――探さなきゃ、くうを……っ！

『先程の通り、私達はこの状態の時は普通、絶対に死にません。あの方のお腹の傷が治ったのも、私達のチカラの一つです。……それでも、あの方の治癒能力の高さは少々異常でしたが』

殺してはいなかったんだ。相手はちゃんと生きていたんだ。

先走って、悪いことを言ってしまった。いや、悪かったかどうかは今はもう分からない。けど、間違ってたのは俺の方じゃないか――！

『LIMへと解放した時、見た目の変化以外には三つ、特徴があるんです。身体能力の向上、再生速度の向上、そして特殊能力の開発』
『待つて、その特殊能力、って言うのは？』

『あの方も、剣から草の蔓の用な物を出していましたよね？あんな感じです。私のは――少々使い勝手が悪いですし、地味なのであまり使い物にはならないですが……』

もう一度、公園の、昨日の場所へと戻ってみる。

「くう！！返事をしてくれっ！！」

いるかどうか分からない。ただ、お前は正しいことをしてた筈だ。俺が知らなかったただけなんだ、そうだろう？！

だったら！……だから、ただ、それを伝えたいんだ！

「くう……出てきて、くれよ……っ！」

気付けば、昨日の場所へと戻ってきていた。

昼間降っていた雨のせいでベンチはびしょびしょになっていたが、構わずそこへと腰を下ろした。下ろしたと言うよりは、立っていられない程に脚が疲れきっていただけのようだ。もう、立てなかった。

『暴走――今一番、知リたかったこと、でいいんですよね？』

『……ああ。くうは、結局何も教えてくれなかった。だから今、その真実が知りたいっ！』

何も教えてもらう前に、何も聞く前に、俺は彼女を拒絶してしまっただけ……。せめて、それが何で、彼女が何と戦っていたのか。それだけでも知りたい。

「——今のこの状態は、時間制限があるんです」

「そう言えばさっきも、650秒がとか言ってた、よね？」
「はい。」

657秒——これも人それぞれですが、大抵10分前後が目安のようです」

「あいつも、くうも時間がないって言ってた」

「そう、ですね。私達の闘いは言わば、ウルトラマンの様なモノなんです。ちよつと長めの」

あの椿紅花が、こんな平民な例えをするとは思わなかったもので、張っていた肩肘が少しだけ弛んでしまった。

「でも、何度も続けて使うと暴走してしまう。——昨日の、私の様に」

だが次の台詞を言ったときの瞳はとても辛そうな、罪悪感に満ちていた。

笑顔が……とか言われてはいるけど、その表情だけでも十分、惹かれるものがあつた。

「なんで椿さんは——その、暴走するまで？」

「これも、人それぞれ違うのですが。この状態になるには何かしら”条件”が必要なんです。」

私の場合、それが”仮面を被ること”だっただけで——」

俺の質問に対して、なんだか少し違うコタエを説明してきてくれた。だがそれだけでも十分理解はできる。つまり、彼女の場合は657秒以上、この仮面をかぶり続けたと言うことなのだろう。

「それじゃ、くうも何か？」

「あの方は……私が見る限り、いつ解放したのかすら分かりませんでしたが」

さっきから聞いていると、随分とくうが特別な感じにされている

気がする。

それは椿さんがくうに感謝し、あるいは尊敬をしているから、と聞こえなくもないものの、それでも何処か普通じゃないって言い方が目立っていたのは気になった。

『それで私は——恥ずかしながら、仮面を外すのを忘れたみたいなんです』

『忘れてた……？』

予想は当たったが、では何故忘れる程になってしまったのだろうか？確かに正確な時間なんて、時計でま見ない限り分らないとは思っただが。

『技の練習をしたくて……。何回も連続で解放していたのに気付かなくて、気付いた時にはもう、身体が言うことを聞いてくれてませんでした。本来なら、残り時間にだって注意してるんですけど、ね』つまり、タイムリミットが来たのにまた無理やりその状態——LIM化とでも言おうか——になっちゃったことが原因で、何か負担でもかかってしまうのだろう。

それを一番よく理解している椿さんは、その状況を精一杯笑い飛ばそうと、でも苦笑するのが限界だったようだ。それも、実に辛そうな顔で。

それは多分、別に椿さんが悪い訳ではないのだろうし、暴走する前も後も、辛かっただろうことは伺える。可哀想だ、なんて思うのは、もしかしたら失礼かもしれないなかった。

『暴走しても意識はあるんです。でも、身体が言うことを聞いてくれない——勿論、仮面を外すこともできませんし、仮に外せたとしてもダメだった筈です。戻ることは本当に希だ、と聞いてますし』

『じゃあくうがやったのって……』

何か暴走を止めるための技か、はたまたそんな特殊能力か——とにかく、ただ単に攻撃していたのではなかったらしい。

『あの剣で胸を刺された時、自分の身体が軽くなった気がしました。次に起きたら暴走も止まっちゃって——あの方と貴方にお礼と、謝罪

をしたかったんです』

そう、至福の表情で語りきった椿さんを見て、ふつつと込み上げてくる何かがあった。

『——そう言えばあの方は？この学園の生徒、ではありませんよね。えっと、烏滸わづがましいのは承知ですが、出来ればお会いさせていただいてよろしいです——』

彼女が言葉を言い切る前に俺は、屋上を飛び出していた。くうに對する罪悪感と、自分に対する怒りを抱えて。

背後に氣配を感じた。

「くう——!!」

が、そこ立っていたのは額に珠の汗を浮かべた椿さんだけだった。昨日、くうと過ごしたベンチに座っていただけに、過剰に期待していたのかもしれない。くうじゃないことは半ば理解はしていた。それでも俺は、椿さんに悪いと思いつつも項垂れてしまった。

そんな情けない態度を見せてしまったが為に、彼女から小さく、ごめんなさいと謝られてしまう。せつかく俺を追いかけて来てくれたらうに——ホントに俺、情けないな……

「あいつを」

「え——」

だからその代わりに、俺は全てを話す決意だけをした。口に出して、誠意を伝えたいと思った。

「くうを拒絶したんだ」

「そう、……でしたか」

それだけで全てを理解してくれたのか、追及はしてこなかった。やっぱり椿さんは、いい人だった。

「知らなかったんですね？——あの方の事も、私の事も。

仕方ない、とは言える立場じゃないですけど、……貴方が拒絶したのも、きつと当然、あの方だって分かっているはずですよ……！」

「それでもっ！！」

あまりに俺らしくない剣幕だったのか、椿さんは一瞬びくりと跳ねてしまう。

それでもそれを、一步も退かずに聞いてくれたのが、随分と心を軽くしてくれた。——何やってんだよ、俺は。

「……それでも、拒絶したんだ。

確証は無いけど多分、あいつは二重人格だ。普段くうと、”ネルヴェ

”。だからって、その時の事を何も知らなかった女の子を、本当は何も知らなかった俺が拒絶していいものなのか……！？」

椿さんの話を聞いて、頭の整理がついてくると一つの仮説へと導かれていった。それが、くうとネルヴェの二重人格。確証もないし、はつきりと確認もできてない。

けど何か、それは正しいんだと訴えかけているものがあつた。

だから俺は決意する。

「くうを探す」

「え……？」

何の脈絡も無しに言った一言に、椿さんも目を点にしていた。

「こんな現実、普通見ないし、聞きもしないかもしれない。……けど、出会って、拒絶した。

だから、探して、謝って、椿さんにも紹介して——その先の事なんて今はいい。でも、せめて名付け親の責任くらいは果たさなきゃねっ」

ぎこちない、精一杯の笑顔。つよがり

今の俺には、これしかできないから。だから——

「私も、お手伝いします」

そんな、迷子の、迷子探しの旅路に名乗りを挙げられた時、思わぬ天気雨が降り始めてしまった。

嗚呼、これだけ綺麗な夕陽には、こんなにも通り雨が似合うものなのか。

雨は頬を伝い、昨夜の雨で流れ薄れていった血の跡を、更に薄めていっただけなのかもしれない。

そんな、悦びと哀しみとの狭間だったから、だから、

「私も助けられた責任、果たさなきゃ、ですよね」

その後には掛かった笑顔に、その美しさに、可憐さに、総ての言葉と思考を失わされてしまった。

「改めて——椿紅花です。宜しくお願いしますね、礼於さんっ」

突然に、そして初めて呼ばれた固有^{フリーストネーム}名詞。

見たものを全て虜にしてしまうらしい、椿紅花の本当の笑顔。夕陽の相乗高価もあったのかな、なんて言うのが照れ隠しにしかない。

——悪くない。

何故だろう必至になれた俺には、十二分に豪華すぎる”ご褒美”だった。

雨は、とつくの昔に止んでいたみたいだ。

lim3:Rouge Reward(後書き)

「ところで、どうして礼於さんはあの方をそこまで？やはりその…お付き合いなさってる、とか？」

俺が落ち着いてきた頃を見計らって、椿さんがこんなことを質問してきた。

「いや、そうゆうのではないよ。ただ、何となく放って置けないって言うか——

そうそうあいつ、コンビニのおにぎりの食べ方すら分からなくってさ。名前だつて必要無い、とか言い出すから、俺が付けちゃったんだけどね、実は」

好きとか嫌いとか、そう言った感情とは何か違う気がした。他に言い方をするとしたら——そう、保護欲、とでも言ったらちようどもかもしれない。

「えと、コンビニのおにぎり、ですか？私も食べた事、無いんですけど……」

「え」

コンビニのおにぎりを食べた事の無い人に連続で会うなんて、流石に思いもよらなかった。実は結構多いのか？って、そんな訳ないよな。

「ま、まあとにかく、くうには俺との”何か”があるって。今ならそんな風に思えるんだ、何故だか」

「何か、ですか？」

こんなにも確信めいて断言できるのも不思議だ。けどこれは譲れない。何故ならそうだから、としか言えない。

「なるほど……」

つかぬことをお聞きしますけど、礼於さんは私の事をどう……？えと、まだ、その——」

そうか、いくら分からなかったとは言っても、椿さんは俺の事を襲っているんだ。これからの仲間としても、やっぱり彼女も不安なのだろう。

「椿さんは安心できる人、かな」

「へっ——？」

彼女らしくない、すつとんきょうな声。

さつきから妙に居心地悪そうだったし、大丈夫だよ、ってことで、素直な感想を言ってみたんだが。

そんなに意外な言葉だったのだろうか？

「そりゃ、昨日はあんなことがあったけどさ。今の椿さんは、一緒にいて居心地がいい、って言うか——気持ちいい？とにかく、そんな感じかな。まるで昨日のが悪魔なら、今は天使、って、それは失礼か」

正に言葉通り、それほどに昨日と今とじゃ天地の差があった。とは言え、自分で言ってる可哀しくなったから、ちよつと乾いた笑いを出してみる。

「そ、そそそうですか。……えと、その、今も恐がっていないなら、良かったです……——」

それにしても、今の言葉を聞いた椿さんの言葉は尻すばみになっていて、顔もやけに紅かった。それは夕陽のせいで、ってだけでもなさそうだし、そんなに照れる様な事を言ってしまったのだろうか？

なんだか此方まで照れてしまう。

「と、とりあえず！これからは宜しく、椿さん」

と、手を差し出したのに難しい顔をされてしまった。何か粗相でもしてしまったか？と不安になってくる。

「あの、紅花、とお呼び下さい、礼於さん」

だがそんな心配を蹴落とすように、椿さんはちよつと早口目にそんな事を言い出してきたのだった。つまり、呼び捨てにしるって事なのだろう。

「あー、うん。じゃあ、……宜しく、紅花、さん」
「はいっ！」

もう一度見た”ご褒美”は多分に紅みを帯びていて、握手をした手は汗ばんでしまっ、て、なんだか俺まで真っ赤になってしまった。

lim4: Futures Anxiety

「さて、事情を説明してもらおうか」
「何かがおかしい。」

「なんでお前は昨日、紅花様に呼ばれてたんだ？」
いつもなら語尾に”ビクリマーク”が付く様なショージが、信じたくないほど穏やかな声をしている。……認めたくはないのだが、実に爽やかなボイスだ。

「しかも紅花さんに”様”まで付けていて、流石に、コイツはどうしたんだ？と不安になってしまう。」

「まさかお前、隠れて何かしてる、わけないよな」
よく見れば、ショージの顔は穏やかなんかじゃなくて、目が据わっているだけだった。

——ああ思いだした！たしかショージ、紅花さんのファンクラブなるもの（もちろん非公公式）を創ってたよな。

「悪い事は言わない。何か疚しい事があるなら手を退け。今なら、間に合う」

何か軋むような音が聞こえるな、と思ったら、ショージの持っている箸から悲鳴が上がっていたようだ。

つまりどうやら、一見穏やかそうに見えるし声も爽やかだが、俺の何が原因だか相当ぶちギレてしまっているらしい。

……と言うよりも、間に合うってなんだよ、間に合うって。

因みに一昨日の反省文なら部屋に起きっぱなしだ。昨日も催促されていたが結局、出していない。それはもう、間に合わないのだから。

「だいたいだなあ、昨日俺はお前が疲れてるだろうと気を使って——」

「峰渡礼於さんはいらっしやいますか？」

これが、噂をすれば、って奴なのだろうか？

また良くも悪くも絶妙なタイミングで声をかけてくる紅花さん。ショージの言葉が遮られてしまい、微妙な空気の静寂が訪れる。

「ああ、いるよー」

紅花さんパワー、と言うべきか。

さっきまで賑わっていたハズの教室は、水を打ったかのような静けさになってしまっていて、俺の声は虚しく響いてしまう。

その後になってやけにヒソヒソと話し声が聞こえてくるんだから、この人つてのはよっぽど影響力があるらしい。

……って言うてはみたものの、これは下手をすればイジメにしか見えない。まあ、ヒソヒソの的はどうやら俺のようなのだが。

「お昼、ご一緒したいのですが、……少々遅かったでし——」

「……何いいいいっ！？」

だがその不自然な静けさは、紅花さん発した言葉により、不自然な騒がしさへと変貌したのだった。

確かに紅花さんが誰かを昼食に誘うなんて、聞いたこともない。

誘われた本人が一番驚いているんだが、その他大勢の叫びの方にも驚いてしまったんだから世話ない。

ところでさっきから、まるで他人事のように語ってはいるが、そろそろハサミやらカッターやらの音にも敏感になっておくべきか。

「いや、昼飯はまだ食べてないんだけど……ここだと——」

流石に、自分の命の危機は分かっているつもりだ。いや、まあその本人に殺されかけたことがあるだなんて、絶対に言わないけど。紅花さんを傷付けたくもないし。

肝心のショージだが——あ、箸折れてる。

しかし俺が心配するのも筋違いだったらしい。

ポケットから取り出した鍵と、天井を軽く見る仕草。どうやらまた、屋上の鍵を借りてきたようだった。前も思ったが、そんな簡単に、しかも私用で借りれるモノなのだろうか？

とにかく、少なくともココじゃない何処か、ってだけでも十分助

かるだけに文句はない。

「——それじゃ行こつか、紅花さん」

「……何だつてえええ！？」

今度のコーラスには、確実に殺気の類いが含まれていた。……これも、本人からホンモノを向けられた事がある、なんて言えたものじゃない。色々な意味で。

教室から出る時、やけに背中や、特に後頭部にチクチクとした痛みが走ったのは、気にしたら終わりなんだろうな。——と言うことにしておく。

「何だかご迷惑おかけしたみたいで……」

迷惑、と言うよりもありがた迷惑——いや、それじゃ結局迷惑か。彼女が気にした様子も無かったから、俺はそれに着いていったままだ。

「別に、紅花さんのせいじゃないさ。むしろ、迷惑かけてるのは、周りから釣り合っていないと思われてる俺だろうし」

屋上に来るだけでも昨日より大変だった。いや、物理的障害は一度だけ足を掛けられただけだ。それよりも、昼休みだけに、周囲の視線が相当に堪えた。

それに言っておいてなんだが、この人に釣り合いそうな人間おとしなんて、俺が知る限り生徒会長ぐらいなものだ。

「そんなっ……！」

礼於さん、素敵な方だと思いますよつ。少なくとも私は、貴方の良さの一つか二つは知っているつもりですし、そんなところが、カッコいいって思ってるんですから……」

なんと言っことか。

あの紅花さんから、何故だかこんなにも賛美を頂いてしまった。
昨日の話の延長か、はたまたあの時の引け目か——だがこれはさすがに、”キ”てしまう。

ただし、やっぱり、あの紅花さんだけに、その言葉は素直には受け取れなかった。残ったのは変な気まずさと、変な恥ずかしさだけ。

——誰も、この場面を覗いてたりしなかったよな……？

「そ、そんなことよりさご飯、食べちゃおう！……って、そう言えば飯、教室に置いてきちゃったんだ。

ちよつと待っててくれる？」

照れ隠しにしては少々ベタな気がするが、空気を入れ換える良い口実ができた。

と、思っただが、

「そ、それだったら私の、食べますか？」

少々作りすぎてますし……それに、元々食べていただこうかなって思っ、作ってきたんです！」

啞然。

何だって？——作ってきた？

どうして？——食べてもらうために？

なんと言っことか……。だつて、あの（以下略——

ましてやここは屋上。二人きりで、彼女の作ってきたお弁当……夢、だろうか？漫画やドラマの、それこそ学生恋愛物の王道パターン、つてのは言い過ぎか。

だいたいそれくらいで、変な気持ちになる方がおかしいんだ。よく考えろ、紅花さんは恋人でもなし、そんな関係、普通思わないし、ましてや成れる訳がない。

それでも嫌にそわそわしながら、手渡されたミニレジャーシートを広げる。

紅花さんを直視できず、目をそらした先にあつたのは彼女の鞆。そしてそこから顔を出していた——お重？！

あれは弁当箱なのだろうか？だとしたら、実際に使ってるヒトを

見るのは初めてだ。

準備が終わると紅花さんは、さっさと校内履きを脱いで座ってしまふ。戸惑いながらも俺もそれに倣う。

「さ、どうぞ」

俺が座るのを見計らってたかのように、トポトポと水筒のコップ蓋に緑茶を注がれる。湯気と共に独特の薫りが仄かに漂う。まだ少々肌寒い季節だけに、暖かい緑茶ってのはいい。それに気分も落ち着く。

早速、失礼してだし巻き卵へと箸を伸ばす。定番だけに重要、なんて。

「――」

「どうでしょう？お口に合いましたか？」

……紅花さんには悪いが、言葉が出なかった。やっと出た言葉は「紅花さんの旦那さんになる人を呪い殺してしまいたいそうだ……」

なんて、とてもお下品なモノだった。

「ふふつ、それは大変そうなことですね。でもやめて下さいよ、そんな悲しいことは」

流石に失礼な冗談だったかもしれない。笑ってはいてくれるものの、やっぱり自重はしておこう。

けど、これなら紅花さんが人気になるのも頷けるってものだ。改めてこの人のファンになってしまいたいそうだ。

そう思いつつ、次のおかずへと手を伸ばしていく。

「食べながらでいいので、聞いてくれますか？」

「んっ？」

いきなり妙に真剣な声を聞き、思わず間抜けな声を出してしまう。今度は違う意味で笑われてしまった。

「礼於さんは……あの方を探すと。昨日、そう仰いましたよね？」

「くうの事、だよな。」

……ああ。昨日も情けない姿を見せちゃったけど、俺は――くうに会いたい。会って、謝りたい。

その為だったら、例え危険な事にも飛び込んでやるつもりだよ。もう闘ってるくうや、紅花さんを見て腰を抜かしたりしない。……でも、できることなら闘わせたくないし、俺なんて闘うこともできないと思う。

けど、確りと”受け止める”って、決めたからさ。」

自分がこんなクサイ台詞を、しかも女の子に対して言ってるってのは信じられない。

けれど、この事と、この人たちには嘘をつきたくない。最大級の誠意で挑みたい。そう思うのは本当だ。

「……やっぱり、礼於さんは——、ですよ……」
カッコいい

途中からは小さすぎて、紅花さんが何を言ってるのかは聞き取れなかった。

けどその恥ずかしそうな態度から、やっぱりクサ過ぎた事を言ってたんだな、とは自覚できた。

「何でもありませんっ。」

それより、今後の為に、”仲間”にしたい人がいるんです」

「”仲間”……？」

それはまた、意外な展開だ。もしかして今日誘ってくれたのは、そのことも含めてだったんじゃないだろうか。

「はい。まず一人、私のお友達で、唯一私の正体を知ってる方がいるんです。彼女なら情報通ですし、私よりも広い範囲で探してくれると思うんです」

話ながらも、見ていて分かりやすい程、とても嬉しそうな顔をしていた。どうやらその”友達”とやらとは、相当仲がよろしいみたいだ。ちよつと妬ける……か？

でもまあ、情報通な仲間がいるなら心強い。くうもアレで色々目立つ娘だし、それなら直ぐに見付かるかもしれない。

「その人もLIMなの？」

”仲間”と言うからにはその人もLIMなのかもしれない。それ

ならそれで、やっぱり少し身構えなければいけない気がした。……
と思っではいたけど。

「いいえ。彼女は礼於さん同様、普通の人ですよ。こんな私よりは、
気を許せるんじゃないですかね……」

そっか、なんだLIMじゃなかったらしい。

でも、最後の言葉には頷けなかった。

「紅花さん、俺にとつては紅花さんが、一番の仲間だっと思ってる。
協力だっしてくれてるし、何より、紅花さんは凄く優しい女の子
だつて、分かってるから。そんな卑屈になる必要はないよ」

そうだ。彼女はくうの事を教えてくれた。自分の事を教えてくれ
た。——俺を、本気にさせてくれた。

確かに出会った時は暴走してたし、やっぱりそれが引け目になっ
ているのかもしれない。

けど、それを補って余りある程には、大きなモノを手に入れてる
ハズなんだ。——つて

「ちよつ、紅花さん！？俺何か悪いこと言ってた？！その、ごめん
っ！」

いきなり涙を流し始めた彼女に、咄嗟に、土下座でもしたい勢い
で謝ってしまう。

「い、いいえっ。こんな、普通なら、赦してもらっただけで十分過ぎ
るくらいなのに……一番の仲間だ、つて……嬉しくて、つい」

涙を裾で拭きながら、途切れ途切れに話してくれた。

そこまで思い詰めていた事に対してのどうしようもない罪悪感と、
そんなにも思っつけてくれていた事への嬉しさの板挟み。

それでもその涙に、心を清められていくような感覚があった。……
のだが。

「ちよつと……！あなた何コウの事泣かしてるのよ……っ！」

「え、あ、いや、その——！」

突然現れた元気な声に、現実へと引きずり下ろされる。しかもど
う見ても、言われたことが間違いではないだけに、言葉の返しよう

がない。

いきなり扉を開け、屋上へと突入してきたのは、これまた一昨日遭遇した、甘栗色のサイドテール。

なんでまた、こんなタイミングでこんな面倒臭いヤツが来たのだから……

「コウの事呼びに行ったら何処にもいないし、聞いたら誰かさんと屋上行ったっていうし、いざ来たら、誰かさんは変態さんだったし」

「へ、変態……？」

いきなり乱入してきたと思えば、またいきなり失礼な事をかましてきてくれましたよ、この八木力ナ様は。
ミニチュアダックスフント

「そうでしょっ？おね——八木先生に聞いたの！」

あなた一昨日、女子更衣室覗いてて反省文なんて書かされてたんでしょっ？！

拳げ句、私にまでナンパしてきたし……」

「女子、更衣室？ナンパ……？」

さらっと誤解をもたらす発言——いや、ある意味誤解ですらないが——をされ、先程まで良い雰囲気だった紅花さんですら間抜けな顔をしてしまった。

「あれらは誤解だ！更衣室はショージに騙されただけだっ！俺は何も知らなかったんだっ！！」

だから精一杯の抗議を試してみた。

「知らなかったで済むハズが無いでしょう！？危うく女の子が視姦されかけたのよっ？！」

「そこまで言うかこのエセ優等生っ！！」

だんだんと苛ついてきてしまった。気付けばどうやら、俺も怒り口調になってしまっていたのだが、今更引きたくはない。

と言うか、コイツがこんな感情的になっているのが意外で、面白くない。

「エセって何よっ？！だいたい私は優等生になっただつもりは無いし、変態なあなたよりは全然——」

「二人とも落ち着いてっ!!」

「——ッ!」

俺達の言い争いは、突然降ってきた紅花さんの雷によって中断された。

そんな彼女の態度が意外すぎて、俺も八木カナも思わず目を点にしてみた。

「礼於さんはきっと、覗きやナンパなんて外道な事はしない、ちゃんとした方です!それを変態扱いするのは、幾らカナちゃんでも許しませんっ」

「今コノヒトのこと、下の名前で」

あろうことが、俺へのフォローまでしてくれた。

けど、”カナちゃん”……?

同じような疑問は、やはり”カナちゃん”も思っていたらしく、一足先にその事を聞かれてしまった。

「はい。礼於さんは、私の大切なパートナーですっ」

「えっ——!」

パ、パートナーで……。確かにまだ”仲間”ってのが入ってきてないから間違いではないんだが、それだけを聞くと気恥ずかしくなる。

と思いきや、今度はその剣幕を此方へと向けてきたもので、背筋が伸びきってしまう。

「それと、カナちゃんは今エセ優等生なんかじゃありませんっ。本当に真面目で、本当に優しくて——……私の一番の友達です!」

ここで使われた”一番の”、に、俺が使ってしまった”一番”よりもっと重い意味を感じてしまった。

「……悪かった。……二人とも、ごめん」

そう言わずにはおけなかった。

それを聞いて、まだ険しさの取れない表情で俺と八木カナの手を掴み、無理矢理握手の形へと固められる。

「私も……ちよっと言い過ぎた。ゴメン。あなたがコウの彼氏なら

尚更、悪く言っちゃいけなかったよね」

握手の時、さりげなく爪を立てられる。

でもまあ、態度こそは最悪だが、口調や表情はそれでも謝罪をしていて、なんだ、悪いヤツじゃないのかな、なんて思ってしまった。

——いやちよつと待て、待ってくれ。今コイツ、

「“彼氏”！？」「」

って、言ったよな？

見事に紅花さんとハモってしまう、衝撃のカミングアウト。一体いつ、そんな大イベントが起こったんだ？俺には記憶無いぞっ？

「そ、そんな事、私言って……？」

やっぱり、紅花さんも言っではいなかったよな。じゃあどうして

「だって、『私の大事なパートナーです』って。名前も下呼びだしな、成るほど。やっぱりそう聞こえてしまうよな……」

「あれはくうを探す為の仲間で、そういう意味での、じゃないって！」

「えと、“くう”さんって言うのは、昨日伝えた人のこと」

「だいたい予感はしていたけど、“仲間”ってのはやっぱり八木力ナの事だったらしい。」

……ふと、シイナ先生はどうなのだろうか、なんて頭を過った。

けどそんな事より今はコレだ。俺が紅花さんと好き合う？そんな馬鹿なこと——

「だいたい、俺も紅花さんも恋愛感情なんて一切！これっぽっちも無いって。それに、釣り合うハズがないだろう？ねえ、紅花さん」

主に俺が、全面的に。

「し、知りませんっ！」

ぷいっ、とそっぽを向き、そのまま紅花さんは早足で、屋上を出ていってしまった。

ほら見る、そんな下らないこと言うから怒っちゃったじゃないか。「うわぁ、おもいっきし地雷イッたねー」

「お前が原因で怒ったんだろ」

「さあ？知らないっ」

口笛でも吹きそうなほど、軽々とした足取りで紅花さんに続く八木力ナ。

——なんだか結局、気に食わない奴、って評価に収まってしまった。

そんなんだから、先ずはこの先、この三人で。もっと具体的には八木力ナと。上手くやってく自信を、出鼻から見事に挫かれてしまったのだった。

そしてこの重箱。俺は、いじけて隅でもつついていればいいのか？

lim4: Futures Anxiety (後書き)

「ご、ごめんっ！」

放課後、俺は空になったお重を片手に、紅花さんへと深く頭を下げていた。

……と言つのも、午後の授業の間の休み時間、八木カナに「絶対に謝っておくことっ！」と物凄い剣幕で言われたからなのだが。

「別に、礼於さんが悪い訳ではないですっ。私が勝手に勘違いしてただけですから……」

「勘違い？」

「知りませんっ！」

あんな剣幕で言われただけに、ビンタの一発や二発、……いや、LIM化しての一撃ですら覚悟していた。

結局、見た感じだけならそんなに酷そうでもないが、語尾が多少尖っていること、態度がツンケンしていることから、俺が怒らせたのは間違いじゃないようだ。

「それとこれ、お弁当箱。今日はお昼ありがとう。その、さ。今度お礼……と言つかお詫びがしたいな、と思ってるんだ」

それを聞いて暫くの思案の後、紅花さんの表情は見る見る内に明るく輝いていった。

自分で撒いといて今更だが、あまり高価なモノを指定してくれなければいいのだが。——なんて、財布の心配はこの際無しにしておこう。

「えと、本当、ですか？」

「うん、せっかくあんなに美味しい物をご馳走になったのに、途中であんなことになっちゃったから、さ。何かしてあげればいいん

「だけど」

すると今度は妙にモジモジとしだし、顔を紅らめる紅花さん。

さつきから、怒ってたと思えば目を丸くして、不安顔になったと思えばモジモジとして……

こんな時に言っちゃ悪いのかもしれないけど、表情がコロコロと変わっていくのは、実に可笑しくなってくる。

「で、では、その、……こ、今度の金曜日っ！卒業式の日、私の家まで来て頂いてよろしいですか？」

「え？」

何だろうか、此方が何かをするならともかく、逆に招待されそうになっっていないか？

いや、その後で何か要求されるのだろう。

「いいけど、俺がお礼をしたいな、って思ってるんだけど……」

「そ、それでいいんです！！」

昼休みの時見た様な迫力に、思わず頷いてしまった。

てつきりまた怒らせてしまったのかと不安になったが、どうやらそんなことはなかったらしい。急にニヤニヤとしたからだ。

「では金曜日、昼頃にお待ちしますねっ」

そう言っ たつきり、あの伝説の笑顔を振り撒きながら、スキップでもしだしそうな程、明るい空気を醸し出して帰って行く紅花さん。何事かと振り返った生徒全てを虜にしそうなソレは、あまりに非現実的だったらしく、誰の記憶にも残らなかったそうだ。……まあ、これはまた別の話。

——あれ、紅花さんの家って、何処だ？

いち早く現実へと戻ってきた俺は、重箱片手に、そう呟いていた。

lim5:The Visit Home

結論から言えば、シヨージは口を割らなかった。

何のか、つて？そりゃ、紅花さんの家の場所だ。あのシヨージなら知っていると買ったんだが、何でも、俺と紅花さんとが会うのが気に食わないらしい。

……俺はそんなお前の態度が気に食わないぞ。

結局、最後の手段——これだけは、過去のわだかまり的に頼りたくなかったのだが——を使うべく、卒業式の為一年生は休みとなった学校、徒歩三十秒、へと向かうことになったのだ。……これが、今までの回想。

「お勤め、ご苦労様」

「何？まだ生徒会の集まりがあるんだけど」

俺が声をかけただけで嫌そうな顔を向けられる。それでもちゃんと応えてくれる辺りだけは好感が持てそうだ。

そう、八木カナだ。

コイツも同じ一年生ではあるが、コイツ含めて二人——あれ、三人だったか？とにかく、そいつらは生徒会の仕事で出席しているのだ。ホント、ご苦労なことだ。

「ちよつと教えて欲しい事があるん——」

「コウのスリーサイズなら知らないわよ？」

微妙に惜しいな——じゃなくて、確かに紅花さんに関する情報ではあるが、俺はそんな変態ではない。

と言うか、一体どんなイメージを持たれてるんだ、俺は。

「違うつて！その……紅花さんの家の場所を教えて欲しいんだ」

うわぁ、どんどんと更に嫌そうな顔になってくぞ。いわゆるジト目？つてのは、この顔なんだろうな。

「なんで？」

「は？」

「だからっ、なんでコウの家に行きたいの？」

ああ、確かに理由を言っただけだった。

俺は八木カナに、一昨日、あの後に紅花さんにお呼ばれたこと、家の場所を聞けなかったこと、そして昨日会うことすら出来なかったことを全て説明することにした。

説明が終わるとまた面倒臭そうな顔をしていたのだが、多分一番面倒な事をしてるのは俺で間違いないと思う。

「……はあ。なるだけ早く戻ってくるから、そこで待ってて」

「え、ちよっ——」

俺の制止なんて聞かず、すたすたと校舎に入ってゆく八木カナ。そして放置される俺。

昼頃に、としか聞いていないのもいささか不安を煽る問題点ではあるが、何より昨日丸一日、紅花さんに会えなかったのも痛い。……ショージの策略なのだが。

早く行かないと、とは思っていても、何もできないもどかしさ。

せめて、八木カナよ、早く戻ってきてくれ……。

しかし、俺たちにとっては休日とは言えども、卒業式に私服登校紛いの事をするのは随分と恥ずかしい。

せめて校舎の中にも入っていれば、まだ目だたず済むんだろ
うか？

「おい、その悪ガキ」

そんな事は一切無かった。

校舎に入っただけ、背後から嫌々な声を浴びせられる。振り返ればそう、シイナ先生が仁王立ちしていた。

ちよつと萎える。

因みに作文は昨日出した。

「担任に会って、なーんでそんな嫌そうな顔をする。もつと喜べ」
今、八木カナの気持ちが少し分かった気がした。……って、ソイツの姉か。

「で、何ですか？」

「アンタこそどうしたの？今日、卒業式だぞー？」

「あー、卒業生に告白するから……なんて、峰渡じゃあり得ないよな」

「ホント、この姉妹は俺にどんなイメージを付けてるんだ？——いや、シイナ先生は元からか。」

「違いますよ、ちよつと人を待ってて」

「ヒト……？……まった、多々良と変なことでも企んでんじゃないのお……？」

軽く言ってる風だが、その言には確実なドスがかかっていた。

「と言うか、俺はそんな悪ガキに見られてるのか？今までのトラブルは全部、シヨージのせいだっていうのに……。先生、酷い。」

「シヨージなら部屋でふて腐れてますっ！俺が待ってるのは——」

「お姉ちゃん？」

「このタイミングの良さ、^悪そうか、これは姉妹揃っての苛めなんだな？よく解った。」

「おー、カナか。……まさか、峰渡の待ち人ってのはカナだったり」「変な言い回ししないでっ！峰渡君には用事を押し付けられたただけだから」

シイナ先生の口調は至って愉しそうで、よくよく見れば口元だって嫌らしくつり上がっていた。要するに、俺たちはいい玩具らしい。もういいさ、そっちがその気ならこっちだって——あれ、勝てないか？

「そ……だったのか。峰渡はこの前『先生には悪いですけど、八木さんの事は嫌いなんです！』とか言ってた気がするんだがなあ」

「へー、そーなんだー」

「嫌いとはまでは言っていないでしょうっ？！」

姉のにやつき顔と、妹のジト目に挟まれ、もはや蛇と蛙に睨まれた気分だ。——いや、狐とミニチュアダックスフント？

「ま、ついにカナもボーイフレンドが出来たみたいだし、お姉ちゃ

ん安心安心っ」

「なんだよ、八木って男友達いないの？」

「あたしはいるぞっ」

「いや、シイナ先生じゃなくて……」

標的が八木カナの方へと移ったみたいだったので便乗しようとしたのだが、どうやら援護射撃は失敗したようだ。

「峰渡、この際だからこいつのこと、”カナ”って呼んであげな。

喜ぶから。あたしのことも”シ・イ・ナ”って呼んでるだろう？」隣から盛大なため息が聞こえてくる。こればかりは同情せざるをえない。

と思いきや、その（小さな）体のどこにそんな力があるのか、と思う程の強さで引きずらる俺。バランスを崩しながらも、やっぱり重心が低いのは利点だな、なんて思うのだった。

「あんまりお姉ちゃんともにも会話しないでっ」

「……嫉妬？」

「違いますっ！」

後ろからは先生のあの独特の笑い声。そして「サカるのも程々なー」なんて、教師が言うべきでないセリフが突き刺さる。

それと、このワンちゃんに引つ張られているのもあり、式が終わって体育館から退場してきた元三年生たちの視線が、イタイ。――あ、離された。

「コウの家でしょ？付いてきて」

「お、おう……」

怒ってるのか恥ずかしいのか、あるいは両方だろうが。顔を真っ赤にした八木カナは、一年間面倒をかけたシイナ先生の、どの表情よりも迫力があつた。

「椿流格闘術道場」……？」

連れてこられたのは、市街地から少し離れた所にある、古風で割りときめの道場だった。

「そ。コウの家兼修行場」

八木カナが入り口のインターフォンを押す。何故だか、そこだけ高級マンションの入口で見かけそうな、とても立派なものになっていた。

……が、”認証”のボタンを押しただけで、その直後に『ピーンポーン』と、やけに古めかしい音だけ響いたのは、一体どうゆうことなのだろうか？——そうゆうことなのだろうか。

そして中央のパネルとスピーカーで応答するのかと思えば、中から紅花さんのだるう足跡がとたとと聞こえてきた。——だから、このインターフォンの意味は……。

「お待ちしておりました、礼於——さん？」

「やつほ、コウ」

「こんにちは、紅花さん」

笑顔で迎えられたハズだが、八木カナを視界に捉えると一変、何が起こってるのか判っていないようだが、とにかく啞然とした顔で固まってしまった。

ちよつと紅くなっているようにも見える。

「えと……カナ、ちゃん？」

「そ、カナちゃん。この人案内してきた。——もしかしてお邪魔だった？」

「そ、そんなこと、無いよっ！」

更に紅くなり、オーバー過ぎる反応で首を横にふる紅花さん。

首が取れやしないか、なんて、ちよつと怖くなってしまっから早く落ち着いてほしい。

「カナちゃんも、いらっしやいつ。」

二人共、どうぞ中へ」

紅花さんに続いて中へ入ると、体育館の半分くらいはありそうな広い道場が眼前に広がる。

一枚板、と言うやつなのだろう。歩く度にギシギシと床が鳴るのが、また何とも言い難い味を醸し出している。

道場の奥にある戸を潜ると、そこはいかにも和風、と言った屋敷になっていた。お屋敷と言うよりか、旅館と表現した方がイメージに合うかもしれない。

二人から話を聞けば、江戸時代から明治時代には本当に旅館もしていたらしい。……と言うか、そんなに古いんだ、この建物。

「どうぞ、座って下さい」

そして連れて来られたのは、裏庭が一望できる、ゆったりとした感じのある客間だった。

八木カナは勝手知ったる、と言うやつなのか、何処に座ろうか迷っている時には既に、ど真ん中の席へと正座していた。これは単に図々しいだけかもしれないが。

あぐらで座ろうとしたのだが、対面に座っている八木カナがあまりに綺麗な正座をしているものだから、つつい俺も、慣れない正座をしてしまう。

あまりジロジロと見渡すのも失礼かもしれないが、興味本意と言う本能には中々逆らえなく、部屋中をじっくりと見回してしまう。

壁には、模様こそ少しずつ違うようだが、実に見覚えのある仮面が何枚もかかっていた。

「この仮面、祖父が趣味で買ってきた物なんです。何でも、沖縄に面白い職人さんがいるとかで」

台所から戻ってきたのだろう、お盆を手にした紅花さんに説明される。

だが決して良い趣味とは思えない。寧ろ気味が悪いと思うし、夜に見ようものなら悲鳴もんだらうが。

「それ、コウに言っちゃダメだからね」

「……？」

明らかに俺に対して、だよな？そんなに顔に現れてただろうか？一方の紅花さんは不思議そうな顔を向けてくる。今更趣味が悪いとは言えるはずがないじゃないか。

気付いたら、目の前には紅茶と、そのお茶菓子が用意されていた。立派なことに、結構しつかりとしたソーサーにティースプーン、粉砂糖、ミルクシロップが付いてきている。

——こんな純和風屋敷で、接待が純洋風？

ちよつと、いやかなり不思議には思ったのだが、八木カナは至って普通に、砂糖とミルクを入れすぎなほど入れて、啜っていた。

紅花さんの趣味なのだろうか？でも、どうやらそこそこ普通のこ
とらしい。

「コウ、何で今日は紅茶なの？」

「ぶっ！！」

「峰渡君、汚い」

普通じゃないのかよっ！

「礼於さんなら……緑茶より、紅茶の方が好きかなあ、て。その、お口に合いませんでしたか……？」

「ま、まあ、確かに紅茶は好きだし、これも美味しいよ」

「良かったあ！」

こんな雰囲気の場合なら、紅茶よりも緑茶の方がよっぽど良い、
とは言わないでおこう。

因みに、この前出されたお茶は割と好みだったもので、ちよつと期待していたのも事実なのだが。

「ふーん、”礼於さんなら”、ねえ……」

いつの間にか、八木カナの格好は凄くラフになっていた。

肘はついてるし脚は崩してるし、ティースプーンをカチャカチャと鳴らしてはいるし。何なんだ、この変わり様は？

「どうかしたのか？」

「べっつにー？おアツいことでっね」

「確かに、……この紅茶、少し熱いかな」

「そうでしたか？」

一応いつもお茶を入れるのと同じ温度にしてあったんですけど……」

「いつも」とはきつと、緑茶を入れている時の事だろう。それなら熱すぎるはずだ。

因みに緑茶は高温、紅茶は少し温めが良いと、前に何かの番組で聞いたことがある気がする。そう、今の八木カナの視線位が丁度良いだろう。——って何故睨まれてるんだ？

「ま、いいけどね。」

それで。今日コウがここに呼んだのって、やっぱ”くうさん”関係？」

「え？えと、そ、その、今日は礼於さんに——」

「その事の為だったんだ？確か八木が色々詳しいんだっけ？」

なんだ、その話もするんなら八木カナが居て良かったんじゃないのか。

もっとも俺が呼んだ訳でも、紅花さんが呼んだ訳でもない。勝手に着いて来た、もとい俺を引きずって来たのだが。

「あー、うん。」

正確には、詳しいのは私の知り合い。あの人もLIMみたいだし、なんだか”元研究員”？みたいな肩書きもあるみたい」

LIMだ、ってことはともかく、”元研究員”って……

既にそこから胡散臭さが出てるんだが。

「へえ。紅花さんは知ってるの？」

「知りませんっ！」

カップを叩き付けるように、強く置いた紅花さん。

どう見ても怒っている。この怒り方からして、その”元研究員”

とやらの話題がダメだったらしい。……前に何かあったのだろうか？八木カナも妙に焦っているみたいで、どうにも原因は分かりそうになかった。

「い、一応その人つてのが中学の時に行つてた塾の先生で、橘って人なんだけ、ど……この話止める？」

話の途中で、やっぱり紅花さんが気になったのだろう、紅花さんと、そして一応俺にも聞いてきた。

「俺は構わないけど」

「私も構いません！どうぞ続けて下さいっ！」

紅花さんて、こんなに八木カナに対して突き放した言い方をしていただろうか？

どう捉えても、これ以上この話題を続けていたら、確実に亀裂のようなモノが入るだろう。八木カナもそれは感じ取つたらしい。

「あはははー……ちよつとお手洗い借りまゝす」

そして逃げられた。と言うより、この怒りモードの紅花さんを押し付けられた。

だから、どーしたらいいんだよ。

「えつと……紅花さん？」

「礼於さん、ちよつと道場までお付き合いお願いします」

「え——？」

聞き返す間もなく、紅花さんはすたすたと行つてしまう。最初に通つた道場で間違いはないだろう。

けど、このタイミングであそこへと呼ばれたことに、多少の身の危険を憶えざるを得なかった。

道場へと足を向けたはいいものの、紅花さんの姿はそこには無かった。

ただ、ここへと来い、と言われたからには来ていないと、それはそれで身の危険を感じてしまうのだから仕方ない。……と言うか、

道場ってこの場所でもいいんだよね？

待つこと一、二分、道場へと入って来たのは道着姿の紅花さんだった。まさか、と身構えてしまう。

「礼於さん、少々お手合わせお願いします！」

「え……俺！？」

そして、あっさりと実現してしまったその”まさか”。

「はい。——では、行きます……っ！」

「ちょ——」

正面、二メートル程だろう距離に立ち、一礼。俺もその雰囲気につられて一礼をしてしまった。

かと思えば次の瞬間には彼女は構えをとって、踏み出したと思えば大きく蹴り上げを繰り出してきていた。

慌てて一歩後退ると、目の前を爪先が掠めていく。その時の風圧が前髪を撫でる。

「紅花さん?! いきなり何を——」

俺の意見なんて聞きもせず、反対の足から繰り出される、顔面目掛けての回し蹴り。

なんとか左腕を盾にして、それを防いだのだが、その時の反動が強すぎたのか脚は直接頭へと当たらなかったにしろ、防いだ自分の腕が頭に当たり、バランスを崩してしまった。

「構えないと、怪我、しますよ礼於さん」

確かにその通りかもしれない。今は何であれ、紅花さんが対面してるんだ、此方も本気になるべきだったんだ。

見よう見まねで構えとやらを試みる。

それを確認されると、今度は一気に懐へと踏み込まれる。

低い姿勢から踏み込まれた為に、次に放たれたパンチは、そこまで重くはないにしろ、それでも女の子とは思えない威力で胸を叩き付ける。それが二、三発。

ジャブが来るのが分かれば、自分の腕を盾にして防げばよかった。だが防いだハズなのに、当たった箇所はじんと痺れてくる。そ

して――

「せいっ!」

「――っ!」

突然、左側頭部に激痛が走った。と思えば、俺の体は大きく右側へと倒れてゆく。

「上段回し蹴り、技あり」

「あ――」

振り向くと、少し離れた場所で、トイレへと逃げたハズの八木カナが観戦していた。

その八木カナの言った言葉の意味を捉えるのにも、また少々の間を要してしまう。そしてやっと、自分が”ジヨウダンマワシゲリ”とやらを食らい、倒れてしまったことに気付く。

頭に残るツンとした痛み、腕の痺れで、目の前に立っている女の子が、今週頭に遭遇した敵だったことを思い出してしまった。首筋には鳥肌が立ち、背中には嫌な汗が流れる。

「コウ、素人に技は駄目だつて」

八木カナが俺と紅花さんの間に、まるで仲裁するかのように割って入ってくる。

「――っ!だ、だつて――」

「抵抗なんてできない、つて、コウなら分かってたんでしょ? だいたい、こーんな素人じゃ、^{ベテラン}玄人にはかないっこないつて。いくらあれだけ手加減しててもっ」

あれで手加減? しかも、今の会話からすると相当に加減されていたらしいが。

もしかして紅花さんつて、LIM化してなくとも十分に強いんじゃないだろうか? ……少なくとも、俺よりは強いんだし。いやLIMだったから、強いのもしれない。

「まー、でも、確かに一発蹴り入りたいって気持ちは分かるかもねつ。私だったらあんなに遊ばないで、構える前にバツサリと蹴り――私の場合”斬り”かな、入れちゃうだろうし」

あははー、なんて、さつき逃げた時の様な笑いを浮かべながら、今度は紅花さんと共に道場^{へや}を後にする八木カナ。

結局どっちを味方したのかサッパリ分からなかった。……いや、コイツが俺の味方をする事自体、考えられないのだが。

でも最後に目配せしてくれたってことは、少しは助けてくれたと考えても良さそうだ。

二人が道場から出て行った後、俺はその場に大の字で寝転がった。ふと、先程攻撃を受けた箇所に触れてみる。

腕は痣になってなさそうだし、それどころかもう痛みも退いている。

回し蹴りを受けた箇所も触ってみても瘤になってなさそうだし、それどころか、此方も痛みはほとんど退いていた。

……前に、本当にベテランの格闘家はダメージすらコントロールできる、って、これまたテレビでやってたのを思い出した。

まさかな、とは思っても、紅花さんが繰り出した攻撃全ては彼女によって、ダメージすらコントロールされていた気がしてくる。その域まで達していても、紅花さんなら納得できてしまうだろう。

「……強っ」

口から出たのは、男として余りにも情けない言葉だった。

そしてその瞬間が、俺と、こっちの世界との間に、大きな溝があると初めて感じた時だった。

……やりすぎちゃいました。

カナちゃんに仲裁されて、その後にお風呂場に連れていかれて、二人でシャワーを浴びて。

「もしかして、とは思ってたんだけど、コウ、今日普通に彼を招待

してたの？」

「……うん」

「それでさっきは、私が言っちゃった誤解に気付いてもらえず怒っちゃったと」

「……うん」

礼於さんから、お礼とお詫びとて言われて、よし！この際だからご招待しようっ！……って気合い入れてて。

その後になつて、この場所を教え忘れてるのに気付きました。

大丈夫かなあ？来てくれるかなあ？って不安になつて、でもちゃんと来てくれた時は嬉しかった。

カナちゃんが一緒だつて分かつてしまった時は、なんで？とか、どうして？とか……大好きなカナちゃんに嫉妬しちゃいました。

それでも、好きな人が二人来てくれた嬉しさと、でも、カナちゃんで良かったなあつて安心感とがあつて。情けないな、私。

「お邪魔しちゃった、……よね、私。」

うん！出たら先、帰つてるから——」

「待つて！」

そして、ここでも折角気を遣つてくれようとした彼女を引き留めてしまいました。

「えと、その……カナちゃんが帰っちゃうと、気まずくなっちゃうから——……ね？」

そうやって、本当のことと、ほんのちよつとの嘘を一緒に言つてしまふ。もちろん、本当は私のワガママだけ……

出来れば、二人がもっと仲良くなつてほしい。二人と、もっと一緒にいたい。——あ、でも、あまり仲良くなりすぎちゃうのも嫌だなあ、つて。私、どうやら相当なワガママっ子みたいです。

「はあ……。分かった、一緒に謝つてあげる。彼に嫌われたくないんだもんねっ！」

「ん——っ！？」

ビックリして振り向いた時、お姉さんに似たイタズラなウィンク

をされてしまったものだから、恥ずかしさで顔が熱くなっちゃいました。

ああ、カナちゃんには全部見抜かれちゃってるんだなあ……って。
「大丈夫っ！どうせ勘違いしてるだろうし」

「勘違い？」

「そ。こっちの世界は厳しいんだーとかね。」

もしかしたら、弟子入りなんて申し込まれちゃうかもっ

そう言っただけを堪えるカナちゃん。

まさか……とは思っても、真面目で一直線な彼なら、妙に有り得そう。それを想像してみたら、少し可笑くなっちゃいました。

「ほらほら、コウはそうやって笑ってる方が可愛いんだからっ」
背中を流してくれていたカナちゃんは、いきなり脇の下をくすぐつてきて、崩れた顔は余計に崩れてしまう。

「も、もう、カナちゃんっ」

ちょっと前までは落ち込んだ私も、カナちゃんの手には掛かってしまえばこの通り。気付けば元気を分けてもらっちゃってるんです。

「あ——」

私は、カナちゃんに引つ張られるカタチでここへと来たんです。
だからもちろん、自分の部屋へと戻る時間ありませんでした。

「どしたの、コウ？」

「う、ううん！何でもないの……」

お風呂場から出て、脱衣場で私を待ち受けていたのは、最初から全部分かってたみたいに用意されていた着替え。

これだからカナちゃんは、私の一番のお友達で、お姉ちゃんで、

……ああ、敵わないなあって。

そして、今さら面と向かって言うのも恥ずかしいから。——いつも
もありがとう、カナちゃん。

lim5:The Visit Home(後書き)

「弟子にして下さい!」

「ぷっ」

湯上がりなのか、頬を紅らめた紅花さん達が道場に帰って来て、俺は開口一番に弟子入りを申し込んだ。そして何故か八木力ナに吹き出された。

弟子入り志願をしたのは、この先、この二人と組むには俺はあまりに非力だと思ったからだ。事実そうだろう。だからせめて、これ以上迷惑をかけないように——これ以上、自分の無力さを嘆かないようにしたかったからだ。

「えと、その、ごめんなさい!」

今の俺の決意を返してくれ。

いや、いきなり弟子にしてくれ、は無かったか。そうだよな、いきなり好きです、なんて告白しても——それは違うか。

「さつきは、その、ついカツとなっちゃって……あの、仲直りしていただけると——は図々しいですよね……」

「いや、そのことなら別に大丈夫なんだけど」

「本当ですか?!」

あれ、弟子入りのことは?て言うか、俺に対する回答と違う気がするんだが。

一応、もう一度聞いてみようか。

「それで紅花さん、弟子入り——」

「良かったあ、礼於さん、許してくれたあ……」

「そ、そうだねーコウ」

聞いちゃいないっ?!

と言うか、何故だかその場で八木カナにしがみついて泣き出してしまった。何がどうなってるんだ？

そして俺の弟子入りの件は？

「あー峰渡君、弟子入りは却下ね」

「何故?!」

と言うか何故、紅花さんではなく八木カナが返答したんだ？

「ここ、コウのお爺さんが師範してるんだけど、どうにも放浪癖でね」

やはりと言うべきか、ここの師範は紅花さんのお爺さんだったのか。

それでもやはり、俺はその人より紅花さんに直接習いたいとは思ってた。それもダメなのだろうか？

「今は休館してるし、もちろん、お弟子さんも取ってないの」

「紅花さんに直接習うのは？」

「あー……多分、（もう）ムリ」

「どうして？」

そこまで問うと、自分に縋って未だ泣いている紅花さんを見つめ、しきりに考えた後にこう答えた。

「ほら、コウだって色々あるしさっ！」

究極の逃げ口上、”忙しい”と”色々ある”。それは他の否定を一切受け付けない、当に悪魔の言葉だろう。

「ま、弟子募集してないのはホント。だよな、コウ？」

「うん……」

本当に質問に対しての返事だったのかは分からない。

「それと、ここの弟子だった人たちは皆、私の行ってる所に移ったんだけど……なんならこっち来てみる？」

「いや遠慮しておく」

「なんでっ?!」

なんだか、コイツの下に下るのだけはプライドが許さなかった。それに至って不安だ。

「先生だつてコウのお爺さんと義兄弟の仲だつて言つてるよ？
独自流の剣道場だけど、腕はいいと思うんだけどなー」

「……剣道？」

「そ、ケンドー！」

と、竹刀でも構えるような素振りをする。

あれ？こつて格闘術道場だよな。なのにここに通つていた皆、
八木力ナの所に移つた、つて言つたよな？

「やっぱり、遠慮しておくよ」

「そう？」

一体どんなことしてる道場なのだろうかと興味は沸いたのだが、
そこに通うのは御免被りたい。

ビミョーな空気に、紅花さんの泣き声だけが響いていた。

lim6: Reunite with Her

「こっちの先生が今度、またコウと手合わせしたいって」

「またなんだ……」

「何でも、今度は二刀流で挑みたいだって。前はあと一歩って処でコウが逆転したもんねえ」

「カナちゃん、流石にもうお祖父ちゃんじゃなきゃムリだ、って、伝えてくれる？」

あれから紅花さんが復活して、居間に戻っての雑談会。

普段、二人はどんな会話をしているのだろうか。ちよつと気になつて、耳を傾けていた。

最初はまあ、俺も話に加わっていたのだが、途中からまったく分からなくなってきたのだ。……もし、だ。いきなり「回し蹴りより正拳突きの方が効率的ですよね？」と聞かれたら、お前ならどう答える？……と、いもしないショージ聞いてしまう程だ。そしてアイツの答えはこうだ、「いや、頭突きだろ」

——とまあ、齡十六の少女達の会話は色気も華もない物だったのだ。

そして俺は独り、お茶菓子の煎餅をポリポリとかじり、テキストに相づちを打ってただけだったのだ。……紅茶に煎餅浸けると美味しいんだっけ？

「——それで、峰渡君はいつくうさんと会ったの？」

「へ？」

煎餅を浸けるかどうか迷つてるとき、突然……というか、前までの話が何で、どう繋がったのかが気にはなるのだが、俺が一番関係している話へとなっていたのだった。

お陰で持っていた煎餅はポチャンと音を立ててしまう。……もう、後戻りはできない。

「あれ」くうさん」で、良かったんだっけ」

「あ、ああ、くうだよ。」

あいつとは赤おん——紅花さんに初めて会った時と同じ日に、ね」
そこで「助けてもらったんだ」と言いそうになったのだが、紅花さん意外の人物がいるのに、例えばそれが紅花さんの親友だろうと——いや、紅花さんの親友だからこそ——その事を言い出すのは不可能だった。

紅花さんを、これ以上悲しませたくない。

そうは思っているけど、あの時の、屋上で魅せられた表情が浮かび上がっていて、どうしてもやるせないやるさを憶えてしまう。

それでも紅花さんが続きを催促したので、その後の事をかいつまんで話すことにした。鬨いに巻き込まれた俺を追って来たのか、帰った時に俺の部屋にいたこと、散々部屋を壊したこと、コンビ二のおにぎりのこと、……紅花さんと、くうのこと。

今思うと何で、くうは俺の部屋に来たのが不思議でならない。二人共、やはりそこが一番気にはなっていたらしいのだが——くうなら、「におい？」なんて言いそうで、それを想像したら可笑しくて堪らなかった。

「——真っ白レオタードに、脇には剣。しかも扉やベッドを壊すほど非常識……それでなくとも話題に上がりそうなんだけどな——」

特徴や情報になりうる事を書いたメモ帳に、ペンを叩きつけて思案する八木カナ。

余談だが、ベッドは未だ新しいのが届いていない。引き落としは、日頃の行いの的にショージの所になってしまったので、今現在俺は床に座布団を敷いて寝ている。これくらいならまあ、当然か。

「私もお相手して頂いた時に姿は見えますから、もし見かけたなら直ぐに分かる……と思います」

「うん。もしかしたら、それって解放状態の姿だった、ってことは？」

解放状態——LIM化のことか。ずっとLIM化LIM化と俺は

使ってただけに、ちょっと違和感がある。

「いや、それはないと思う。」

紅花さんから聞いた話だと、LIM化してられる時間は10分前後なんですよ？アイツとは一時間ほど一緒にいたから、それだったら気付いてるよ」

くうとネルヴェで違うのが、その何よりの証拠になりうるだろうけど、今ここでそれを言うとか余計ややこしくなるだけだ。

「私も、そう思います。あの方が、えと、LIM化？……したかどうか、明らかに感じが変わってたから」

「LIM化、ねえ……うん、いいねソレ。」

じゃあそのLIM化した時に”インビジ”する能力があるー、とかは——流石に無いつか」

どうやら『LIM化』で通してくれるらしい。俺としてはありがたい。

しかし、特殊能力については人それぞれ違うらしい。実際、くうの能力が蔓^{つる}を出すことと、暴走を止めること、後は、もしかしたら治癒能力が凄く高いかもしれないこと。それ以外にあるかどうかは分からない。

もしそこで更に、”透明になれる”能力の存在を考慮するんだったらもうお手上げた。けどまあ、それなら常にLIM化してなきゃいけないし、暴走する恐れもあるから無いだろう。

それまで考え出すと何でもアリの状態になってしまっし、不毛な結論しか出ないのは、全員分かっていた。

「ま、一応橘さんには報告しておくね」

「サンキュ、八木」

なんやかんや言いつつも、八木カナは結構協力的だ。紅花さんが絡んでるから、なのだろうけど、それでもやっぱり、嬉しい。

決して悪い奴じゃないのは理解してたが、そこまで気に食わない堅物、って訳でもなさそうだし、案外良い奴なのかも。

「期待はしない方がいいよー。今の今まで話題に上がってこない人

なんだしさー」

実に気だるそうな、またティースプーンをカチャカチャと鳴らした対応。

それでも、なんだかちよつと楽しそうに見えたのは、きつと気のせいじゃないのだろう。そんな態度に、なんだか共感してしまった。

「協力が得られるだけでも嬉しいさ。ありがとう」

嬉しくなつてつい、俺はその場で、机に両手をついて、土下座紛いのことをしてしまった。

「ちょ——止めてって！べ、べつに、私は橘さんに聞くだけだし……」

予想以上に反応がいい。照れるにしても、もう少し普通の——いや、待てよ？確か前にかかった時も……？

そしてまた、妙なイタズラ心が沸いてきた。

「それでも、だよ。俺は純粹に、俺のワガママに協力的になつてくれた八木を、敬意すらするさ。正直、お前の事、こんな良い奴だとは思わなかった」

語尾を荒め、八木カナの手を強く掴んで上下に揺さぶり、感極まつた”演技”をする。我ながら中々のモノに仕上がってしまった。

俺の必死さが伝わったのか、八木カナの顔はみるみると赤く染められていく。

やっぱりこいつ、からかえばからかうだけ味が出る體質らしい。

……まあ、紅花さんからはからかわれる事なんて無かったかだろうからなあ。

「八木さ、そうやって照れてる方が可愛いぞ？」

「ぬあつ——くっ！……？」

ボンツ、と音が鳴りそうな瞬間沸騰と、聞いてはいけなかっただろう声、そして何故だか聞こえた、何かが割れるような音。

視線を移すと、お怒りモードになりかけていた紅花さんと目が合ってしまった。……ちよつとやり過ぎたかな。

同時刻、とあるビルの上にて。

週末になつても、それが長期連休でもなければ、そこはあまり賑やかではなかった。

夏になれば多くの人でごった返しになるこの場所も、しかし、三月の寒気では人は寄り付かない。こんなに半端な直に、海水浴へと来る客は、地元住みの一部の物好きくらいだろう。

夏のピーク時に向けて、この街の、駅と線路を境にした海側はビル街、特にホテルや大型のマーケット等の観光客様の施設が整っている。

反対側、住宅街は年中人の出入りが多いが、先の通り、”こちら側”は人の出入りが滅多に無い。

その事實は海に近くなればなるほど顕著に現れ、海に近い場所のホテル等はほぼ全てが閉まっている。その中でも一番高いこのビルの上は、それ故に誰の目につくこともなくなっていた。

二人が再会したのは、そんな彼らにとって絶好の場所であつたのもまた事實。

「やつと見つたぞ」

「……だれ？」

一人はスーツをだらしなく着こんだ無精髭の男。歳は三十半なかばから四十、と言つたところか。

だが、そのだらしない見た目に反して首筋は血管が浮き出ており、横に太く見えるのは脂肪ではなく、鍛え上げられた筋肉からだとかるだろう。

「お前さんの元調整係だ。ま、顔なんざ覚えちゃいないだろうが、……な」

「ちよーせー……？」

「そーだ、試験体廃棄No.03、固有別称”ネルヴェ”さん、よお。」

ヒドイとは思わないか？『タチバナが直々に回収してこい』、だよ」

そしてもう一人の特徴は、サファイアを思わせる蒼い瞳、真っ白な髪真っ白な肌、そして真っ白で所々汚れ、擦りきれた衣装。その衣装の腹部とその裏側には、大きな穴が空いている。

各部分には鉄のパーツを着けられていて、軽装の鎧の様な風貌になっている。そしてそれを鎧と思わしめる最大の要素として、脇に抱えている、大きめの剣。

それは現在においてあまりに非効率な武器になってしまった為か、まともな武器としてではなく飾り、象徴、または小道具として扱われる事が殆どだ。

だが見る人が見れば、それが本物の武器であること、そして多く使われている事は明白だろう。

「かえりたく、ない」

「まそう言うなって。俺だってもう研究者じゃねえ、お前さんを構う義理なんてな、本来なら無いハズなんだ。」

そう言う男の顔は、何故だかとても疲れているように見えるあるいは、彼女を探すことに体力を使いすぎたから、か。

「随分と、かくれんぼが巧くなったモンだ。……が、大人しく、帰ってはくれねえか？」

「こないでっ！」

近寄ろうとする男に、剣を抜いて構える。要するに、それがコタエなのだ。それは数日前、仮面の少女と死合った時より明らかに不恰好で情けない。よく見れば足腰だって震えている。男に対しての拒絶は或いは、そこから伺える恐怖から、とも捉えられるかもしれない。

「そんな風に育てた覚えは、俺にや無いんだがね」

そんな少女に男は悪態をつく、懐から小型の刃物を取り出す。

ナイフ——果物ナイフほど細くはなく、コンバットナイフほど厳つくもない、よくてサバイバルナイフと言ったところか。

対峙する武器は大振りの剣と、実に小振りなナイフ、一本。

スーツ姿で、他に仕込みもなく、それでいてナイフ一本とは些か相手を嘗めている様に見える。……実際、少女がへっぴり腰で剣を構えてるのだ、嘗められても仕方ないのだろうが。

「あーそうかいそうかい、そっちが遣るってんなら、俺だつて遣つてやるさ。」

——出来るなら、解放させずに仕留めてやりたいしなあ」

男はナイフを大きく掲げると、それを投げつけるでもなく、あるうことが自分の腕へとふり下ろしたのだった。

リストカット——手首から鮮血が飛び散り、辺りに赤を染み渡らせた。

だが次の瞬間、その傷は痕跡すら残さず……いや、その”赤さ”だけを残して口を閉じていく。

その”赤さ”は腕を伝い身体中を染め上げる。体軀は一回り以上肥大化し、そのボサボサの髪は地に着くほどに長くなる。そして目の下まで突き出し伸びた犬歯、こめかみ蟀谷の少し上から生えてくる角——”赤鬼”を表現するなら、当に彼の成の姿だろう。

「よお……お前さん、ナイフってモノの、一番の威力の出し方って知ってるか」

彼女に問い掛けたのではない、むしろ教えるかのような口調。ただしその声は先程の男の声より一オクターブは低いだろう。

彼、いや赤鬼はナイフを手の中に包むと——手が大きすぎるので普通に握っていても覆えてしまうのだろう——次の瞬間には、そのナイフは三本へと増えていた。そう、まるで手品のように。

そしてその増えたナイフの内、二本を少女に投げる——普通のナイフ投げではあるが、そのモーションの速さ故に、巨体から高速でナイフが飛び出したようにしか見えない。

「うっ！」

少女は咄嗟に剣を振るおうとしたのか、その時体が傾き、一本は少女の髪を数本切るだけで空を飛んでいく。だが、二本目は少女の心臓を――いや、心臓より少し右にそれてはいるが――貫いた。

「外れた……か？」

どう見ても直撃はしている。もし今のを”外した”と言うなら、彼方へと飛んでいった一本目。二本目は心臓の真横、致死の場所を貫いているからだ。

それなのに、男は焦り、落胆し、不安に駆られていた。それは一体何故なのか。

「おいおい、一撃で仕留めるなんてったって、やっぱ無茶だろう……。こりゃマジでヤバイかもな」

体を貫かれた少女はその場に倒れる事はなく、あろうことか胸に刺さった異物を抜き去ったのだ。

男は舌打ちを付くと、ナイフを横風ぎに構える。それを横に一振りすると、その軌道上には十ほどのナイフが浮かんでいた。

ナイフを持っていない左手で、その内一つを弾く。すると、最初の様なスピードではないにしろそれを先頭に、ナイフは一斉に少女へと向かい走る。どういう訳か、一つは真っ直ぐに、一つは曲線を描き、と全て違う方向へと向かい、また違う角度から一斉に少女を狙ったのだ。……その迫力や、勿論攻撃性も、先程の比ではないだろう。

――が、その全ては弾かれ、または斬り割かれ、一本も少女の体を貫くことはなかった。これも勿論、その少女によって成されたことだ。

「はぁ……だからこの娘と遭い合うのは嫌なんだがな」

今度はナイフを二つに増やす。それを両手の中指と薬指の間に挟み、前方への突進して行った。

その最中、片方のナイフを対象に投げる。少女が跳躍でそれを避けると、もう片方のナイフを握り直し、此方も跳躍しながらの切り上げを繰り返す。その疾風のごとき連打はしかし、切り上げたナイ

フを鋒で受け止められ、勢いをそのままに背後への二重跳躍によって避けられてしまう。

とん、と軽い音で手すりに降り立つその動きは、サーカスの綱渡りでも見ているかのようにだった。

「……?!」

空から降り立った時、赤鬼の右腕だけはそのまま、それだけで地面へと落ちてしまう。

先の一連の流れで、いつの間にやら、その利き腕を斬り裂いていたらしい。

「今は、闘いたくない」

それどころか、ここまで優勢になっても、少女は自ら戦う意思を見せなかった。

「俺だって、お前さんとなんざ戦いたくないっの!……だったら、さっさと戻って行ってくれって」

「今は……戻りたくない」

そのまま後ろへ跳躍——ビルから飛び降りる形での戦線を離脱しようとしたのだ。

「逃がすか、よっ——!!」

そんな状態でも、男も黙ってはいなかった。

左手でナイフを拾い上げると縦、横、斜め、と縦横無尽にそれを振る。軌道上には先程より遥かに多いナイフが現れ、今度は停止することなく、現れ様に少女へと飛んでゆく。止めなかったからだろうか、特殊な起動は一切描かず、真っ直ぐに対象を狙う。

しかしそれらが少女に触れるか否かの時、少女は緑色の——蔓つるの壁に覆われる。勿論ナイフは彼女を貫く事はなく、その壁諸とも、少女と共に落下して行った。

「ちっ、マジかよ……。いつの間にミストルティン以外から出せるようになったんだ、アレ」

落下し、蔓の壁に護られ無傷のまま走り出した少女を見下ろして、それで諦めたのかナイフをホルダーにしまい、そこから背を向けた。

ゆっくりとした足取りと、どこか満足げなその表情は、彼が意図的に少女を逃がしたのではないか。そう思わせるものであった。

だが、ここには当事者以外の、誰の目も無いのだ。後になってこのことを追及することは、きっと誰にもできやしないだろう。

lim6: Reunite With Her (後書き)

「それでは、また月曜日に」

「うん、今日はありがとう」

「結局私までお邪魔しちゃって、……ごめんね？」

三者三様に、それぞれが挨拶を交わす。

あれから暫く、とりとめのない会話をしていた。……主に、武術関連の内容だったのだが。

どうやら彼女たちは、最近の話題に^{「さうじやう」}尽く疎いらしい。女の子同士でどんなことを話すか、なんてのは知ったこっちゃないのだが、まさか二人ともテレビを見ないとは思わなかった。

八木カナは同じ寮生だったらしいのだが、どうにも遭遇しなかったのは、彼女がテレビを見ないから、だろう。

「帰り道、分かるよね？」

てつきり一緒に帰るものだと思っていただけに、その言葉は意外だった。

「分かるけど……まさかお前、帰り道分からないのか?！」

「そんな訳ないでしょっ」

「じゃあ、どうしても俺と帰るのが嫌だとか？」

盛大にため息をつかれてしまった。

「ちがう。さっき言ってた塾の先生、橘さんに会ってくる。早い方がいいでしょ？」

「あ、ああ」

俺が相づちを打つと、止める間もなく駆け出してしまった。

折角だから一緒に行ってみたかったのだが、と思っただけでも時既に遅し。ただ、

「八木って、良い奴だな」

「そうですよ。カナちゃんは凄く良い人なんです」

反応もやることも、考え方も極端に走ってしまう彼女に、ほんの少しの共感と、意外と大きな好意を持っているのには気付いた。帰り道はなんとなく、騒がしくない一歩前に寂しさを感じていた。

lim7: Red Provocation

「なあレオ、今日こそは紅花様には会わないんだな？」

「大丈夫だよ、今日も会わないから——」

日曜曰。

俺の、かなり遅めの起床は、ショージの”さわやかボイス”という名の目覚ましによるものだった。

一昨日帰って来て紅花さんの家に行ったことを話した時から、コイツの態度はこんなだった。そろそろ歪んだ愛とやらを考えてしまいそうだ。

「……何だったら、紅花さんに紹介してやろうか？」

「ば、バカ言え！！俺なんかが目の前に立つなんて、し、失礼過ぎるだろうがっ？！」

「あー、確かに……」

因みに、ショージの机の引き出しには”椿紅花様写真集”なる隠し撮りの結晶がある。

写真部の紅花さんファンを懐柔^{おと}し、授業中、体育、ヒドイものだと更衣室の中でのモノもあるく、何でも、ショージ曰くファンクラブ会長が代々受け継いでゆく（予定の）秘宝らしい。

その活動自体もって後二年だと言うのに、コイツの熱意だけは脱帽ものだ。——流石に犯罪者にはなりたくないもので、俺は一切手を付けていない。と言うか、紅花に失礼過ぎるだろ。

それと余談だが、実はシイナ先生のファンクラブも同時期に創られたらしい。アレの何処が良いのだから……とは本人の前では口が裂けても言えない。勿論、その妹の前でもだ。

「おい、電話鳴ってっぞ？」

「あ、ホントだ」

着替え終わって、これから優雅にランチでも頂こうかと思って

いた矢先、自分のケータイ着信に足止めを食らってしまった。

それを教えてくれたショージの目はキラキラと輝いている。紅花さんとも思っただのだろうか。

ディスプレイに映っている”八木カナ”の文字を見せてやると、その輝きはしっかりと雲っていった。これって、噂をすれば、つてやつか？

因みに一昨日の内に二人の連絡先は教えてもらったのだが、肝心の紅花さんはケータイを持っていなかった。対する八木カナも機械音痴と言う、またアナログな人間だったのだが。

「もしもし？」

『峰渡君？……見たって、くうさんのことっ』

「——っ！？」

「おいレオ——！」

気付けば、ショージの制止を待たずして部屋を飛び出していた。

——くうに、会えるかもしれない……っ！

「今、どこ？！」

『え？あー塾の前なんだけど……六花園駅に来て。案内するから』
「分かった！」

通話終了ボタンを押して、ケータイをそのままポケットへと突っ込む。玄関に行き、自分の靴に両足を突っ込むと、後はもう全力で駅へと走っていった。

大きな期待と緊張とが、余計に俺の心拍数を上げていた。

駅前の広場に着き、辺りをみわたしたのだが、まだ八木カナは来ていなかったらしい。来るのが早すぎたかもしれない。

五分ほど駅前の広場で待っていると、八木カナは駅の中から出て

きた。向こうも此方を確認したようだったので、小走りで近くまで行く。

「随分と早かったね」

「くうに、会えるからな」

まだ完全に止まってない汗を拭い、緊張と期待を抑える為に深呼吸をした。

「え？くうさんには会えないよ？」

「っ？！……そ、そうなのか？」

丁度息を吸っていた時にそんな事を言われたものだから、喉に詰まって噎せそうになった。それだけ俺にとっては衝撃の事だった。

「あーもう……。『見たって』、としか言っていないでしょ、私は」

ああ、そうか。確かにさっきの電話ではそうとしか言っていなかった気がする。

てつきり、くうに会えると思って急いでここまで来ていた。それだけに、それが俺の早とちりと分かった時の力の抜け様は、それはもうヒドイものだった。元々壁際で、そこに寄り掛かっていなかったら、その場にへたりこんでいたかもしれない。

「とにかく来てみたら？私も彼女の事、見たってぐらいいしか聞いてないし、もしかしたらまだ会えるかもしれないよ」

慰めだろう、それでも気を遣ってくれたんだから、俺はそれに応えなければならぬ。

「そう、だな……。ああ、頼むよ」

駅を潜ると、反対側にはオフィス街が広がっている。そこを更にずっと進むと海岸へと続いている。地元民は一貫して、そちら側を”裏”と呼ぶのだが、俺からしてみれば此方よりも住宅街の方が”裏”っぽくてならない。

駅の周辺と、海の近くは割と大きな建物が多い。駅前だと大型のスーパーマーケットや何だかの会社、それに大学が入ってるビルまである。……の割に、昼間でも人通りはそこまで多くないのが此方側の特徴だ。

ゲームセンターの様なモノもあるので、たまにクラスメイトに誘われ行くこともあったが、俺も駅前なんて滅多に来てない。

休日の昼間だからか、ついこの前、放課後に来たよりは随分と沢山の人がいた。とは言え、歩くのに困難するほど多い訳でもなし、みんな買い物に来た、というだけのようだ。

少し歩くと建物の数——と言うより高さ、だろうか。そこらあたりが寂しくなつてくると、人の流れも急激に少なくなる。

「こんな奥まで来たのは初めてだな」

「へえ。海とかは行かないの？」

「面倒くさい」

「うわっ……」

海とは、歩けば駅から小一時間ほどの所にあり、バスも出ているらしく、夏は大層な賑わいがあるらしい。

しかしここら辺りはそんな賑わいとは無縁の、八木カナと二人つきりだと錯覚しそうな程静かさだ。海だってこの時期じゃ誰もいなそうだし。

因みに俺は地元民じゃない。だからって、別に泳げない訳でもない。——ない。

海やプールで遊ぶのはクライじゃないし、カナヅチという訳でもない。ただ……人前で泳ぎを見せれるほど俺は上手く泳げないらしい。

小学校前の時に市民プールへ行つたとき、俺は泳いでいただけなのに、何故だか大声で叫ばれ、縄付きの浮き輪を投げられた記憶は鮮明だ。あれ以来それがトラウマになって、水遊びでは絶対に泳がないようしている。

駅からゆっくり目に15分ほどだろうか？宿泊街に近付き、塩の匂いがほんの少し漂ってきたところで、とあるビルへと到着する。その五階が目的地の、『橘アカデミー』と、聞いたこともない名前の私塾だった。あれ、この橘って……

「前に話した橘さんの、中学生対象の私塾だよ」

なるほど、先生とは聞いていたが、塾長が何かをやったのか。

堂々とその中学生対象の塾へと入ってく八木力ナを、妙に微笑ましく思ってしまった。――背丈や体型的にもそう見えなくもないよな。……なんて考えていたところを、またキツツイ目で睨まれてしまった。テレパシーだろうか？

「橘さん、戻りましたー」

「おう八木か。ソイツが例の？」

中へ入り一度角を曲がると、受付にはとてもだらしない格好でグラビア誌を読み耽っている無精髭の男――アが塾長の橘さん、なのだろうか？――に出迎えられた。

八木力ナの口調や態度も普段学校とかで目にする優等生気取りの真面目被りではなく、多少抜けた、素の状態だった。……大丈夫なのか、この塾は？

「はい、峰渡君です」

「ほー。」

突然だがお前さん、L I Mについて何処まで知ってる？」

「ちよっ――」

本当に突然だっ！

って言うか、こんな大っぴらに言って良いものなのか、” L I M ってモノの事は？！

「ああゝ悪い悪い、まず名前だよな。

橘幾斗、よろしくなー」

言った本人はそんな事気にした様子もなく、呑気に自己紹介なんて始めるし。

「じゃなくて！こんなところでその話題出しても良いのかよっ！？」

「あーそのことか。安心しろ。今日は休講になってるんでな」

しまった、思わず勢いでタメを使ってしまった。……どうやら当の本人は普通に対応してくれたみたいだし、それに関しては心配ないだろう。

それより、いきなりL I Mの事を話しても、本当に大丈夫なのだ

ろうか？ちよつとした不安はあるのだが、催促もされてるようだし、腹を括って話すことにする。

「……タイムリミットがあるのと、強くなったり特殊能力がつくこと。それと、死なないことくらい。……です」

「まあだいたいそんなもんか。粗方合ってるみたいだし……椿紅花の戦闘シーンにも既遭遇してるんだろう？なら大体は理解してるだろうなあ。

——それと、無理して敬語使わなくていいぞ？」

橘……さんからお許しを出してもらった。

正直なところ、この人に対しては敬意が持てなかった。と言うか、年の割にそうは見えない。むしろその眼からは冷たさとか、鋭さとか……上手く言えない何かを感じていた。

「じゃ本題だが——お前さんの探してるのはネルヴェエ、だったよな？」

「——っ!？」

あまりに普通に言うものだから、それが一瞬くうではないことに気付けなかった。そのまま頷かなかったのが奇跡だった。

「ネルヴェエ？くう、じゃなくて？」

八木カナに——勿論、紅花さんにも、その名前を言った覚えはない。

いや、あの時彼女自らが名乗った時に聞こえてた可能性はある。

しかしそれなら、紅花さんからの確認が入るハズだ。

「じゃあ、何でだ？コイツは、何でネルヴェエの名前を知ってるんだ？」「特徴聞いて、まさか、なーんて思ってたんだが……ビンゴだったか」

橘は机に放り出していた脚を納め、代わりに頬杖をつきながら話しくる。

俺は、コイツの策略にまんまと嵌められていたのだ。

それと今気付いたけど、コイツの眼が鋭いのも冷たく感じるのも、それだけじゃない。コイツ自身から出てる殺気によるモノだって。

「実はな、俺もあの娘に用があるんだ。どだ、手を組んでやってもいいぞ」

「アンタは……何を知ってるんだ？」

ニヤリ、と汚い笑みを浮かべられる。背筋に悪寒が走り、首筋に鳥肌が立つのが分かった。

「全部さ。少なくとも、3年前に研究所抜けるまでのあの娘に関してはな」

——知りたいんだろう？

言われなくとも、そう問われてる気がした。それは、今知っちゃいけない。

悪寒が、戦慄へと変わってゆく。嫌気が怒りに変わっていった。

「何でくうを……ネルヴェを探してるんだ？」

「別に俺個人がつてー、訳じゃない。昔いた研究所から要望が来ただけさ。一年ほど前、あの娘が研究所逃げ出したらしくってなあ。

大規模に捜査する訳にもいかないんだと。

で、元研究員で、且つあの娘の世話係だった俺が頼まれたって訳だな」

——研究所、

——世話係、

そういった単語に、俺が聞いちゃいけないようなイメージを植え付けられる。不吉な、そして非道なイメージが。

そんな俺の妄想が、俺の考えた嘘であって欲しい。只々、それだけを思っていた。

では何で、俺に？

そんな、研究所とか言われてもピンと来ない。想像もしたくない。そんな所の人間が、何で俺なんかに協力を頼むんだ？

「なんだ疑ってんのか？でもなあ仕方ないんだぜ？使えるモノは親でも——ってな。

それに、お前さん達に協力してもらうのには歴とした訳がある。椿紅花だ。既に解放したことのある奴が、お前さんの近くにいる。

ネルヴェエ、つてのは凶悪でなあ。だから、同じくLIMである奴が対処すりゃ、問題ない」

「問題ならあるぞ。……くうと紅花さんが闘う」

一瞬の沈黙。そして、それは橋の大笑いに――嘲笑によって潰された。

「こりや傑作だ！『タタカウ』、が問題？そりゃ確かに大問題だなっ！かははははっ……！」

なおも笑い続けるこの男に、そろそろ理性の限界を感じていた。バカにしゃがって――

爪が食い込むほど、痛く、拳を握りしめて耐える。

「まあ、いいさ。それでも。」

それで本題に戻るが、手を組んでやる。お前さんが彼女を見付けたら俺に引き渡す、俺が見付けたら、送還前に一目会わせてやる。

確か、謝りたい、んだろう？

――どうだ、悪い話じゃないハズだ」

さっきからのその、『してやってもいい』って口調や態度が気に入らない。

考えるまでもなく、俺の口からは断りの返事が出てきている。：

……ちよつとの棘を含んで。

「そか。まあいい、ならお互い勝手にやってようじゃないか。ただし、テメエが先に見付けようが何だろうが、俺はアイツを連れていく。……それでもいいんだな？」

「ああ、それでいい」

一瞥だけしてその場で踵を返した。

カウンターから出ようとした直前、軽い風切り音と共に目の前を何かが横切っていった。

横を見てみれば、壁に貼ってあった学校紹介のポスターのモデルとなっている女の子の額に、一本のナイフが刺さっていた。

驚いて反対側に振り返ると、奴は不敵に笑っていた。

「忠告だ。次にそのナイフを見かけたら、目の前掠るだけじゃ済ま

ないと思つとけよ。なんせ、テメエはこの俺に喧嘩売ってきたんだからな」

最初っから、それこそ俺が入って来た時から、俺はコイツに遊ばれてたらしい。

「挑発してたのはお前だろ」

「お前さん、面白いからな」

またニヤリと、追い討ちをかけられた。

俺はわざとらしく鼻息を荒くして、早足で部屋を後にした。エレベーターを待つのも嫌で、階段を、一段飛ばしで降りていく。

「おい八木」

「は、はひっ?!」

一連の流れを、これまでずっと黙って見ていた、或いは、何も言えなかったカナは、出ていこうとした拍子に声を掛けられ、裏声で返事をしてしまった。

「んなビビんなんて。ちょーっとからかってやってただけだろうが。」

——んな事より、あの野郎をしつかり見張つとけ」

「え……み、見張るって?」

「ほつといたら何しでかすか分かったモンじゃねえ。ブレーキにでもなつてやれ」

そう言った幾斗の表情は、さっきまで礼於を挑発していた時とはまるで別人のような、——言うなれば、息子でも見るような眼差しをしていた。

そんな彼の態度に戸惑っているのか、カナは彼を見たつきり固まつてしまっていた。

「おいおい、俺がそんな、鬼とかみたいに思ってたんじゃないだろう

なあ？」

「だ、だってナイフ――」

ポスターを見ると、そこには痕跡があるだけで、つい数秒前まであったナイフは跡形もなくなっていた。

「俺は外せる。だがな、中には外さないヤツだっているんだよ」

「外さない……？」

カナがそれを聞いたとき、幾斗は既に最初の、だらけきつた格好へと戻ってしまった。その言葉の意味は、俺は言わない、とでも言いたげに。

「そうだ、”くう”って奴を見たのは、海の側の、一番高いホテルの上で、だ。そこから飛び降りたから、流石に追ってないけどな」

「と、飛び降りたあ？！」

彼女が驚くのも無理ない。海の近くのビルは、低くても彼女の学園ほどの高さはあるのだ。まして、一番高いものはその数倍はあるのだ。

だが幾斗はそれに対して、

「LEMだからな」

とだけ答えたのだった。

こうゆう時、もし目の前に海が広がってたら「バカヤロー！」とでも叫んでしまっただろう。そんな気分だった。

少し遠いけどバスも出てるし、なんだったら向こうまで行こうとも考えていた。そこで、ポケットには財布が入っていないのに気付いて、また落ち込んだのも事実だが。

「えっと……橘さんも、悪ふざけが過ぎただけだよ！気にしない気にしな！……って、ダメか」

駅前のベンチでふて腐れてるのを、八木カナは律儀にも付き合ってくれていた。

「先帰ってていいぞ。道、分かるから」

悪いと思って言った言葉は、さっきの棘がまだ取れてなくて、かなり突き放した口調になってしまう。

「そんな訳にいかないでしょっ」

それでも、酷く言ってしまったてもちゃんと付き合ってくれてるんだから、こいつは相当なお節介焼きなのだろう。

難儀、と言うか、悪く言えば堅苦しい性格なんだろうけど、今はそれが十分な気がした。なんだか落ち着く。

「私だつてまさか、あんな風になるとは思ってたし……。なんだかゴメン。」

——あ、ちよつと待ってて」

突然走り出したと思えば、向かいにある自販機で飲み物を買ってくる。二つ買った物の内一つを、俺に手渡してくれた。

今日は割と暖かいのだけど、そこでホットの緑茶を選んで、自分も同じそれを選ぶんだから、やっぱり律儀と言うか、難儀だな、と思ってしまった。

「オゴリ」

「サンキュ」

プルタブを開け一口、程好い渋みと暖かさに、いきり立った気分はもう、殆ど癒されていた。

「何で断ったの？折角の機会だったのに」

落ち着いた頃を見計らって、そう訊ねてきた。

「アイツに、くうを連れていかれるのはなんか嫌だ」

「ふーん……」

でも、じゃあもしくうさんを見付けたとして、その時はどうするの？お持ち帰りでもする？」

こいつの表現は少々下品だったが、確かに、その先の事は決めていなかった。

少し考えてみる。

まず、寮にはおけない。見付ければ大変な事になる。勿論学園生じゃないから、女子寮にだって置くことはできない。

紅花さんの家に泊めてもらうか？……いや、そもそも、彼女にそこまで甘えちゃ駄目だろう。言え、二つ返事で許可してくれそうなのに、それだけはやりたくない。

じゃあどうする？結局は、そこへと戻ってきてしまった。

「決めてないんだ……」。

じゃあもし橘さんが先に見付けちゃったとして、そしたらどうするつもり？諦める？」

「いや、諦めたくない。何としてでも、絶対にくうに会って、謝る！」

「はあ……」

溜め息をつく、残っていた緑茶を一気に飲み干してしまった。

——って、大丈夫なのか！？女の子とは思えないような悲鳴が聞こえてきたのだが……。

「だ、大丈夫か？」

「へ、へえひ……」

全然平気そうには見えない。と言うか、声が既に変わっていたぞ。咄嗟に背中をさすってしまったのだが、こういう時ってどうしたらいいんだろうか？

冷たい水——は、自販機にはあるのだが、手元にあるのは同じく熱いお茶だけだ。

「海の近くの、一番高いホテルの屋上、だって」

「え？」

「くうさんを見たって場所。峰渡君、橘さんから何にも情報教えてもらってないもの。」

確かに、LIMや、ネルヴェの事について聞く絶好の機会だったのかもしれない。

——知りたいんだろう？

確かに、アイツもそう訴えかけていた。……それを突き放してしまったのは俺のミスなのだろうけど。

それより、八木カナの復活の早い何のって——まさかLIMだったたり?……こいつなら、あり得る。

「私はLIMじゃないよ!」

考えを読むな!……ってまさか、本当に読まれたんじゃないだろうな?

「だいたい、いくらLIMだからって本来は普通の人間だよ。コウだって、普段はちょっと強いだけの、普通の女の子。火傷だってするし、LIM化でもしてなければ傷もなかなか治らない、普通の人間なの。……そこ、間違えないで。」

——ってこれ、コウから聞いてないの?」

「あー……じゃあ、本当にLIM化してる時だけなんだ」

そう言つと、盛大なため息と共に例のジト目顔——もう、ヤギフェイス、いや、カナフェイス?とでも名付けてしまおう——を向けられる。

……でも、そうなのか。いくらLIM化できる人でも、普段は俺と何ら変わりの無い、普通の人間なんだ。

今まで紅花さんやくうに、それでもやっぱり少し引つ掛かっていた何かが解けていた。ああ、恐れることはないんだ、って。

「とにかく、海。今からでも行ってみる?」

と、バス停を指差される。……のだが、先の通り俺は財布を持ってきてない。

その旨を伝えると、またカナフェイスを向けられてしまった。そろそろこいつの顔を想像するとき、この顔が初めに浮かんでしまいきそうだ。

「良かったねー、コレ、私のオゴリで」

「ああ、ごちそう様」

「はいはい。」

それで?後でコウも連れて、もう一度集まる?早い方がいいでし

よ
」

ちよつと考えてみる。

確かアイツは、くうが1年間逃げ隠れてきたと言っていた。

……実際、あんなに目立つ格好をしている割に話題にすら上がってない。それどころか世間では知られていない、L I M って存在だ。同じ所に留まっではないだろうけど、くうの事だ、何処かでお腹でも空かせているのではないだろうか？ いやそもそも、一年間の食べ物は大丈夫だったんだろうし、本来ならその心配はないのだろうけど。

後は直感的に、くうがまだ近くにいそうだ、って事だけか。

「いや、いい。ただ、これからは毎日海の方へ行くことにはするよ」

「そ？」

「ああ。一週間近く経った今でも、こんな近くにいるのは分かったんだ。きつと会える。そんな気がする」

「ふーん……所謂”繋がってる”ってやつ？」

結局、その第六感の様なモノに頼ってしまうんだから、今までの下調べなんてあまり関係無くなってしまった。

それでもくうとは繋がってる何かがある。だから俺は、それに従って動くしかないんだ。

……それと、隣にいるこいつは何故、何処かで見た様な意地悪い笑顔をしているんだろうか？

「今日は解散でいいよね？ いい話題も手に入れたことだし、私はコウの所に行ってくるよ。じゃあねー」

「あ、ああ。色々ありがとうな、八木」

小走りで駆けていく背中に頭を下げると、律儀にも振り反ってくれる。

「だーかーら！ あなた手伝わないとコウを悲しませるだけでしょ！」
去り際の顔が赤くなっていたのは、ちよつと遠目のここからでもはつきりと見えた。

やっぱり八木カナは、相当な照れ屋かもしれない。紅花さんの為、

なんて言っても確りと色々してくれるんだから、それが誤魔化しだなんて直ぐに分るというのに。

先ずは、帰ってから地図張でも開こう。明日からの行動範囲は確認しておきたいし。

帰り道は、妙にワクワクした気持ちで、ゆっくりと歩いていった。

lim7: Red Provocation (後書き)

「——と言う訳だから、コウ、明日から峰渡君と二人で頑張ってね」

「えっ、カナちゃんは来ないの?!」

お昼頃、カナちゃんが来ました。

橘さんはあの方の事を見かけたようで、明日からは礼於さんが裏側を探すって事を教えに来てくれたんです。

私たちも一緒に探そう、って流れだったハズなのに、いつの間にか私と礼於さんだけで、ってコトになって……

「峰渡君、くうさんとは繋がってるって言うてたよ。コウも負けられないんじゃない?」

うん、やっぱり礼於さんにもっと近付かなきゃ!

「私、頑張る!」

力んじやって、ふと手元を見たらお気に入りの湯飲みに罇ひびが——
ううん、そんなこと、気にしちゃだめだよねっ。

「う、うん、がんばれ……」

よし! 先ずは明日の朝、礼於さんに……礼於さんに、何て声を掛ければいいんでしょうか……?

お手伝いさせて下さい——? それとも、お供させて下さい——?

ここは礼於さんみたいに、私も繋がってますから、かなあ?

「ど、どうしようっ、礼於さんに何て言うて、着いて行けばいいのかなあ?」

「普通に、お手伝いしまーす、とかでいいと思うけど」

「で、でもでも、逆に軽薄だとかって思われないかなあ?」

言葉に出してみると、色んなことが不安になってきました。

どうしたら誠意が伝わるだろう？　どう言えば不自然じゃないだろう？　どうしたら……

「まったく、私に対してはあんなにも容赦無いのに――
峰渡君の事、好きなんでしょう？　だったら自分で考えて、行動しなきゃ」

「う、うん……」

カナちゃんはこう言ってるけど、私がやらなきゃいけないのも分かっているけど、どうしても自信が持てないんです。

「や、やっぱりカナちゃんも付いて来て？！」

「ええー」

「だ、だめ、かなあ……？」

(うつ……)

必死に頼み込んでみます。

でもどうやら逆効果だったみたい、カナちゃんはドン引きしちゃてるんです。

た、確かに、こんなことで誰かを頼るなんておかしいですよね。

「コウ、さ。峰渡君にそう頼んだらいいんじゃないの？」

「え？」

そう、ってどう言うことなんでしょうか？

「はあ……いいけど。」

じゃあ明日の放課後、しょうがないから一緒に行っただげる」

てつきり断られると思ってたから、何を言われたのか理解するのに時間がかかったやいました。

でもちゃんと、”一緒に”って、言ってたよね？

「うん、ありがとう、カナちゃん！」

その言葉と一緒に、思わずカナちゃんに抱き付いちゃったりして「仕方ないからキューピッドになってあげるけど、ホント、普段からそれだけ表情豊かなら峰渡君だってイチコロだろうに」

そうやって冷たい目で見られて考えて、今の行動を礼於さんにやってる自分を想像してみました。

絶対にムリだあ……。

lim8: to Sea, to She

一週間が経った。

会えるかもしれない。会えたら、まずは謝ろう、その後は……
なんて考えは、完全に皮算用と化していた。

あの翌日、早速出掛けようとしたところに紅花さんと八木カナが現れた。なんでも、折角だから手伝いたい、とのこと。

裏側のマップは作ってみたのだが、どうやら俺の認識は甘かったようだ。

そう、余りに広すぎたのだ。

初日は三人で固まって歩いていたのだが、確かに楽しかっただけに、調査全く進まなかった。

なので、次の日からはバラバラになって、聞き込みや、それっぽそうな場所をチェックして回ったのだが、俺はともかくも二人は女の子だ（俺より強かろうが）。

この時期だし、遅くても六時ぐらいには切り上げないとまずいだろう。それにこっち側は雰囲気良くない。大丈夫だ、と言われてもそうはいかないだろう。

その後にでも一人で探そうとしていたのだが、今度は俺がそれを止められてしまった。

「少なくとも、私より強くなってからにしてよね」とは八木カナ。もつともなのかもしれないが、なんか悔しい。

そして更に休日を跨いだ月曜日。終業式の朝だった。

「レオ！いい加減はつきりしてくれっ！」

「いきなり、何なんだよ……」

最近の恒例となりつつある、ショージの怒声による目覚まし。

と言うか、昼夜を問わず、俺に対して怒りを見せ付けてくれているのだ。

……まあ、つまるところ、俺と紅花さんが一緒にいることが許せないからなのだけだ。

そんなに許せないんなら、お前も話しかければいいじゃないか。って、ムリだからこんなにも怒ってんのか。

「デメーは紅花様とヤギ、どっちが好きなんだっ?!」
(そっちかよ?!)

てつきり昨日までみたいに、毎日のように一緒にいることを指摘されると思っていたのだが、また以外な方向からの指摘をされてしまった。

まあ、これもある種一緒にいることの指摘な気はするが。

「何度も言ってるけど、紅花さんはちよつとした事故からの協力関係。で、八木はそのサポート。別に、それだけだよ」

何度言っただろう、本当に。さっぱり理解してくれないのは困る。

「嘘コクなっ!」

——俺はなあ、見たんだっ!二人と駅前でとつかえひつかえ、その……デ、デデートをだなあ〜!」

デートって……

と言うか、たかだかデートって単語だけで、そこまで動揺するなよ。

男が照れながら何かを喋るのは、特にショージだからだが、非常にキモチワルイぞ。

「そんなんじゃないよ。

今も言っただろう、ただの協力関係だっ」

「とにかく!今更、紅花様と一緒になのは言わないでやるっ!

けどな、二人に……いいや!紅花様に恥をかかせるのだけは、この俺が許さんっ!それだけははつきりしてくれ!」

聞いちゃいない。

「恥って、あのなあ。

第一、二人とも俺にそんな浮わついた気持ちで接してないっての。

デートだかなんだか言うのは勝手だけど、それは二人に失礼だろう?」

「むしろヤギにしろ! アイツだって見た目だけなら悪くない! 全国の紅――」

やっぱり聞いちゃいなかった。

そんな、ショージの勘違いから始まった(一方的な)言い争いは、つい先日直されたばかりの扉が、ノックされる音で中断されてしまった。

ショージがまたぶつくさ言い始めたので、仕方なく俺が出ることにした。

「どちら様ですかー」

「あの、おはようございま」

と、勢いよくお辞儀をしたため、半開きの扉に頭をぶつけて悶える、紅花さん。

結構いい音が響いたのだが、それは大丈夫なのだろうか?

「こ、ここ、紅花様!？」

「え、えと、”さま”、……ですか?」

その紅花さんの声を聞いたからか、現実へと戻ってきたショージ。と言うか、その呼び方といい、いきなり姿勢を正すところといい、流石の紅花さんだって狼狽えているようだ。

「それより、朝からどうかしたの、紅花さん?」

すると今度は、随分と恥ずかしげにモジモジし出したのだった。

顔も更に紅くなった気もする。

そして、

「は、はいっ!」

……えと、たまには、迎えに来てもいいかな、なんて

と、言い放ったのだった。

また以外な答えが返ってきて、これまた状況を掴めなくなってしまった俺。そして後ろの方から聞こえる、実に爽やかな笑い声。

つまり、だ。

今日の昼飯代、後でシヨージに渡しておこう。
そう思わざるを得なかった、と言う訳だったのだ。

「多々良さん、でしたか？」

あの、私の事、”様”を付けて呼ぶの、出来れば止してもらえませんか？」

「そ、そんな恐れ多いっ！紅花様は紅花”様”たからこそ”紅花様”なんですよっ！」

意味が分からん。

「それに、俺なんかが一緒に歩かせていただいてるだけで、光栄ですっ！ええ、光栄なんですとも！！」

「は、はあ……」

さつきから、紅花さんがコイツに何か話しかける度、こんな感じだ。

同い年なのに、シヨージは紅花さんに変な呼び方をしたり、妙に腰を低くしていたり。

勿論そんな態度に、紅花さんが戸惑わない訳がなく、幾らか指摘したりするのだが、対してシヨージは変な言い訳をする。

事の発端は、あの後すぐ、シヨージはさつさと身支度をして出ていったのだが、部屋の外で紅花さんに捕まったから、らしい。

彼女のことだ、どうせ、一緒にしませんか、とか言ったのだろう。俺が外に出たときには、既に変なシヨージになっていた、と言うわけだ。

しかしこんなんで大丈夫なのだろうか？主に社会的な問題として（多々良さんって、いつもこんな感じなんですか？）

シヨージの将来を心配していた矢先、歩調を少し早め、いつの間

にか俺の隣まで来ていた紅花さんに話しかけられた。

（それは……相手が紅花さんだったから、だと思っよ）

（私が、何かしたのでしょうか？）

ファンクラブがある、って事は、この人に言っても大丈夫なのだろうか？

……いや、多分ダメだろうが、ショージだしいいつか。

（紅花さんファンクラブの会長やってるからさ、アイツ）

（えと、何かの会長さん、なんですか？）

（あー……まあ、ね）

この様子だと、多分、肝心の処は聞こえていなかったようだ。

多少の安堵感と罪悪感に悩まされる。

どうやらその肝心の部分を聞きたいようなのだが、これは反芻すべきものではないだろう。

「多々良さん、何かの会長さんなんですか？」

「そ、それはっ——！！？」

遅かった。

紅花さんが隣からいなくなった時点で気付くべきだったのだろう。俺がすぐに答えなかったからか、それともその”会長”と言う響きに興味があつたからか、紅花さんはショージに直接問いかけていたのだった。

……その、少なくとも紅花さんの口からは言っではいけないであろう疑問を。

「頑張つて下さいね、会長さんっ」

「——！！」

しかもあるうことが、輝かしい程の笑顔でショージへと向けてしまったのだ。

勿論、ショージがこの人の笑顔を直接見たことなんてないだろうし、ましてや疚しい事に対して向けられた笑顔だ。普通の人が耐えられるハズがないだろう。

一瞬固まった後、顔を真っ赤にして、また泣きそうな表情で、走

り去って行ったのだった。……だから、キモチワルイって。

「多々良さんって、随分と謙虚な方なんですね」

「そう思えてる紅花さんが凄いよ」

「え、えと……？」

思わず深いため息を吐いてしまった。

——紅花さんって、天然だね。

なーんて言ったところで、この人には効かないんだろうな。

八木カナ辺りにでも言ってやれば、面白い答が期待できそうではあるが。

終業式、とあつて、今日のやることは式本番と、（俺たちのクラスに関しては）短いHR、^{ホームルーム}後は大掃除だけだった。

それも全て終わる頃には、昼近くなり、クラス毎のHRの長さなんてものは意味をなしていなくなっていた。

それと、本来なら俺は掃除当番じゃなかったのだ。

朝、あれ以降シヨージの姿は見かけていない。鞆だけは机の上に置いてあるのだが……

そんなんだから、シイナ先生からご指名を受けたのだ。

——アイツの代わりに掃除をやれ、と。

せっかく昼飯奢ってやるうと思って、今月なけなしの仕送を使つてやるうと思ったのだが、止めた。もっと有意義な事に使いたい。

「峰渡君、いますかー？」

俺が掃除を終える頃、そろそろ来るかな、と思っていたところに八木カナだけがやって来た。

ここ一週間、HR終了直後には、八木カナと紅花さんが此方の教室へと顔を出すようになっていた。終業式とあつて掃除などが忙し

いのか、今は紅花さんの姿は見受けられない。

これも、最初の二、三日こそ、また各所でこそそと言われてはいた。今となつてはそこまで気にされていないみたいで、俺も落ち着いていられる。

「ねえねえ、八木さんつて、峰渡君と付き合つてるの？」

……とまあ、男からは追及されなくなったが、そつちが落ち着くと、今度は女子から色々と聞かれるようになってきたのだが。

「ち、ち違う違う！こんな変態と一括りにしないでっ」

久々にこいつから変態、と呼ばれた。そろそろ許してもらいたい、本気で。

むしろホントに変態なら、とづくにどうにかなっているだろうに。

「へへ、峰渡君、何かしちやつたのおく？」

「そうなんだよっ！峰渡君つて前に女子こ——」

（おいっ！）

咄嗟に八木カナの口を塞いでしまった。

モゴモゴと言っているが、多分これなら内容はわからないだろう。

「女子……なんて言つたの？」

「さ、今日も張り切つてこー！」

「ち、ちよつとー！」

追及から逃れるように、いや、逃れるため、八木カナを引っ張つて強引に教室から抜け出す。

階段の踊り場まで来て、こいつのことを睨んでみたのだが、あかんべーとされてしまった。……すっげーム力つくんだが。

と言うかなんだ、俺を貶めてどうする気なんだこいつは。

「そつだ、忘れてた。今日、私行けないから。コウと二人で頑張つて」

「は？」

と思いきや、いきなり妙ことを言われてしまった。

「コレ」

理由を俺が追及する前に、自分の左腕を指差して腕章を見せつけ

てくれた。

つまり、生徒会の仕事があるから行けない、ってことらしい。

「最近サボり気味だったしねー。どっかの誰かさんの性で」

「そっか、紅花さんにはそう伝えておくよ」

「うわっ、ヒツキョー」

久々に見たカナフェイス。やっぱこいつは、この顔じゃなきゃね。階段を上ってゆく八木カナ。それを見届けて、俺も一度教室へと戻っていった。案の定、帰ってきてすぐに囲まれてしまったが。

それから教室から出ると、丁度紅花さんも教室から出てきたように、そのまま肩を並べて学校を後にする。

この一週間で歩き慣れた、裏側へと行く道。

学校からだ、駅へ向かうよりそのまま線路を越えた方が近いし、何より手間が省ける。

普段なら、三人で裏側から駅へと行き、そこで一度解散して、と言う流れだった。だが今日は、

「海、行ってみようか」

少し趣向を変えてみることにした。

「え、い、いいんですか？」

「いや、むしろ俺が了承を得たいんだけど」

変な回答を得られたのだが、この分なら反対、ということはまずないだろうか。

ただ少し遠くなるし、そっちの方は連休中、時間がたくさんできてから、改めて行こうと思ってはいたのだ。

まあ、紅花さんも喜んでるみたいだし、生徒会で来れないらしい八木カナには悪いが、二人で海へと行くことにした。

ちよつと息抜きも兼ねて——と思っていたので、バスで行くことにする。丁度、停留所には海岸行きのが止まっていたので、それへと乗り込む。

この時期に向こうまで行く人は少ないのか、客は俺たちを含めても十人もいかないうだった。

「——えと、実は今日、私も海の方へ行きたいなー、なんて思ってたんです」

二人掛けの座席に座ると、紅花さんはこんなことを言ってきた。「なら、丁度よかったよ。」

毎日こちら辺り歩き回るのも、ちょっと疲れてたしね」

海岸前の停留所に近付いた時には、バスの中に他の人はいなかった。

だからって、これは予想外だった。

季節は春。とは言えまだ三月半だ。

有名な海水浴場、って訳でもないここに、ましてや人なんている筈はない。

それは季節柄なところもあるが、こんな肌寒いのに、ここへと足を運ぶ物好きは、どうやら俺たちだけらしい。砂浜辺りに人影なんてありやしない。

そして何が予想外だったのか、と言うのは——

「どう、でしょうか……？」

と、恥じらいつつも俺の目の前に立つ、一人の水着姿の女の子のこと。

要するに紅花さんだ。

「うん、凄くよく似合ってると思うよ」

「ほんとですかっ?!」

——遡ること十分ほど前。

バス停に降りるなり、「少し、お時間頂けますか?」と、それだけ言って紅花さんは何処かへ行ってしまったのだ。

何処へ行くのかを聞いていなかったから、少し離れた所にあるコ

ンビニで、お茶と、鮭、梅、焼たらこのおにぎりを、それぞれ二つずつ買ってきて、元の場所で待っていた。

勿論、二つずつてのは俺と紅花さんの分だ。

ショージのために用意していたお金だったと、アイツに奢るくらいなら紅花さんに出した方がよっぽど有意義だ。それならアイツだって認めるだろうし。

で、待つこと更に数分。

「お待たせしました」と、元の姿で帰ってきた紅花さん。

そしてその場でいきなり脱ぎだし、現れたのがこの姿、と言う訳だ。

「——って、なんで俺の前で着替えたんだよ……」

「えと、その、あまり他の人に見られるのは、ちょっと……」

あまり他人に見られたくない、ってのは分かったが、俺の目の前で服を脱ぐのは恥ずかしくはないのだろうか？

確かに、下に予め水着を来ていたんだから、結果的には問題は無いのだろう。

だが、その過程があまりにも刺激的過ぎることに、この人は……いや、気付いてないよな。

「それに、どうして水着なんて？」

「あの、せっかく海に行くなら、って、……カナちゃんが」

「つまり、元から持ってきていたんだ」

控えめに、頷かれた。

終業式の割に、やけに荷物が多いな、と思っていたのは、どうやらこれらが入っていたからのようだ。納得。

「でも、そんな格好で寒くない？」

紅花さんの水着は、所謂、ワンピースタイプというやつなのだろうか？それにしてもやけにピッタリしている気はするが……

真っ白を基調として、腰から、花柄刺繍だろう、フリルのスカートが伸びているのが特徴的だった。

だが所詮は水着、それ一枚じゃ、いくら太陽がてっぺんに来てい

ようと、この季節じゃまだ寒いだろうに。

「私、寒いのは強いんですよ。夏より、冬の方が好きですし」

言うだけあって、手足には、パット見た感じだと——あまりじつくり見るのは失礼だろうから——鳥肌は立っていないかった。

それどころか、この涼しさに当てられてか、普段より生き生きとしてる様にも見える。

確かに紅花さんのイメージとしては、冬、しかも、丁度この季節が合う。

それだからか、春先の海辺で、真っ白い水着を着ている紅花さんが、やけに綺麗に見えてしまった。

考えてみたら不思議なものだ。

つい二週間前には、全校男子が憧れているこの人と、まさかこんな事をしているなんて想像できなかった。

改めてこの人の魅力を知ったのと、ちょっとした優越感に浸るくらいは、いいだろう。

「それに、昔から寒中稽古で雪山に行っていたりしましたから、薄着もへっちゃらですっ」

……いや、前言撤回。

やっぱり紅花さんは、憧れの美人と言うよりかは、ちょっとズレた女の子、って表現の方が良さそうだ。

昼食を食べ——前に言っていた通り、本当にコンビニのおにぎりを食べたことがないらしく、ビニルを剥くのに苦労していた——それから暫く遊ぶことにした。

ただ、遊ぶと言っても、俺は制服だし、砂細工をする歳でもない。行けて波打ち際だ。

必然、紅花さんを目で追うだけになってしまう。……まあ、それだけでも十分だけど。

「礼於さん、もっとこっちの方、行ってみませんか?！」

それで、俺が波打ち際で波を蹴っていると、少し先で、奥の岩場

を指して叫んでくるのだった。

手を振って、荷物を持って、小走りでそっちの方へと向かって行く。

岩場は、少し小高い形になっていて、砂浜としては丁度真ん中辺りに位置していた。

いい場所だ。

海へと少しかかっている所に腰かけると、また、適度な日光と、少し涼しめの風が気持ちよかった。

「うわっ——」

のだが、俺の日光浴は、紅花さんの放った水鉄砲によって中断されてしまった。

「こ、紅花さん……？」

「ご、ごめんなさい！顔に当てるつもりじゃ……」

でも、礼於さんも、そこに居るだけじゃつまらわぶっ——」

仕返しに、海面を蹴って水をかけてやる。我ながら、ナイスコントロール。

すると、また、今度は確実に顔を狙って、紅花さんは水を飛ばしてくる。勿論俺が避けれる訳がなく、ずぶ濡れになってしまう。

もう怒ったぞ。

上着を脱いでYシャツ姿になる。ズボンの裾を膝まで上げて、腕捲りをし、岩場から降りる。

岩の、ゴツゴツした感触と、藻のヌメツとした感覚に足を取られそうになりつつも、そのまま水を掬って紅花さんへと引つ掻ける。

が、俺が掬った水は尽く躲されてしまい、みるみる内に遠くへと逃げられてしまう。流石、格闘家、ってか？

「こっちまで、これですかーっ?!」

したり顔で、脚が全部浸かりそうな場所から挑発される。

とは言っても、流石にあんな所までは行けやしない。卑怯、ってものだと思っただが。

そう思っていた矢先、少し大きめの波が来て、それに身体を持つ

ていかれそうになったのか、紅花さんの身体が大きく傾いた。

「紅花さん?!」

慌てて、制服が浸かるのも気にしないでそこまで行き、彼女の腕を引き上げる。

……と、反対の手で顔面に水をかけられてしまった。

「引っかかりましたね」

もろに海水を飲んでしまつて、辛くて何も言い返せなかった。

その隙にするりと脱け出されてしまつて、また距離を取られてしまつ。……まんまと騙されてしまつた。

そんな、本当にたわいない事ばかりしていたのに、気付けば空は、茜色に染まりかけていた。

「へつくしつ!!」

一度全部を絞つたとは言え、乾かしていた上着以外は全滅、勿論、俺はずぶ濡れの体を震わしていた。

昼間ならともかく、日が傾いてくると、まだ夏は遠い事を感じさせてくれる。要するに寒いのだ。

正直、無理し過ぎた。

「だ、大丈夫ですか?」

着替えから戻ってきたのか、元の制服姿の紅花さんが現れ、そのまま俺の隣へと腰を下ろした。

(そう思うなら、せめて手加減してくれよ……)

苦笑混じりで言つた俺の呟きは、彼女には聞こえなかったようだが。

「これ、使いますか?私が使つたの、ですけど……」

そう言つて、肩にかけてあつたバスタオルを渡される。

断る謂れも無いので、ありがたく使わせてもらうことにした。

顔と頭を拭いた時、塩の香りと、それとは別の、簡単に予想のつく薫りが鼻を擽った。

肩からそれを羽織ると、まるで紅花さん自身に包まれてるような、ちよつと気恥ずかしい気分になる。その割に落ち着かせてくれる何かも感じていた。

「結局、遊んでるだけでしたね」

一通り体を拭き終わった頃を見計らってか、紅花さんがそう、口にした。

「いいんじゃないかな？ せっかく海に来たんだから。元々息抜きのつもりもあつたんだしさ。」

それに俺、ここは初めて使うからね」

「初めて、ですか……？」

ああそうだった。八木にはそれとなく言っていたけど、この人にはまだ何も言っていなかったんだっけ。

「俺の実家、北海道なんだよ。」

中学の最後に、ちよつと、色々あつてさ。それでこっちに進学したんだ。——だからあの寮にいるんだけどね。

聞いたところだと、ショージも同じ様な事でこっち来たみたいでさ、妙に息が合ったんだよな。

まあ、とにかく、そんなんだからここは初めて来るんだよ。

…… 去年の夏は、アイツにさんざん振り回されてバテてたしね。だからさ、ちよつと寒かったけど、こうして遊べて良かったよ。ありがとう」

「い、いえいえ、感謝するのは私ですっ！ 本当なら、私は礼於さんと一緒にいちゃいけないのに——」

もう引きずってないだろうと、少しは期待していたのだが、やっぱりまだ気に病んでいたらしい。

その事が、かなり悲しく感じてしまう程には、俺は彼女を信頼していただけに。

「その事はもう無しにしよう。」

前にも言った通り、紅花さんは最高の、俺の仲間なんだから、さ。あんまり気にされると、逆に悲しいって」

あまり深刻にならないよう、少しおどけて言ってみせる。

「それじゃ、その……」

私、多々良さんと、同じくらいには、……認めて、くれますか……？」

上目遣いでそんな事を聞いてくるもんだから、俺の心臓は早鐘を鳴らしてしまった。

勘違いするな！これは、”ショージとの仲の良さ”の基準からの、ただの確認だっ！

「た、確かに、ショージは親友みたいなもんだけどさっ。紅花さんは、こつちに来てから、女の子の中では一番仲良くなれた人だよっ。

……って、そんなこと勝手に決めちゃダメか」

なるべく、無難な、そしてこの人が安心しそうな言葉を選んで言ってみる。

なんだか告白でもしてるような気分になって、思わず早口になってしまった。

「いいえ、私だって、そう思……」

——っうん。前向きで、強くて、優しくて。こんな私ですら、ちゃんと受け入れてくれて、一番にしてくれて……」

そんな礼於さんに、私は——」

そこで一呼吸置かれる。

——って、あれ？

この流れて、まさか……？

「なっ？！」

「きゃっ——」

そんな俺の、期待と不安の入り混じった妄想は、海岸の奥の方の崖から発せられた、ドン、という爆音と衝撃によって中断されてしまっ。

見ればそこに、巨大な砂煙が立ち込めていて、そして、一瞬、蔓が見えた気がした。

「くうだ」

「えっ……」

紅花さんが、話の途中で区切っていた事も忘れ、俺は走り出してしまっていた。

走り辛い砂浜が、走り辛い革靴が、走り辛いわびしょ濡れの服が、この時ほど憎く思えたことは恐らく、この前も後も無いだろう。それでも、走った。

「——やっぱ、敵^{叶わない}わないなあ……」

僅か、百、二百メートルかそこらだろう。

それがやけに長く感じられた。

「くう……！！」

「——ん？」

だがその場に着くと、そこには俺が求めていた人物はいなく、代わりに、この世の者とは思えない、鬼が立っていた。

肌は赤く、頭に生えた大きな角、そして牙。

俺よりずっと大きな体躯は、まさしく絵に描いた”赤鬼”だった。

「デメエか……もう首突っ込むなっつたろうが」

「え……っ？」

その、認めるには時間を要した現実が、あっさりと俺の事を認識し、それだけでなく記憶もしていたらしい。

俺は、コイツの事を、知らない。

「多少痛めつけなきゃ、解んねえ、かつ！」

「っつ——」

腕を振るったと思った瞬間、俺の耳元を何かが掠めて行ったらしい。

僅かな風切り音の後、針で突かれた様な痛み、そして、それに遅れる様に、頬を伝う液体。

「今のは見えたか？……見えねえよな、テメエじゃあ」

そしてもう一度、その太い腕を振るわれる。

また何かが来ると思い下を向いて、目を閉じてしまいが、特に何かが掠れる感覚もなく、そのまま目を開ける。

そして、目を開けた先に映ったのは、足下の砂に半分程埋もれた、見たことのあるナイフだった。

「言ったよなあ。『次にそのナイフを見かけたら、目の前掠るだけじゃ済まないと思うとけよ』って、なあ」

「な——っ?!」

戦慄が走る。

初めて、戦いを見た時の、あれと同種の恐怖を憶える。

橘だと、そう気付いてしまう。

足下のナイフに触れようとした時、それはまるで、砂のオブジェのように崩れてしまった。

「じゃ、あばよ。——嗚呼、安心しろ。急所には当てないでやるからよ」

三度、腕を震う。

その直後に肩にかかった何かと、俺を詰るそよ風に、だが、”当たらない”と思わせるには十二分だった。

「礼於さんを、傷付けさせはしません——!!」

得体の知れない模様の仮面と、そこから伸びる、烈火の如く真っ紅な髪。

場違いに映えてしまふ、学園の制服と、更に場違いに思わせてしまふ、鉄製の籠手。

久々に見た、彼女の本気の姿に、先程までの恐怖は無くなってしまっていた。安心、しきってしまった。

夕陽に照らされたその髪は、不謹慎な程に艶やかに輝いている。

「仮面に、紅い髪。そうか、お前さんが椿か」

「貴方は？」

「橘幾斗。八木に聞いてんだろう？」

「……ま、今の姿は解放中の俺、だけどよ」

「でしょうね」

俺ですら、肌で感じれる程に強烈な殺気同士がぶつかり合う。

その形容しがたい冷たさに、飲まれそうになる。

「礼於さん。……あの方の後ろ姿が、さっき見えました。向こうの、青い建物の近く。——行つて下さい」

「え、ああ！」

紅花さんの言葉で、止まったように感じていた時間が、動き出してくれた。

しかしそれは、橘の時間すら動かしてしまつたらしい。

アイツも、俺に、いや、くうを追つて走り出したのかもしれない。

——速すぎる。

さっきまで十分な距離があつた筈なのに、既に目の前と言ってもいい距離まで詰められていた。

低い位置からナイフが投げられる。

「貴方は、通しません！」

その俺と橘の間に、紅花さんが立ち塞がる。速さだけなら、今の俺も橘以上のだろう。

「まいったな……」。

俺だつてあの娘追つてんだがよお？」

「なら、私を倒してから行つて下さい。——礼於さんは速くっ！」

「ああ！」

こつちも気にはなるけど、せつかく紅花さんが助けてくれたんだ、このチャンスを逃す訳にはいけない。

俺が走り出してすぐ、そこでは、鬭いが始まるうとしていた。

「——くう——！」

その姿は、思った以上に早く見つかった。

怪我をしていたのだろうか、腕と、その腕の下の脇腹は赤く滲んでいた。

途中まで逃げて来て、傷が直るのでも待っていたのだろうか？

それと、直ぐに違うことに、今回は気付けた。

「……ネルヴェエっ！」

そうしてやっと、振り向いてくれた。

そつちで正解だったらしい。その事がやけに嬉しかった。

「……何？」

返事は、温度が下がるほど冷たい響きだった。

「謝りに来た」

「謝りに……？」

「そうだ。」

今はネルヴェエで、だから、くうの気持ちは分からないかもしれない。いい。

けど、俺はくうに——そしてネルヴェエ、お前にも、謝らなくちゃいけない様な事を言ったんだ。……だから、ずっと探してた」

——ネルヴェエとくうでは、二重人格。

そう仮定したけど、もし本当にそうだったなら、これは全く無意味な行為かもしれない。

ただネルヴェエの表情は変わらなくて、本当にそうなのかどうかも分からなかった。

「本来ならくうに対して言うべき事かもしれない。けど、——」こめ

ん」

深く頭を下げる。齒を食い縛る。

俺の、精一杯の気持ちを、この一言に乗せる試みをした。

「……何で、今謝るの？」

「君を、君達を拒絶したから」

ネルヴェは、その時になって初めて、その無表情を崩してくれた。その表情は自嘲が多分に含まれていそうな、悲しい表情ではあつたけども。

「それは当たり前だよ」

「それでも、俺は、君達を受け入れたいと思った」

「受け入れて、それで？」

顔を上げて、ネルヴェですらたじろがせる様な視線で、目を合わせる。

「友達になりたい！」

表情は変わらなかった。

けど、啞然としたハズだ。……そうだろう、ネルヴェ？

そうさ、もう、逃がさないって。受け入れるって決めたんだ。

あと、五分もすればネルヴェはくうに戻る。

俺の闘いは、この五分間。こいつを引き留めて、説得させて、そして、くうと会うことだから。

「……やっぱり、あなたは、普通じゃない」

ドキッとした。

まさか、あんな憂いを帯びた表情が、あんな絶望の淵にあるような表情が、ただ少し口許を吊り上げるだけで、こんなにも綺麗で、この女の子に似合うとは思えなかった。

それでも、なんとか怯まずに次の言葉を探し出す。

「そう、かもしれない。……でもさ、だってそうだろう？」

こんな事実、普通見ないし聞かないし、まして出会うなんてじゃない。

でも——俺達は出会えた。会っちゃったじゃんかっ?! なら、そ

の後の過程なんてもう、決まってるも同然だろう?!」

「っ……………」

驚きの仕草。

そしてやっと、俺が見たかったあの可憐な笑顔と、全く同じものが、そこには浮かんでいた。

「——『あなたは、わたしのイバシヨかもしれない』」

「ネルヴェ……………」

そうして、此方へと一歩目を踏み出した。

「だから——」

二歩目、そして三歩目…………

既にお互いの距離は、手を伸ばせば、触れられる位置にまで縮まっていた。

「今は、サヨナラ、れお」

「は——!?!?く……………?!」

そして、ここに来てやっと気付いたのだった。

その距離が、その言葉と共に、簡単に開いてしまうモノであったこと。

踏み出そうとして、足下には蔓が絡まっていたこと。

——ネルヴェとくうが、”同じだった”、ってこと。

手は、空だけを掴んでいた。

lim9: Again the Smile

「倒してから、って、お前さんなあ……」

ボリボリと頭を書きながら、直前まで投げるつもりだったナイフを、手で覆う幾斗。

紅花に、そのナイフが実は消えてしまふ、と言うことを知らせない為である。

それよりも本人の態度だ。

ネルヴェを追っていたのだらうに、そこに礼於の、そして紅花の邪魔が入ったのだ。それに礼於はともかく、紅花は同じくLIM。体格差がいくら大きかろうと、それ故に特殊能力に対しては油断が出来ない。いきなり、訳の分からない能力を使用されれば、それだけで不利になりかねない。要するに、対処するのに苦労が尽きないのだ。

しかし、そんな事になる可能性が、彼にもあるに関わらず、幾斗は目の前の敵に、一切の興味も持っていない様に伺えた。

「私、強いですよ」

そんな彼の態度に不満だったのか、紅花は挑発的な態度を取る。

「ま、確かに不利だな。」

俺あ、既に嬢ちゃんより長く解放してんだ、それに身体能力上がってんだらう？あーコワイコワイ」

「不利だ」とは口にはしているものの、その口調はおチャラけていて、実際には脅威にすら感じていない。

流石にこれには、紅花も憤りを感じられずにはいらなかったのか、何も言い返さずに姿勢を低く構える。

「俺だつてな、出来ることなら、嬢ちゃんとも、……あの娘とも戦いたかねえさ。」

ま、んな愚痴言つたって意味ないっかね」

途中、おチャラけているようで、その表情が曇っていた事に、今の紅花は気付けなかった。

それこそ、幾斗の言う通りに、気付いたところで意味は為さないだろうから。

そして当の幾斗は、語りながらも、先程ナイフを握り潰した手の中で、再びナイフを増やしていた。

彼が、その増やしたナイフの切っ先を紅花に向けた素振りをする、それを確認した直後には紅花は飛び出していた。

距離にして、約三メートル——彼女たちにとっては一跳にして、短すぎる距離だろう。

目の前に潜り込むと、短い気合いと共に右拳からの顔面目掛けての下突きを繰り出す。

が、幾斗はそれを軽々と後ろに飛び、回避。更に同時に、左手から、先程より更にもう一つ増やし二本となったナイフ、右手からは、今の一瞬で三本となった内、二本のナイフ、計四本を投げつけたのだ。

——普通、至近距離からはナイフを投げたりはしない。

その距離なら普通に切りつければ楽だし、もしそれが仮に、相手の動きを試す為の物なら至近距離ではなく、中・遠距離からの投擲をすればよいのだ。

故に至近距離からの投擲など、必殺ではない。況して普通、そんな距離だとスピードも乗らず、威力も出ないだろう。やって、それは相手の意表を付く為だけのものだ。

それと、普通の投げナイフなら、高速で避けるか又は武器、防具で弾くかの二択に迫られるだろう。

だが、ここまで普通なら、と押すからには、幾斗が起こした状況は普通じゃない、と言うことである。

打ち出されたのは、左右二本ずつ。直線に飛ぶそれは、総て避けるには距離が無さすぎ、また速すぎる。

更にLIM化をした事で、体格、身体能力を大幅に上げた彼の攻

撃は、例え至近距離でのナイフ投げとは言っても、その威力は鉄の鎧をも穿つ程なのだ。到底、防げた物ではない。

だが、あるうことか、紅花はこれを受け流したのだ。

攻撃に使った右手を、そのまま引くようにして、そしてもう片方の手は外回りにパンチを繰り出すようにして。

ナイフの側面を籠手ナックルで擦るようにして、四方向から襲いくるそれらを、軌道をずらす事で回避したのだった。——中国拳法や、太極拳等に見られる術わざに、近いだろうか。

ナイフは軌道を変えられ、鋭く回転しながら、明後日の方向へと飛んでゆく。

勿論、紅花もそれだけでは終わらせなかった。

半分まで伸ばしかけた左手を、更に少し軌道を変える事で、幾斗へと狙いを変える。

出しきると同時に、体の回転を利用しての、左足からの回し蹴り。どちらも上記を逸した速さで繰り出される。

だが、大きく跳躍した彼には、それが直接当たることなど無いのは、幾斗も、それに紅花も理解はしていたのだ。

「おいおい、リーチが足りな——」

だが、それだけ十二分に距離を置き、余裕の、又は嘲笑するかのようなその顔は、正面右側から大きく、まるで殴られた様に歪んでゆく。

そしてその直後に左の方へと吹き飛ぶ巨軀。

空を切った筈のそれらの攻撃は、しかし幾斗には当たってしまっただのだ。

これには、流石の彼でも驚きは隠せないらしい。目を見開き、紅花から目を離せずにいた。

「へえ……面白い技じゃねえか。それが嬢ちゃん的能力かい？」

「いいえ、これはただの衝撃波です。私の能力はもつと、地味ですから」

衝撃波——一般的な衝撃波とは、物体が音速を越した時に、その

音の層がぶつかる事で発生するものだ。

強烈な爆音や、戦闘機等が全力で横切った際に、窓ガラスが割れる様は、我々でも度々、映画などで見かけるだろう。

それ以外には、”気”と言うものを使うのも、同じく映画や、漫画等でも見るだろう。いくら目で追えぬ程の速さとは言っても、紅花が使ったのは、流石に此方の類いである。

これも拳法の一つであり、体内の”気”と言うものを練り、それを使う事で、技の威力を高めたり、自身に耐性を付加させたりして使うものだ。

やはり、普通はそこ止まりだし、中には特殊なモノを使う人もいるそうなのだが、それであっても多大な修行を積んで、やっと使えるものなのだ。

「ただの」と言つて、軽々とそれを飛ばした衝撃波——気功波、と称した方が正しいか——なんて、繰り出せるものではないだろう。「こりゃあビックリだ！能力じゃなくてコレかっ！

……訂正する、お前さん、確かにっえゝわ」

「それはどうも」

口調は相も変わらずだが、幾斗は、どうやら本気で紅花の事を認めたらしい。

立ち上がりながらも、今までのお遊びな雰囲気は薄れていたのに、彼女は気付いたみたいだった。

「”気”ってやつだろう？初めて見たなあ。一体どうやってんだ、それは？」

だがそれでも、不真面目なスタンスは変えられないらしい。

その場で拳を突きだしてみるが、勿論紅花の様にはいかない。

そしてパンチをする振りをして、ちゃっかりとナイフを投げ出すのだが、それはおふざけ程度のものであり、勿論簡単に掴まれてしまう。

「簡単に教えられるものではありませんし、教えません。

——それに、これはLIM化してるからこそ、イメージ通り飛ば

せてるだけですから。

貴方こそ、この増えたナイフは能力でしょう？」

そう言い、掴んでいるナイフ地面へと落とし、それに対して手刀を繰り出す。

またまた衝撃波が出され、落ちたナイフはそれにより真つ二つに割れ、砂のように崩れさつていった。

そんな一連の流れにも、幾斗は感嘆の声を漏らさずにいられなかった。

「まあな。こうやって——」

今度は幾斗が紅花に見せつけるように、ナイフを構えた手で、空を横風ぎする。

その軌道上には数本のナイフが浮き、それぞれが彼女目掛けて切っ先を揃えていた。

紅花がまた、低く構え直す。

「飛ばしたりな」

その内の一つを指で弾くと、それを合図にしたように、全てのナイフは対象目掛けて動き始める。

いくらそれが多く、また、普通のナイフ投げよりも速かろうと、距離がありすぎる。無論、紅花にとっては何の苦も無いハズだった。まず最初に来た三本を受け流しつつ、その間を抜け、次の二本を更にいなす。そして最後の三本をそれぞれ弾き、その勢いで幾斗の元へと向かおうとしたのだが——

「っ——！」

左手で、真上から最後に真上から叩き落とした筈のナイフは、しかし、彼女の右太股へと、深々と刺さっていたのだ。

唐突な鋭い痛み、踏み込みを始めた紅花は躓き、その場で雪崩れ込む様に倒れてしまう。

「名付けて、マジックナイフ！……なーんてな」

「軌道が、変わっ、た——？」

「おうさ気をつける。俺のナイフは生き物だ。それと——」

「っ！？」

刺さっていた筈のナイフは、次の瞬間には大きな穴を遺して砂塵となり消えてしまった。

そしてその穴から、小さな噴水を上げて出た血に、そのナイフがどれだけ深く刺さっていたのかを思い知らせている。

刃物が、対象から抜ける時の痛みと言うものは、特殊な造りの刃物でない限り、刺さる以上の痛みを伴う事がある。

それは刺さった事で裂いた肉を、刺さった時より遅いスピードで刺激するからだ。

だが彼のナイフは粉々になり、傷口を覆う。又、それによって引き抜く以上に苦痛を与えるのだ。

刺し傷に、塩か何かを刷り込んだ時の事を想像してみれば、それは容易に想像できるのではないだろうか？

「10秒が俺のナイフの生存時間だ。——刺さったら、ダメージは大きいぞ？」

ナイフを斜めに薙ぎ、次弾を装填する幾斗。

次の撃ち合いが始まるうとしていた間際、二人の、”紅”と”赤”は、互いの強さを認めて不気味に微笑んでいた。

——この時、紅花残り時間572秒、幾斗341秒——

掴めなかった。

後少し、後一步なのに。

でもそれは、ネルヴェが赦してくれなかった。それなのに——俺は、不気味な笑みを浮かべてしまう程に、酔ってしまってたらしい。「そっか。俺の名前、ちゃんと分かってるじゃ、ないか……っ！」手に入らなかった訳じゃない。むしろ、収穫したものは、俺が予

想してた以上だったのかもしれない。

だって、こんなにも満たされているじゃないか。

二重人格だ、って思っていたから、俺の名前なんて知らないと思
っていた。違うのか？

『今は』って言うてた。『居場所』って、言うてた。それは、ど
ういう意味なんだ？

そんな、追求すべき疑問と、それをどうでよくする程に満たされ
てしまった、名前を呼ばれた事、あの笑顔――

紅花さんや、八木カナには悪いけど、今は、それだけで良い気が
してならなかった。

「――そうだ、紅花さん……！」

協力してくれた二人に、なんて説明しようか、と考えて、やっと
思い出す。

まだ、多分、浜辺では紅花さんが足止めをしてくれているハズだ。
その証拠に、ここへと、まだ橋は来ていない。紅花さんだって。
足に絡み付いた蔓は、千切るにはちょっと太すぎて、そこに転
がっていたコンクリートの破片を使って、やっとのことで解くこ
とができた。

立ち上がりつつ、直ぐにその場を駆け出す。

路地から飛び出した時、ふっと掠めた潮風に、思わず足を止めて
しまう。まるで、そこにあいつを重ねてしまったみたいに。

だから、あいつが去っていった方を見上げて、俺は宣戦布告を申
し上げた。

「次は……次こそは、絶対に連れ帰ってやるからな、ネルヴェ」
そう、独り言を言っただけで、体には力がこもった。カラダが軽
くなった気がした。

また走り始めて、冷静になって初めて気付いた事があった。
革靴で、しかも靴下も砂と海水でぐしゃぐしゃになって、痛か
ったのだ。足を前に出す度に、針を踏んだような痛みがかけ上がっ
てくる。

それと、思ったより近く感じていた距離は、いざ眺めてみれば、結構な距離があったみたいだ。

さつき、橘の所へ走ったより、ネルヴェを追いかけて来たときより、よっぽど長くて、辛い。

「紅花さん……!!」

それでも、俺の為に、下手をすれば今の俺なんかよりよっぽど、痛くて、辛い思いをしているかもしれない紅花さんを思うと、それだって我慢できた。

あれから、感じている時間だけでも大分経っている。

連続してのLIM化、そして、暴走——そんな不吉な連鎖が、どうしても尽きない。

弱気になるのを振り払うように、痛む足に活を入れ、更にスピードを上げる。

ビルの群を抜け、倉庫区画を走り抜けると、さつきネルヴェと橘が闘った時に崩れただらう崖が見えてくる。

更にそこから、崖伝いに伸びる車道を走り、二人が闘っているだらう所の真上へと出る。

「よ、良かった……」

見たところ、暴走していたり、紅花さんがやられていたりと言う不安は無さそうだった。

けれど、ここからじゃ少し距離があるからか、二人が一体何をしているのか、全く理解ができなかった。

橘からは幾つかの曲線が生え、その曲線は紅花さんの手前で向きを変えている。曲線を避けつつ前へ進み、ジャンプし、伏せる様はスパイ映画の潜入シーンを見ているような気分になる。

ただ、二人が争う理由が無いのは、もう、俺が仲裁するしかないことを現しているのだらう。

坂を下り、二人の近くへと行く。

「礼於さん伏せて——!!」

啞然と、その光景を見つつ走っていたので、紅花さんが何に対し

て叫んでいたのか、一瞬分からなかった。

視線を反らすと、十メートルほど前の赤鬼、もとい橘は俺の方を向いていて、暫く見ていたからやっと思認できるようになった、一本のナイフが、俺の方目掛けて飛んで来ていた。

咄嗟の事に反応しきれなかった俺は、やはり咄嗟に、けど俺の前に滑り込んで来た紅花さんにより救われる。

だから弾けなかったのか、ナイフは紅花さんの籠手をはみ出し、その細い腕へと刺さってしまった。

「こ、紅花さん?! 大丈夫なの?!」

言ってから、それは失言だと気付く。

大丈夫なら、飛び込んで、攻撃を庇った拍子に倒れ込む様な事、特に紅花さんに関しては何なりとあり得ないだろう。

「はい、傷なら、直ぐに治りますか、ら——っ!」

しかし彼女はそう言いつつ、刺さったナイフを引き抜いてしまう。血が溢れるのがはつきりと見えてしまった。

紅花さんの全身を見て分かったのだが、制服の至るところが同じように破けている。何回も、あのナイフに刺され、斬られていたのだろう。

その裂け口は紅く、染みになりかけているけど、そこから覗いている肌は尽く真っ白く綺麗だった。ついさっきの傷だって、もう塞がってしまった。

裂け方や、そこから見える肌、それとこの紅い髪が合間って、彼女の姿が、妙に扇情的に見えてしまう。

けどそれは、今塞がっていった傷を含めて、この人はLIMなんだ。俺とは違うんだと象徴してる様で、物悲しくもなった。

「お返し、しますっ!」

ヒュン、と小気味良い音を立て、ナイフは真っ直ぐに橘の元へと飛んで行く。

だと言うのに、アイツはそれを避けも弾きもせず、左手をかざして、そこで受け止めたのだ。

まるで、俺に、俺もLIMだ、と見せ付けられている気分だ。

「3、2、1——」

そのまま、橘はカウントダウンして、それが0ゼロになった途端、そのナイフは砂のように消え去ってしまう。

それと同時に、一瞬だけ体が歪み、元の姿に戻っていった気がした。勿論気がしたというだけで、また歪んだと思った時には鬼の、この姿のままだったのだが。

「今の、もしかしてアイツ、連続でLIM化したのか？」

「ええ、そうみたいです。」

連続解放——条件を満たしたまま、タイムアップしたんでしょう。それって、紅花さんが暴走した時と同じ様な事が起こった、ってことじゃないのか？

「だったらアイツは、なんで暴走しないんだ？！」連続解放”ってそうゆうモノじゃ——？」

話が違う。

この人は連続で解放——LIM化したからこそ、暴走して、あんなことになっていたんじゃないか！

もしこれで、橘は暴走しないって能力でもあるんだったら、それこそ反則だろうに。

「別に、そうゆう事ではないんですよ。現に、私が暴走した時も十回以上の連続でしたから。」

闘いの中ですから、仕方ない事でしょうしね」

そう言いつつも、服についた砂を払うようにして——もう意味はない気がしたけど——立ち上がり、一步、橘へと向かい構え直す。

前に聞いた時、そこまで言っていたのかはよく覚えていない。

けどどうやらたかだか数回の解放で、暴走してしまわない事が分かって、納得と同時に安心もした。

……けど、それじゃあ、あの時の紅花さんは二時間近く——下手したらそれ以上もずっと、LIM化していたと言っのか？

「暴走しても、知りませんよ？」

「んなー、二回ぐらいじゃしねえよ、俺は」

橘の発言からして、もしかしたら暴走する度合いってのも、タイムリミットと同じ、人それぞれなのだろうか？

橘が、両手に持ったナイフをクロスに振ると、残像に見えたそれは、浮いている沢山のナイフへと代わっていた。——アレがアイツの、“能力” ってやつなのだろう。

それが確認できると、さっきまで見えていた曲線へと変わり、こちらへと向かってきていた。

少しでも俺の方へ飛んでくる曲線を、俺の外側へと弾くようにして前へと進んで行く。俺もその隙について後ろへと下がってみるのだが、そこで妙な胸騒ぎがした。

さっきだって、傷だらけになりつつもなんとか避けていたのだ、大丈夫だ。

けど、口は勝手に「危ない！」と動いていた。

「——っ?!」

カツン、と甲高い音が砂浜に響く。

一瞬、時が止まったかのような静寂が包む。

次の瞬間には紅花さんの仮面は、ひび割れ、真っ二つになる。表れた額からは、赤く、太い線が描かれていた。

「ザーンネン。確か、その仮面、だったよな」

紅花さんの、LIM化条件の事だろう。

「どうして、それを……？」

「八木さ。」

仮面着けた途端、とか言ってたしなあ。能力はともかく、それだけ聞いてりゃ十分だろう。

——ま、元から聞いてなくなつて、んな怪しい仮面着けてりゃ、大概気付くって」

意図して、今のは紅花さんの仮面を、その弱点を攻撃していたのだ。

気になって、上着のポケットから携帯を出してみる。

16:53——半には海から上がったとして、闘いが始まって、そろそろ十分って時間だろうか。

もしそうだったなら、今のこの状況って、かなりマズインじゃないのか……？

「後一、二分だろう？……それでもお前さん、やるのかい？」

余裕の表情で、紅花さんを挑発する。

止めるかどうかを聞いておきながら、アイツは、手の中にあるだろうナイフを、その存在を誇示するように何度も握り直していた。止める気なңыз、毛頭無さそうにしか見えない。

「貴方の目的はあの方——」くうさん”の筈では？

礼於さんだけが戻って来た今、私達の争う理由なんて」

話してる最中、紅花さんの動きは、そしてその言葉も、突如として止まり、そして前へと倒れていく。

何故だが、後ろの方で見ていた俺にも分からなかったのに、その背中にはナイフが突き刺さっていた。

そんな、アイツが投げるモーションはしていなかったのに……まして、他のナイフだって紅花さんが弾き飛ばしていたのに……？

あまりに唐突すぎて、一瞬、喉が張り付いて声が出せなかった。

「んな事あ分かってるし、もういいさ。

……だがな、コッチはシゴト妨害され、挙げ句、その対象を逃がされたんだぜ？

せめて、その責任くらい、果たしてもらわねえとな——そのカラダで」

言い終わると、紅花さんに刺さっていたナイフは、まるで自らの意志が有るかのように櫛の手元に戻って行く。

すると紅花さんは立ち上がり、心臓の辺りを刺されたと言つのに、もう血は殆ど止まっていた。

……だが、その顔色は悪く、とても辛そうにしか見えない。当然なのだろうが。

「もう、……10秒以上は、過ぎてますよ……？」

「ここで種を明かそうっ！」

いきなり明るい声で、エセ手品師のような言い方だした。ついで、さっきまでナイフを握り隠していたハズの左手を、開閉して何も無い事をアピールする。

「俺のナイフは、確かに曲がる。だが、それは一回だけだな。一度曲げたら、もう元には戻せない」

右手で受け止めたナイフを握り、もう一度開くと、一本だったナイフは二本へと増えていた。

内一本を真上に投げると、それは途中で、勢いを失うことなく曲線を描き、紅花さんの足元へと突き刺さる。

コイツの能力は多分、ナイフを自在に増やして、それを操れる事なんだとおもう。

「けどなあ、このオリジナル……要するに、コピーしなかったナイフだけは、それらとは違うのさ」

今度は手元にあるナイフを増やさず、そのままそれを投げってくる。勿論、真っ直ぐ向かってくるナイフを、紅花さんも弾き、避けようとする。だが弾かれ、正反対へと飛ばされたそれは、曲線なんかじゃなく、それこそ直角に曲がり、確実に紅花さんの心臓を貫いた。「どうしたー、動きが鈍いぞー」

戻して、投げて、また戻して、紅花さんが立ち上がるとまた投げて——完全に、紅花さんが遊ばれていた。

こんなの、酷すぎるじゃないか……！

「もう、止めろっ……！」

俺は無我夢中になって、飛んでくるナイフと、紅花さんの間へと飛び出していった。

「礼於……さん。危ない、です、よ」

次に、俺へと刺さる筈だったナイフは、俺の心臓寸前で止まっていた。

「こんなの……もう、紅花さんを痛め付ける理由なんて無いだろっ！？」

目の前に浮いていたナイフは、少しずつ上へと傾き、狙いを俺の額へと変える。

けど、一步も引かない。引く訳にはいかなかった。

「おいガキ、お前さん勘違いしてないか？」

「対象が、違うだろ」

ため息をつかれると、それは橘の手元へと戻って行った。

「さっき言った通りだ。」

お前さんはネルヴエを逃がした。意図的か、それとも向こうの意思かは知らんけどな。

それだけじゃあない。この俺を足止めして、俺に攻撃を仕掛けてきた。理由のどここうを差し置いてな。

つまりマイナス二点。

俺のサンドバッグになるぐらい、誠意を見せてもらっても、バチ当たらねえだろう？」

「紅花さんは、サンドバッグなんかじゃないっ！！」

そんな橘の言葉に、俺は我慢出来ずに、また叫んでしまった。

「やるなら、俺にやれ……！！」

怖かった。

けど、それ以上に、守りたいと思った。後ろで、俺の名前を、苦しみながらも呟く女の子を、守りたいと思ってしまった。

「はあ、あのなあ……」。

だからって、お前さんを刺したら死んじゃうだろが。

無駄な殺生はしない、その気遣いくらい察してくれよな」

そんな気遣いなら必要ない。紅花さんが苦しむのはもう、見てられないから。

「ほら見る、もう立ってやがる」

言われて振り返ってみると、虚ろな目をした紅花さんが立ち上がって、よろよるところらへと歩んで来ていた。

「そうですよ、礼於さん……私は、大丈夫、ですから——」

大丈夫だ、と、とても大丈夫そうには見えなかった紅花さんに言

われて、また怒りと、そして悲しみに覆われる。

また、腹には力がこもっていた。

「それでもっ！！死なないからって痛め付けるなんておかしいんじゃないか！

……紅花さんだつて、同じ、”人間”だろう？！」

「——！？」

二人の、言葉のない驚きの様なものの後、その場の空気が、少しだけ緩んだのを確信した。

どちらかと言えば、主に橘の方から。

「なあ……峰渡よ。何故アイツを——ネルヴエを追いかける？

分かっちゃいると思うが、アイツは普通じゃない。関わってれば、俺みたいなのにな殺される事だつて、あるかもしれないんだぞ？」

橘はナイフを持った手をを下ろし、そのままホルダーらしき所へと納めてしまう。闘う意思は無い、と思つていいのだろうか。

「それに、幾らお前さんが同じだ、と叫ぼうが、俺たちやLIMだ。それに変わりは無い。それでもなお、何故追いかける？」

「くうの、友達になれる。……居場所に、なれる。それが今の理由だからだ」

「”居場所”、ねえ——」

呟き、反転して背中を向ける。

まだ警戒が解けていないからか、紅花さんは橘の方を見て、まだ鋭い眼を向けていた。

「だったら、その”居場所”つてのになつてみせる。……俺は、逃げちまつたんだからよお」

「今、なんて——」

最後の方は、距離にしても遠すぎて、何て呟いたのか聞き取れなかった。

が、

「危ない——！」

それも、突然の紅花さんの叫びに、思考を中断させられた。

俺は何かの危険を感じる間も与えられず、紅花さんによって後ろから押し倒される。

前へと倒れ込み、俺の目の前に落ちてきたのは、真っ白い”羽根”だった。

「もぉー！何でこんなチャンスを逃すのよぉっ！！」

その直後、橘の方から、とてもアイツのものではない、とても高い、ソプラノな声が聞こえた。

「……おいおい、何でお前さん、こっちに来てんだよ?!」

見上げれば、空から、文字どおりの天使が降り立ってきていた。

長い、金のウェーブを風に揺らし、黒いドレスに身を包んだ——まるで、西洋人形の様に愛らしい見た目の女の子。ただし、その背中には真っ白な”翼”が生えている、けれど。

「せっかく失敗作の回収ができたかもしれないのに——ジャマ者は、ジャマできなくしちゃえばいいのにつ！」

「おい止め——」

その、少女の体には大きすぎる翼が、大きく羽ばたかせられる。

その翼を織ると、舞う大量の羽根は——ナイフほどじゃない早さだった——美しくも狂気に満ち、見惚れてて、動けない俺の元へと進み来ていた。

「はあ、あつ——っ!!」

「こ、紅花、さん……?」

ただ一人、紅花さんが俺を護る為に前に飛び出る。

その羽根は、払おうとし両腕を振るった紅花さんの攻撃を、その腕ごと飲み込み、貪っていった。

通り過ぎた時には、その腕は、”無くなって”いたのだった。

「おいリン！何もお前が出る事は無いだろがつ!!」

「うるさい！」

——イクトも、食べられたいの……?」

止めに入ろうとした橘が、その少女の一言で、舌打ちを打つだけで黙ってしまった。

俺は、その場で倒れそうになっていた紅花さんを支え、抱きしめた。

肩から持っていていかれたのか、左右からは止めどなく溢れだして、抱き抱えたそばから、自分の腕が生暖かく、真っ赤に染まってゆくのが、とても恐ろしかった。

「そうそうオニーちゃんたち。そっかくだから一つ、面白い話をし
てあげる。」

その腕、もお、直らないからねっ？」

「は——？」

言ってる意味が分からなかった。

——ナオラナイ……？」

LIMって回復力が異常だから、だからこそ、さっきだって、ナイフの傷は全て塞がったんじゃないのか？

「何でも、……サイボー？が、えーっと、硬直、だっただかなあ？」

顎に指を当て、さも考えている仕草でその理由を話すのだが、その単語が拙くて、また、動揺していた俺には聞き取れなかった。

「とにかく、オニーちゃんも食らってみれば、わかるんじゃない——」

「リン、いい加減にしろっ！」

また、その翼を広げたその少女に、橘は怒声を上げる。

「……あーもおー！分かったわよっ！」

イクトがうるさいから、今日はも、帰るね。シラケちゃったし。

……じゃーね、オニーちゃん。また会いましょっ」

そう言い踵を返すと、背中 of 翼をもう一度だけ羽ばたかせ、背中に隠すように折り畳んでしまう。

すると、今まで翼なんて無かったかのような背中だけが、その服の、開けた背部から覗いていた。

「イクトはリンに付いて来るようにっ！分かった？」

「ああ、分かってるよ……」

橘も、もう一度だけ舌打ちをすると、その少女の後を追うように、元の姿で歩いていった。

彼等が砂浜から出るのを見届け、俺もまた、腕の中のヒトへと視線を戻す。

「紅花さん、腕――」

傷口からは、未だに血は溢れ出ていた。

そこから垂れている、その肉だろっ何かや、覗いている骨らしきモノを見てしまい、思わず吐き気を感じてしまった。

「無理して、見なくても、いいんですよ」

「でも、――治らないんでしょう……!?」

無理しているのは、紅花さんの方じゃないか……！

いくらLIM化してるからって、こんなに沢山の血を流してるんだ。紅花さんの顔だって真っ青に、いや真っ白くなりかけている。

情けなかった。

あの金髪の女の子に反応できなかったこと、何もできなかったこと、……何も、出来ないこと。

情けなくて、悔しくて、硬く瞑った目からは涙がこぼれ落ちてしまった。

「礼於さんが泣くこと、ないじゃないですか……」。

それよりも、貴方はお怪我、ありませんか？」

こんな時まで、俺の為に、俺の心配をしてくれていて、口を開けば叫んでしまいそうだったから、力強く、何度も頷いた。

「はぁ、良かった」

「良くなんか、ないっ！腕、直らないって、どうするつも――」
「5、4、3、」

俺の言葉を遮る様に、橘がやったみたいなのカウントダウンを唱え始めたので、場違いに素っ頓狂な声を上げてしまった。

もう、仮面も割れて無くなっていて、その腕が直る見込みも無くなってしまうって、……こんな現実、絶対に認めたくない！

「2、」

よくよく診れば、背中にもまだ傷があった。

多分、あの時、最初の羽根の攻撃から、俺を護ってくれたとき傷

付いたのだろう。

「1——……」

強く、否定するかのように眼を閉じた。

「礼於さん」

目の前で、名前を呼ばれた。

正直、やっぱり眼を開けたくはなかった。開ければまた、あの光景が待っていそりで。

それでも、腹を括って瞼を持ち上げる。

「こ、紅花さん……？」

「はい」

「え、だって、腕——」

俺に抱かれていた彼女は、その腕で、俺の服の裾をつかんで、それで俺を呼んでいたことに、今さらながら気付いた。

「実は、ほんの少しだけ、もしかしたら、なんて思っていました」

ちよつとイタズラっぽい目をして、俺の腕に、抱きつくようにして、その存在を示していた。

「もしかしたら、って？」

そのまま肩に手を置き、少し体を持上げてやると、その勢いで紅花さんは立ち上がる。

その後、手を差し出されたので、今度は俺が、それを掴んで立ち上がった。

紅花さんが、元の方へと歩きだしたので、俺はそれに続いて、一歩半だけ後ろを歩いて行く。

「私の、特殊能力なんです。」

ＬＩＭ化が解ける瞬間にだけ発動して、受けた傷を、全部消しち

やうんですよ。

……結構地味な能力で、今までは活用時も無かったんですけど――それで、助けられちゃいましたねっ」

振り返った彼女は、二週間前、初めて見た時と、いやそれ以上に綺麗な笑顔を見せてくれていて、

「きやつ――れ、礼於さん?!」

「良かった……!」

総て元に戻った、その、初めの笑顔によく似た笑顔を見て、嬉しくて俺は、駆け寄って彼女を強く、強く抱き締めてしまっていた。

「本当に、良かった……っ!」

そして、その手で優しく背中を撫でられる。

もうちよつと力を込めれば、簡単に壊れてしまいそうな程に細い体で、それでも力強く、そして目を引く程に優雅に舞うように、俺を助けてくれた。

だからこそ、何よりも、この抱きしめられる体が在ることに――抱きしめてもらえる腕が在ることに、神様へと感謝をしたい気分だった。

でも今は、とりあえずの感謝を込めて。

切り刻まれ、あられもない姿へとなってしまった彼女に、血だらけになってしまった俺の上着を被せてあげたのだった。

lim9: Again the Smile (後書き)

「もしかして、最初に会った時も、この能力を？」

流星にこの格好ではバスに乗れないので、歩いて紅花さんの家を目指す、帰り道。ふと、思いついた疑問をぶつけてみた。

——そう言えば、ネルヴェも紅花さんの腕を斬ってたな、と。

悪いが、決して良い光景は想像できなかった。

「いいえ。あの時二回とも、自己再生が間に合っていたみたいで。腕って、三分ほどで元に治るんですよ？」

「ふん……」

なるほど、それまた随分と早く治るみたいだ。

だからって、三分で腕が治る——要するに生えてくることだとは思うが——のは、どう考えても、不気味だ。

「あれ、二回も切られてたっけ？」

俺が見た限りでは、最後、暴走を止める直前に見た一回だった気がするんだが……。

「ああ、一度目は礼於さん、既に退避してましたからね。

寮の近く、ですよ？あの後に、あの方に」

「じゃあもしかして、次に見たとき右手にナックルが無かったのって？」

「はい、そうです」

そうだったのか……。

でも結果的に、そこで腕を切られていたからこそ、ベンチで、俺は大きな怪我もなく済んだんだから、もう苦笑いしか出てこない。

そして、怖いもの見たさでもう一つ、気になってしまった事があった。

「そう言えば、切られた腕って——どうしたの？」

「あ」

「え……？」

聞いた途端、その場で固まってしまふ紅花さん。

どうしたんだろうか、とても嫌な予感がするんだが。

「すみません礼於さん、先に私の家に行つて、待っていて下さい！」

「ちよつ、紅花さん何処行くの！？」

「公園に確認しに行つてきますっ！！」

「な、何をつ？！」

俺の最後の質問には答えず、全速力で走っていつてしまふ。

今なら、この人はLIM化してるんじゃないか、と思つても、なんら疑問はおきない気がした。

……つて、言つても、なんだか色々と不安になつてきたぞ。

lim10:Rouge Flower

言われた通りに、先に紅花さんの家へと向かい、何事もなく到着した。

到着したのは、いいんだが……

「これ、どうすればいいんだ？」

中の電気は勿論消えていて、第一、学校帰りに直接海へと向かったのだ。玄関——と呼んでいいのだろうか——が空いてる訳もなく、呼鈴を無暗やたらと鳴らしていたりする。

「中、入ってればいいと思うよ」

「うわっ」

俺の呟きに、いつの間にか隣に立っていた八木カナが答えてくれる。

一切の気配がしなかった。やっぱりこいつ、LIMなのを隠してるんじゃない？

「だから、私はLIMじゃないって！

……それと、後学の為に言っておくけど、女の子に対しての反応が『うわっ』とか失礼だからねっ！」

だから、何故こいつは俺の言わんとしてることを先に言うのだ。

お願いだから心を読まないで欲しい。……まあ、いいのか？

「でも、入るって？どうすんのさ」

入ってればいい、とは言っても、流石に鍵が掛かっているハズだ、紅花さんが帰ってくるまで待っていた方が——

そう思っていたのだが、八木カナは戸へと手を伸ばし、するとガラと音を立てて開いていくではないか。……流石に無用心過ぎやしないか？

「取っ手の部分に指紋認証だかなんだか有るんだ、って、コウのおじいさんが言ってたよ」

「……それは嘘だろ」

現に、俺の目の前にあるこのインターフォンすら、ろくな機能を果たせていないと言うのに。

だが一度、八木カナが戸を開めると、あたかも開かないかのように振る舞う。

流石に……と思つて俺も確かめて見るが、確かに開かなかったのだ。

「ここ、確か、峰渡君のも登録されてるハズだよ？」

「いつの間に?!」

「さあ？」

やってみれば?と言われたので、今度は把手の部分を掴み、再び横に引いてみる。

すると、なんと言うことが、戸はいとも簡単に開いてしまったのだ。

正直、相当コワイ。後で追求してみようか。

「それで、こんな時間に呼び出してどうしたの? 今日って、海、行つたんだよね？」

俺は海に行った事を話していない。どうやら、本当に、こいつは紅花さんに、海へ行くように仕向けていたようだ。

「ああ、でも……一応、紅花さんが帰ってきてからの方が、色々と楽なんじゃないのかな」

そう?、と頷くと、八木カナは直接、台所へと向かっていった。

俺は、この前の部屋にでも居ればいいのだろうか?

例の部屋に行く途中、前は気付かなかったが、何やら”ゴツイ”部屋が有るのを発見した。

壁飾りの様に並べられているのは、仮面ではなく、紅花さんが使っていた籠手だったり、日本刀だったり……

「ああそれも、コウのおじいさんの趣味なんだって。武具マニア?」
急須とポット、それと三つの湯飲みをトレーの上に乗せ、相も変わらず気配を殺して、いつの間にか俺の隣に立っていた八木カナ。

……もしかしたら、ただ小さいだけじゃないじゃ？

しかし、趣味でもこんなモノを集めたりするだろうか、普通？
いや、もう十分に普通の域は超しているか。紅花さんも、八木力
ナも。

「で？海に行ってきた割に、随分と汚れてるみたいだけど……何が
あつたの？」

「とりあえず、紅花さんと遊んで来た。それと――」

「何い？！」

遊んだ、と言ったら、これまた随分と食い付いて来たようだ。

「ってコトは、コウ、まさかホントにあの算段通りに……？じゃ峰
渡君はもう……？」

そして、何度も俺をチラ見しながら、何かをぶつぶつと呟き出す。
算段とか、俺がどうこうとか、実に怪しい事ばかり言っているん
だが、聞いても大丈夫なのか？

「ただいま戻りましたー！」

そんな折、勝手口だろうか？玄関の所とは反対側から、紅花さん
の声が響いて来た。

それを聞いて俺達は、その部屋の前から、例の仮面の部屋へと移
動する。

トタトタと小走りな、小気味の良い音を立て、そのすぐ後に紅花
さんが部屋へと現れる。

「遅れてごめんなさい、二人とも」

「そんなでもないよー。私達もさつき――って、何その制服？！」

上に羽織っているのは、俺の使っていた上着だ。

つまり、紅花さんを受け止めた時の血液が、その緑の制服にはベ
ツタリとくっついてるのだ。

因みに、その血は俺のズボンにも沢山着いているハズだが、色的
にも、あまり目立たなかったから指摘されなかったのだろう。

改めて見ると、まるで拳銃で撃たれたか、はたまた、ナイフで刺
されたかのような、酷い状態にしか思えない。まあ、後者に関して

は、笑い事では済まなかったのだが。

「そんなの、早く脱いじやいなさいって！」

「ま、待ってカナちゃん、この下は――」

それらを不快に思うのは当然だろう、俺だってあまり直視できたものじゃない。

だからか、それをひんむく様にして、紅花さんから脱がしてしまう。途端、固まってしまう。

だってその下の服は、所々血の後があつて、そしてそこは全部、ズタズタに引き裂かれているのだから。

……こう、下着とか、色々な場所が見え隠れしていて、改め見ると、凄くエロい。

「……」

俺の方を見て、顔を真っ赤にする紅花さん。

「あ、あははー……」

そして、そんな紅花さんを見て、顔を赤らめながら、乾いた笑いをもらす八木カナ。

「……俺、道場の方で待ってるよ」

「そ、そうしてくれると、助かるかなー？」

自然と、口からはそう出ていた。

だいたい、あんな空気の中、堂々と居座れる程、俺は空気の読めない男じゃ、ない。

――道場の方は、結構寒かったな。

そう思いながら、俺は、妙に興奮してしまった頭を沈める為、二人が来るまでの間、道場の真ん中で黙想していたのだった。

「お、お待たせしました」

多少高めの声で、シャワーでも浴びたのだろうか、上気した顔で、道着を着て戻ってきた紅花さんが、俺の前でお辞儀をした。

その格好と仕草に、この前の事を思いだし、つつい体を強ばらせてしまった。

一方の八木カナだが、目を泳がせながら苦笑いなんてしている。

……お前のその態度は何なんだ。

二人が持ってきた湯飲みやお茶請けを中心に置き、隅っこに積んであった座布団を敷けば、まるで茶の間へと早変わり、なんて。

「あはははー……さっきは、お見苦しいモノを」

それは、特に、お前が言っではいけないだろうが。

そう思いはしたが、二人の為に、まだ言わないでおこう。

「ともかく、コウからは大体聞いたよ。……その、さ。色々あったみたいだね」

「うん。一応、くうにも会えた」

「えっ——？」

八木カナではなく、その声は、何故だか、紅花さんから発せられていた。

「あれ、紅花さんには言ってなかったっけ？」

「いえ……聞いてないですけど……。戻って来た時には、お一人でしたし」

てつきり、あの時に言ったものだと思っていたが、どうやら教えていなかったようだ。

「追いかけて直ぐに見付けたんだ。その後少し話はできたけど、今は帰れない』、って」

「そう、だったんですか」

俺が、彼女を見付ける事ができた割に引き留める事ができなかったのは、どうやら二人、特に紅花さんにとって、結構なショックだったらしい。

空気は重くなってしまったが、二人の思いの大きさに、ちょっと感動してしまった。

「とりあえず、さ！しばらくはくうを探すの、止めることにするよ」
「えっ？」

自分でもちよつと、不思議な事を言ってしまった感じはする。それ以上に、二人の反応が良かったのだが。

間の抜けた返事の後、その後の言葉を促されるように、二人からじつと見られてしまう。

「くうは、『今は、』って言ってた。だから、今はダメなんだと思う。それはいくら俺達が足掻こうとしてもなんだとも思う。

だったら待とう、って考えたんだ。その”時”ってのをさ」

「それで……いいんですか？」

そんな俺の決意に、多分、氣遣つてのことだろう、紅花さんは俺に確認をしてくる。

だから一度、力強く頷いて肯定した。

「そう、したいんだ。

けど——多分、いや絶対、紅花さん達のチカラは必要になってくる。俺だけじゃ、こつちの世界は広すぎる。だから……また、協力して下さいっ！」

精一杯の気持ちを込めて頭を下げる。

暫しの沈黙。二人の顔は分からなかった。驚いているのか、はたまた呆れているのか——

「ぶっ」

「……へ？」

緊張は、また意外にも紅花さんが吹き出したことで、変に崩れてしまった。

今日の紅花さんは、何か変だ。具体的に、と言われると、何とは言い返せないんだけど。

「礼於さん、変な事、言わないで下さい。

私が貴方に協力してるのは、私が貴方に協力したいから、なんですよ？だから、礼於さんが頭を下げる必要なんて、最初っから無いんです。

それに、私もまだ、あの方に会えていませんよ?」

呆れてる様な、それでいて面白げに。怒っている様な、それでいて笑っている様に。だけど、視線だけは、真っ直ぐに俺の目を捉えていた。

「私の方こそ。これから、宜しく願います、礼於さん」

その一言一言が強く響いた。

逆に不安になる。こんなに心強くて、俺には勿体無い仲間がいて、本当に良かったのか?

「――ま。どーせ私も協力しなきゃダメそうだし。コウがやるなら私もやるよー」

八木カナが、紅花さんに続いてそう言ってくれた。

口調こそ嫌々に聞こえなくもないけど、こいつの事だ。口元が弧を描いてるってことは、否定的じゃ、ないと思ってもいいのかな。

「……二人とも。本当に、ありがとう」

もう、そうして再び頭を下げるしかなかった。

ほんのちよっぴり頬に力が入ってしまうのと同じ、涙が出てしまった

「だ、だから、私はコウが――」

自分にまで当てられたのが不満なのか、それとも照れてるだけなのか。

予想できなかった訳じゃないけど、八木カナはぶつぶつと言ってそっぽを向いてしまった。

その様子を見て紅花さんが笑い出したものだから、俺もつられて、吹き出してしまった。

「リン」、ね」

あの後、紅花さんの家の風呂場を借りることになった。流石に、あんなに汚れていては色々と問題があるから、と紅花さんに言われたからだ。

……血だらけの制服で——俺が渡したものとは言え——帰ってきた割に、いや、だからこそ言われたのかもしれないけど。

Yシャツはともかく、ズボンは洗ってもらい、次いでドライヤーで乾かしてもらった。

まあ、これだけ傷んでるんだし、最悪買い替えないといけないな。風呂場は独特の木の匂いと、紅花さんが使ってるシャンプーか何かの、甘い匂いが漂っていた。

それで、場所を客間へと戻して、紅花さんに夕食をご馳走になり（八木カナは既に寮で、早めの夕食を取っていたらしいが）、その後、今日の話を話し合うことになった。

「ああ、確かそんな風に言ってた。

聞いたことはあるか？」

「ないかなあ。

——と言うか、橘さんにはLIMについては結構聞いたけど、本人の事なんてほとんど無いし」

「そっか……」

その割に、紅花さんの情報——仮面が弱点なことは向こうに聞かれてるんだから、どうしようもない。

それだって、LIM化した事を伝える為に仕方なく言ったことだろうに。——あれ、ちょっと待て。そもそも、どうしてアイツなんかに知れわたったんだ？

気になって、それを聞いてみる。

「“コウがおかしい”って呟いてたの、聞かれたみたいだよ？

で、食い付くように聞いてくるもんだから、その状況を説明したら、色々と教えてくれたってワケ」

なるほど。

しかし、普通そんなこと呟くだろうか？……八木カナだからだろ

うか。

「とにかく、その二人については、特に女の子の方は警戒しておこう。こつちから動かなきゃ大丈夫だとは思っけど」

頷く二人。

橘幾斗——LIM化した時は、本人とは似ても似つかない程に変わり果ててた。いや、アレはもう、同じ人間だと、直ぐには分からないだろう。

俺が見たのと、紅花さんの証言から、橘の能力はナイフを無尽蔵に増やして、しかも自在に操るものと判った。

俺が直接闘うことは無いかもしれない——そもそも、対峙した瞬間に殺られてそうだが——けど、厄介なものに違いない。

そしてもう一人、”リン”と呼ばれた少女。

その姿はさながら、天使そのまんま。けど、その能力は悪魔のようだった。

羽根を飛ばしてきて、その攻撃を受ければ、自然には回復しない、というのだ。

紅花さんの能力故に大丈夫だったとは言え、LIMじゃない俺や、勿論八木カナだってそんなもの、食らうわけにはいかない。その意味からすると、橘以上に厄介なのかもしれない。

第一、あの橘が、あんなに狼狽えてたんだ。弱い訳がない。今後出くわしたくない人物No.1だ。

「——それにしても、紅花さんの能力って凄いやね。『直らない』って言われた傷も、直ぐに治ったんだからさ」

しかも、瞬きするほどの一瞬で。

くうがLIM化した時も同じ様に、一瞬で治っていたのも、ふと連想させてくれる。

「あーけど、決定的なデメリットもあるんだよ？」

「え、そうなの？」

以外なことを八木カナが言い出したものだから紅花さんに顔を向けると、一度深く頷いて、それを肯定されてしまう。

「はい、この能力はLIM化の解ける瞬間限定ですし……何より、LIM化中の傷しか治らないんです」

解ける瞬間、と言うのは分かっていたが、LIM化中の傷しかつてのは、どうゆうことだ？

そう思っていると、八木カナから解説が飛んできた。

「解りやすく言うと、例えばコウが今怪我してLIM化しても、終わった時にその傷は治ってない、ってこと」

「だから、それってどうゆうことなんだ？」

全然、解りやしくないと思うんだが……。

「あれ、コウ、説明ってしてないの？」

「えと、うん。私の能力は」

そこでジトー、と睨まれても困る。

と言うか、困ったら直ぐにその顔を——カナフェイスを向けられると、非情に、こつちも困るからやめてほしい。

メンドクサイ、なんて呟きながら、実に律儀にも説明しだしてくれたのだが、これはこいつの性格だから仕方無いのだろうか？

「じゃ、説明するけど。」

治癒力が上がるってことは、今怪我してもLIM化すればすぐに治るって事なの。それは、分かるよね」

頷く。

要するに、LIM化中だろうが、そうで無かろうが、治癒力が上がってしまえば根本的に大差無いってことだろう。

それくらいなら簡単に理解できる。

「例えばですけど」

次は八木カナからではなく、紅花さん本人から説明がきた。

「私がここに、火傷をしたとします」

そう言って、左手の人差し指を俺に向けてくる。

細くて、意外にも長めなその指を目の前に付き出されて、ちょっとだけドキッとしてしまった。

「もし解放——LIM化したら、確かにここの火傷は、すぐ治りま

す。……けど、解けた時に、全く同じ火傷がここに現れるんです。だから、厳密には”回復”、と言うより”修復”と言った方が正しいのかもしれない。または、”元の状態へと戻る”とか”なるほど……そうゆうことなのか”

「だから、確かにタイムリミットによる回復不足とかは無いけど、代わりに普通の時に奇襲でもされたなら、下手したらそのまま御陀仏、ってワケ。

解った？」

だいたい解った。解ったのだが、何故説明の大半を紅花さんにさせといて、締めはお前がするんだ。しかも偉そうに。

……それと、御陀仏とか、物騒なことは冗談でも心臓に悪い。本人たちは気にしてないようだけど。

「でも何だか、そう聞くと紅花さんって普通のLIMとは逆、って感じがするよね」

「逆、ですか？——言い得て妙、かもしれませんね」

「名付けて、”カメリアンLIM”っ！」

突然、八木カナが高らかに何かを宣言した。

何？カメレオン？

「あ、あれえ？もしかして、滑った？」

滑るも何もない。

俺も紅花さんも、突然の宣言に、反応できないでいた。

「い、いや、折角だからコウの能力に名前を付けてみたんだけどなあ……」

「カナちゃん、ネーミングセンス——」

「言わないでっ！言ってからどうかとは思ったからっ！」

あ、自覚はしてたんだな。

「な、何よっ！他に何かいい名前でも付けられるのっ！？」

「いや、少なくとも、カメレオンよりはマシになるだろ」

「カメリアンっ！あ、あんな気持ち悪いのと一緒にしないで！」

……だいたい、そこまで言うなら代わりに付けてみてよっ」

紅花さんの能力の名前、ねえ。

ＬＩＭ化の終わりに、全部元通りになる、んだよね。それって、まるで日の入りした後の太陽みたいだ。元通りまた、昇ってくる。

そう言えば、紅花さんが仲間になってくれたのも、今日も、真^{まっ}つ

紅^かな夕日だった――

「それじゃ、”紅^{あか}の日の入り”なんてどうだろう？」

「”紅の日の入り”……ですか？」

「うっわ、すっごくダ――」

「良いですね、それ！」

「え、え……」

八木カナには不評なようだが、紅花さんは予想以上に食い付いてきてくれた。

うん、俺も、結構良い名付けしたなと思っていたんだ。そう切り返されると、かなり嬉しい。……八木カナの反応は嬉しくないが。

（コウもしかして、単純に、峰渡君が名付けたからじゃ――）

「何か言ったか？」

「いやいやっ！」

で、何でそんな、名前にしたの？」

今わ”名前”の前の溜めに、「ダッサイ」と聞こえた気がしなくもないが、あえて無視させてもらうことにした。

「紅花さんの能力のタイミングを夕日、後は紅花さんと太陽を掛けてみたんだ。」

……それに、その能力を見た時ちょうど、太陽が沈みきる直前だったからさ。それと仲間になってくれた時も」

「太陽、って――言ってる恥ずかしい？」

そんなことは無いと思う。

紅花さんも、顔を紅くして俯いているし……そんなに恥ずかしいことを言ってしまったのか、俺は？」

「ま、でもそんな理由なら、私は茶々入れられないかなあ」

少なくとも、カメレオンよりはよっぽどいいと思う。あれ？カメ

リオン、だったか？

「でもさ、理由はともかく、やっぱりその名前は言ってて恥ずかしくならないの？」

「だから、何が？」

むしろ、凄く上手いこと言ったと思っている。

「こ、コウも、この名前は恥ずかしいよねっ?!」

「え、えと、……恥ずかしくは――」

「ごめん、コウには聞いても無駄だったね」

騒ぐだけ騒いどいて、溜め息ついたと思えば座り直して、まだ熱々なお茶をイッキ飲みしてしまう。

勿論、八木カナは前に見た時と同じ様な反応をしたのだが、紅花さんも見慣れているのか、それを見ても特に何も言わなかった。

これは、こいつの癖なのか？

「まあ、コウの能力も名付けた事だし、橘さん達が敵かもしれないって分かった訳だし……」

今日は解散でいいよね」

じゃあねー、と手をヒラヒラさせて、やけにダルそうに――彼女自身のせいだろうけど――部屋を出ていった八木カナ。

帰る場所は同じだし、待っててくれてもいいのに、と思っってしまった。

「心配してくれてるんですよ、あれでも」

俺が怪訝そうな顔を向けていたからか、紅花さんは

「そうなのかなあ？」

「ええ。カナちゃんは、無理矢理雰囲気明るくしようとしただけです。だから、少しは大目に見てあげて下さいね？」

その目付きや口調から、紅花さんと八木カナはただの友達と言うより……そう、姉妹の、妹でも見守る様な感じに思えた。

「……さて、そろそろ私達も解散しましょうか」

「そうだね」

八木カナが帰り、俺がお茶を飲み終えたのを見計らってか、紅花

さんがそう提案した。

時計は七時半を差していて、確かに良い頃合いになっていた。

それでふと気付くと、今、俺は女の子の、しかも学年随一の美少女の家に居て、かつ二人きりなんて状況になっていた。……いや、ここで変な気を持ったりはできなそうだけど。

「……そう言えば、さっき八木力ナに聞いたんだけど！この家の玄関って随分とハイテクなんだね？」

まさか、いつの間にか俺の指紋まで登録されてるとは思わなかったよ」

変な気持ちを紛らわせるために言っただから、ちよつと声が裏返ってしまった。

「ハイテクって………何かありましたか？それに指紋、ですか？」

あれ、どういうことだ？何だか通じてないようだが……。

「玄関が指紋認証のシステムになってる、って八木に聞いたんだけど、違うの？試しに真ん中ら辺から開けようとしたら開かなかったけど」

「ああ、そのことですか。あの引き戸、ちよつとおかしくなってるんですよ。」

取手のトコ以外を引いても、どうやら下の方が引つ掛かつて開かなくなっちゃったらしいんですけど……。」

やつと通じたようだ。が、どうやらアレはデマだったらしい。…
…あいつ、騙しやがって。

lim10:Rouge Flower(後書き)

「ただいまー」

「だから、何度言ったら分かる——」

「れ、レオ！助けてくれっ！ー」

「ちよっとお兄っ！聞いてる……の？」

部屋に上がるや否や、ピリピリとした空気と、涙顔のショージが俺のことを出迎えてくれた。

と言うか、誰だろう、この眼鏡ツ娘は？

「いっつ・わいるだー……？」

「え？」

言われて、改めて自分の服を見てみる。

元々買い替えるつもりはあっただけに、かなりボロボロになっている。

血の跡は染みになってるし、砂に擦れたのか、所々が擦りきれかけてる。ズボンなんてそれが顕著になってる。

それでもお風呂借りたりもしてるし、”ワイルド”では、ないと思っただけど……

それよりもこの二人だ。

どうやら、何か言い争っていたみたいだが——

「もしかして、お邪魔だったか？」

「いえいえいえ！全っ然っ！まっつたく！そんなことありませんよっ！ー」

だが俺の気遣いは必要なかったらしく、何故だか女の子の方に、必至に否定される。

……と言うか、君は誰なんだよ。

「あ、アタシ、多々良真葵^{まき}って言います！真実の真に、葵^{あおい}、です！宜しくですっ！えっとおー……？」

顔に出てたのか、また随分とハキハキと自己紹介される。

「ああ、俺は峰渡礼於――」

「レオセンパイ、ですか……っ！宜しくお願いしますっ！」

言い終わる前に、また随分と馴れ馴れしく――と言うか、『多々良』……？

「えっと、もしかして、妹……？」

首を縦に振つての肯定。しかし苦虫を噛み潰したかのような表情で。……まあ、だいたい状況は分かったさ。

「――それじゃお兄っ！レオセンパイっ！またっ！」

シュタっ、と効果音が付きそうな敬礼をすると、またいきなり帰って行ってしまった。

とりあえず、用事は途中だったんじゃないのか？

「ショージ、いい加減離れてくれ」

「え？スマン」

また忙しくなりそうだ……。

そんな、今は疲れてどーでもよくなった事を、その時は思いながらいた。

l i m 1 1 : N e w T e r m

始業式の朝。部屋の扉が叩かれる音で目を覚ました。

こんな朝っぱらから、一体誰だと言うのだろうか。

「どちら？」

「八木だけど」

「……え？」

また予想外な人物だった。

それは何なのだ？ あいつは俺の幼馴染みなんて設定は持っていないハズだし、それ以外にも朝起こしに来てくれる要素なんて一切……

「あ——」

あつた。

春休みの間に忘れてしまっていたが、きっと制服だ。……いや、始業式の朝になるまで忘れてる、つてのもどうかとは思ったが。

「とりあえず、開けてー」

言われるがまま、ノロノロと起き上がり扉へと向かう。

……まったく、少しは男の寝起き、つてものに気を遣ってもらいたいものだ。

「貴方達、まだ寝てたんだ……」

こいつに直接会うのは、終業式以来——ざっと二週間ぶりだ。勿論、紅花さんとも。

そんな久々の再開に、開口一番こう言われては情けない。情けないとは思うものの、実際そうだったんだから何も言い返せず、尚更情けないのだが。……いつか見返してやる。

ジト目を向けられつつ、手に抱えていた制服を受け取り、軽く礼を言う。

あの翌日、八木カナから電話があつた。

——制服、学校の予備から貰えるかも。

そう言われたので、結局新しいのは買いに行かなかった。まあ、小遣いが減らずに済んだのだから、本当に良かった。

「はあ……外で待っててあげるから、さっさと準備しちゃって」「え？」

そんな風に言われたものだから、もうかなりヤバイ時間なんじゃないかと思い、目覚まし時計を覗き込んでみた。——って、まだ六時過ぎじゃないかよっ！

どおりでまだ目覚ましも鳴ってないハズだ。

「全然、そんな急ぐ時間じゃないだろう？ 食堂だってまだガラガラだし」

「私はいつもこの時間だけど？」

建物が違うとは言え、こいつに会わなかったのはそれが原因だったようだ。因みに食堂は平日、朝は七時半まで開いている。八木カナとはいつも、約一時間ズレていた、って訳だ。

それにしても、朝はともかく夕飯に出くわさなかったのは、どうしてなのだろうか？ 俺だってかなり時間帯はまちまちなのだが……

それはともかくとして、あの八木カナの事だ。どーせ、律儀にも食堂辺りで待っているんだろう。……ぶつくさと言いながら、なのが容易に想像つくが。

早速受け取った制服に腕を通してみる。やけにブカブカとしていたが、学園にあった予備らしいし、貰えただけでも文句は言わないでおこう。……ここの一年、身長は一センチしか伸びてないんだけど。

ショージは……ま、その内起きて来るだろう。

「あつ——！ レオセンパイっ！」

部屋を出ようとした時、髪の毛を二つのお団子に纏めた、眼鏡の女の子が小走りで此方へと向かってきた。この娘は、確か——

「えっと……真葵ちゃん、だっけ？」

「——っ！」 真葵ちゃん”、だなんて……っ！

あ、そうそうお久しぶりですっ、レオセンパイっ！」

呼び方がまずかったのだろうか、一瞬顔を赤らめたのだが、直ぐ

に話題を転換されてしまう。

まあ、嫌がった素振りは無かったし、このままでもいいだろう。

「うん、お久しぶり。それより、その制服——」

「はい！アタシ、明日からこの学校の一年生なんですっ！レオセンパイのコーハイですよっ、宜しくお願いしますねっ！

で、どうです？似合ってます？」

忙しく話してくるものだから、真葵ちゃんがポーズを決めるまで、一体何のことだか反応できなかった。

「え？あー、うん、似合ってるよ」

「良かったー！中学の時と違ってスカート短めだから、ちよつと心配だったんですよ。」

あ、そうだ。お兄って、もう起きてます？」

「いや、まだ——」

「もー！お兄っ！まだ寝てたのっ？さっさと起きてっ！」

と、俺が言い終わる前に、寝てるシヨージを確認してか真葵ちゃんはズスカと室内へと入って行き、あるうことか襟元を掴み、激しく揺さぶったのだ。……俺だって、そんな起こし方をしたことはないぞ。

「。▼□！！」

「やーっと起きた。ほーら、もう七時過ぎてるんだからっ！さっさと支度しなくちゃ、遅刻しちゃうよっ！」

いや、まだ六時過ぎなんだけど……。

「え、ま、真葵っ！？何でお前が？！」

「寝惚けてないで、早く着替えてっ！レオセンパイももう、準備万端なんだよっ！？」

寝ぼけてるのは、真葵ちゃんの方なんじゃないだろうか？

「アタシは明日からだけど、お兄は今日からなんだから、急いで仕度しておくことっ！

——それじゃレオセンパイっ、また後でっ」

起こすだけ起こして、出会った時と同じようにさっさと出ていっ

てしまう。

暫く二人で啞然としてしまったが、ふと思い出して、ポケットに突っ込んだケータイを開いてみる。――六時十八分だった。

「……嵐が………来た……っ!!」

「今回だけは、同意しておくよ」

朝から青ざめたショージと、同意せざるをえなかった俺だった。

「おいレオ、これはどうゆうことなんだ……!」

本人は至って小声のつもりなのだろう。俺の耳とショージの口許は、手のひら一つ分程の距離しかないからだ。

だが、コイツには自分の声量がどれだけなのかは解っていないらしい。多分、目の前の人物には隠せていないだろう。

「むしろ私がどうゆうことだか聞きたいくらいなんだけど……。多々良、絶対に寝起き悪いと思ってたもん」

ほら、聞こえてた。

しかし今朝のことに關しては、ショージも、俺も、苦笑――と言うか、単に苦い顔をせざるを得なかった。あんな起こされ方したら、いくらショージだって、ねえ……。

それと今気付いたのだが、八木カナはショージに対しては『君』とかは付けてないみたいだ。ま、コイツに關しては過去一年間の実績があるからだろうけど。

「……何かあったの？」

「ちよつと、ね」

俺達の反応が悪かったからか、聞き返されてしまった。だがとても言えない。

「――そう言えば、真葵ちゃんは？」

その元凶は、回りには見当たらなかった。先に済ませたにしては早すぎるだろうに。

「アイツ、昔から朝飯は食わないからな。」

……で、なんでヤギがいるんだよっ！」

耐えられず、結局直接捲し立てるんだから、最初っからそうしておけばいいのに。……どーせ、シヨージには小声なんてムリなんだろうし。

「気分。……と言うか、多々良を誘った覚えはないんだけど？」

「だ、そうだ」

納得できないのか、ブツブツと何かを言い始める。小声（のつもりの発言）の方が大きい気がしたのは、きっと気のせいではないはず。

因みにシヨージを誘ったのは俺だ。

「そうそう、話は変わるんだけど。今日の放課後、入学式の準備があるから、手伝って」

また随分といきなりだ。

「は？何で俺が……」

「制服」

「うっ……」

それは卑怯だろ。

思わず持っていたお茶を溢しそうになった。

「まあ安心して。ちゃんとコウも来るから」

だからって、何を安心しろと言っただ。

「——それと、今年度はよろしくねっ」

「よろしく、って……今度は、何が？」

「同じクラス」

「……誰が？」

恐る恐る聞いてみると、八木カナが持つてる箸は俺を指した。

「……誰と？」

今度は反対の手で、当然だが自分を指差した。

「何で？」

「職員会議で決まったから」

「いやいやいやっ！」

「そういうことじゃなくてさ！何で八木がそんなこと知ってるんだよ？」

「私、生徒会でしょ？色々やってたから知ってるの。クラス表の設置とかね」

なるほど、そういうことだったのか。それなら、残念ながら出任せってことじゃなさそうだが。

「と言うわけで、よろしくね、峰渡君」

「えー……」

「えー、って何よえーって！？」

こいつも、決して悪い奴じゃない。今までだって何だかんだお世話になってる訳だし、多分、これからも協力関係が続くんだろう。

けど、それとこれとは、別だ。前みたいないイメージは無くなったとは言っても、主に私生活的な面で、苦手なのは変わらない。……

ちよつとでも何かしようものなら、絶対最初に指摘されそうだし。

「それと多々良。貴方の後ろの席、コウだから」

「な、ナニいいい——！！」

こらこら、ご飯つぶ飛んでるぞ。

「悪さ、しないようにねっ」

朝っぱらからカナフェイス全開なのは分かったが、ショージのとだ。”悪さ”なんて、紅花さんにはできないだろう。

そうと聞いてはいても、実際にクラス分け発表を見ると、やさり印象が違ふものだ。

クラス分け表は各学年、各クラス毎に五十音順、男女混合で書かれ、校舎前に張り出されている。

昨年度の俺のクラスみたいに、教師の気まぐれでも起きない限りは、その順番がその一年間の席順ともなる。

そんな俺の前後はどうやら、去年と変わらなかったようだ。

二人とも、それなりに可愛い女子なのだが、席替えを直ぐにしたこと、ショージとばかり絡んでいたのもあって、あまり面識はない。後は担任次第か。

「なんだ、ショージは別のクラスだったんだな。てっきりまた一緒かと――」

「俺の……後ろに……こ、紅花様、が――っ！」

駄目だ、聞いちゃいない。

「ご一緒できなくて残念です」

その代わりに反対側から、いつの間にか隣に並んでいた紅花さんが語りかけてきた。

正直驚いたが、ここは経験を生かして、特に驚かなかった素振りをする。

「おはようございます、礼於さん。今朝は、随分と早いんですね」

「おはよ、紅花さん。――八木に起こされたからさ」

「え、カナちゃんに？」

これ、と自分の制服をつまんで示唆する。

流石に紅花さんは、それだけで理解してくれたようだ。

「で、そのついでにここまで一緒に来たんだだけだね」

「そうゆうカナちゃんは、どうしたんですか？」

「生徒会だって。来て直ぐに中へ入って行っただよ」

すると、紅花さんは顔色を暗くしてしまう。

「カナちゃんとも一緒じゃなくて、ちよつと寂しいな……」

それは多分、この場にいないことではなく、クラスが違うことに對してなんだろう。二人とも親友みたいだし、ちよつと気の毒だ。

「ま、まあ、クラスも隣だし、暇だったら遊びに来なよ！八木も歡

迎えると思うし」

「そうですね、そう、させてもらいます」

そう言って苦笑いを浮かべる。そこまで落ち込むことなのかな、
と思いながらも、そんなものなのかもと思うことにした。

「それに、そっちのクラスにはシヨージだっているんだし」

「はい——」

何となく、妙に気まずい空気になったのを払うように、その場から動き出して、早足気味で新しい教室へと向かったのだ。

新しい教室、と言っても、登る階段が一回分増えただけだ。下から三年、一年、二年の階になっているんだから当然だが。

それよりも、四階まで登るのはやけに疲れる上、教室自体は階を上げるにつれて妙にボロっちくなってくのだ。

モチベーションを上げる、と言われても、この学園に関して言うてしまえば無理なんじゃないだろうか？

「じゃ、俺はここで」

紅花さん達の教室は俺達の教室より奥に位置する。

結局ここまで、これといった会話もなく、俺の半歩後ろを歩くようにして紅花さんが着いてきただけだった。

「また後で」

「はい、また後程に」

綺麗なお辞儀をして隣の教室へ向かって行った。やはり、その背中
中は寂しそに見えて心配——いや、彼女にそれは失礼だろう。

「あ、峰渡くん、こっちこっち」

「ん？」

教室に入ると直ぐに、八木カナに呼ばれた。隣の席を指差してる
のは、そこが俺の席、と言うことでいいのだろう。黒板にも座席表
が書かれていた。

「隣だね。よろしくー」

「えー……」

「だから、えーって何？！そんなに私が嫌なの、ねえ？！」

別に、こいつ自身に対しての嫌気はない。シヨージだつていないし、何かアクシデントが起こると思えない。……思いたくない。要するに、反射的な様なものだ。

「まー、いいけど。」

それより、コウと会ってたんだ？」

「八木が入っていつて、結構直ぐにな。——ってお前、生徒会があるんじゃないのか？」

てつきり、直接生徒会室にでも向かったと思ったのだが。

「あー……、うん。集合時間、三十分後らしいんだよねー」

あはははー、なんて笑ってるが、巻き添えを食らった身としては実に納得がいかない。

要するに、だ。八木カナが部屋に来るまで、三十分は余裕があった、と言うことなんじゃないのか？」

「いや。そんな訳無かったな」

「え、何が？」

「こつちの話だよ」

どちらにせよ、直ぐに真葵ちゃんが来ていただろう。

それに思い出したが、こいつはいつもこの時間だ、って言ってたし、結果として六時起きだったのだろう。

なんだか、今日とはことん、朝から巻き込まれてる気がしてならない。

……いや、ちょっと待てよ？

真葵ちゃんがシヨージの事を起こしに来たと言っなら、もしかして、毎日あの時間に来るのか？」

おいおい冗談じゃないぞ。誰か、否定してくれる人はいないのか……？！

「なーに一人で百面相してんの？」

思わず、そうしていたようだ。

「ところで、百面相はどうやれば二人以上でできるんだ？」

「さあ？内容が詰まってる会話をすればいいんじゃない？」

起床時間についての問題は、先送りすることにした。
そもそも、真葵ちゃんが一時間時計を間違えていたことには、この時は忘れていたのだった。

勿論だが、今日は新しい学年・教室の確認と、その担任の発表だけだ。授業は無い。

そしてもう一つ、この学園ならではの特長がある。

「はう、これで解散。アンタら、路草食ってないでさっさと帰んなよー」

覇気のまるで込もってない返事を、またクラスの皆がバラバラに言いながら立ち上がる。

勝手知ったる、と言うか、この担任に対しては、これぐらいテキトーで丁度良いのだ。だいたい本人がかなりテキトーな性格なのだ。誰か、って、シイナ先生の他無いだろう？

——そう、つまるところは、全体で集まる様な始業式は無いのだ。軽い校内放送での連絡と、担任の長い、ありがた迷惑な話だけだ。それも我らが担任に関しては、ほんの五分ほどで終わってしまう。

体育館での全体集会は、明日の入学でまとめてやるらしい。”らしい”ってのは、去年は俺達が入学生だったからなのだが。

それならいつそ、今日は集まらなくてもいいんじゃないか？……って思わなくもないが、少ないとは言え宿題があったり、人によつては他にもやることがあったりと、それなりに集まる意義はあるようだ。

「それと、カナ。分かってるな」

「はい、大丈夫です」

「それじゃ、解散！」

八木カナに何かを確認すると直ぐに解散する。勿論、一番に教室を出ていったのはシイナ先生だ。それも軽い足取りで。

「それじゃ、私たちも行きましょう」

「……何処へだ？」

新学期早々、再びのカナフェイスと共に、今度はため息までついてきた。

「峰渡君、今朝言ったことも忘れたの？」

「今朝？」

何か約束などしていただろうか？

「入学式の準備っ！今朝、放課後にあるからって言ったんだけど」

「あー、……？」

そんなこと、言われていただろうか？いや、きっと言われていたのだろうが、聞き逃したんだろう。

「……制服」

「あ」

た、確かに、これを渡してもらったことを理由に脅されていた。

「はあ、そんなことだろうとは思ってたけど、ホントに忘れるなんてね」

何も言い返せなかった。

「ま、いいから着いてきて」

そっけなく、と言うよりは呆れているのだろう、スタスタと先に行ってしまう。

これ以上何か言われるのも嫌だし、遅れないように着いていくことにした。

二年A組は、体育館から一番遠い。当に正反対の位置にあるのだ。教室のすぐ近くにある階段を使うのが楽ではあるが、これから室内体育や全校集会、行事の旅に向こうまで行かなければ、と思うと、やけに面倒に感じてしまった。

「なあ八木。妙に焦げ臭くないか？」

その途中、階段を降りきった辺りで、妙な臭いが漂ってきている

のに気付く。

「焼却炉近いし、それでじゃない？今日はゴミも沢山あったみたいだし」

「沢山って？」

「昨年度の資料や廃材とかね。生徒会や教職員で回収してたし、それ——」

『おいおい、向こうで火事だってよ！』

「——！？」

ふと聞こえてきた言葉。

丁度、そんな会話をしていただけに、偶然とは思えなかった。声の聞こえた方を振り返ってみれば、既に何人かの野次馬らしき人が集まってきた。

「まさか、焼却炉の方で？」

「い、行きましょっ！」

「ちよっ——！」

俺自身気になっていたし、何より、あんな切羽詰まった顔で言われたなら、俺達が行っても意味無い、先生を呼ぼう、なんて綺麗事は言えなかった。

俺も小走りに行ってみると、現場には数人の教師と、八木カナと生徒会の先輩らしき人が道を封鎖していた。なるほど、確かにあれは八木カナの仕事だ。

それにしても、ここからは十メートルは離れているだろう所から、炎の壁、と言っても過言ではないモノが出来上がっていたのは、流石にビックリした。

大量に資材があった、とは聞いていたけど、こんな炎は映画くらいしか見たことがない。

「あ、峰渡君っ！ちよつと来てっ！」

「え？」

野次馬に混ざって現場に見惚れていると、俺を発見した八木カナから呼び出された。

「早くっ!!」

「あ、お、おう」

指示をもらい、消火器を幾つか運んで来てくれた教師から、それを受け取る。

実際に使うのは初めてだが、見よう見まねでピンを抜き、レバーを握りながら消火薬を炎へと吹き掛ける。意外と勢いがあり、ホースから手が抜けそうになってしまう。

俺がやりだしたのを見ていた数人も、消火器を受け取りに行き助っ人してくれる。たかだか校舎の一角なのに、八人で、つてのは少し大袈裟すぎやしないだろうか？

「おい！こっち切れたぞ！」

「こっちもだ……。チクショウ、何で消えないんだよ！」

しかし、何故だか火は消えなかった。

俺の使っている消火器も、殆ど無くなってきたのに、勢いは弱まるどころか、逆に強まってきている。

この消火器、期限切れなんじゃないだろうか？

「い、急げ！向こうに火織かおりがいるそうだぞ！」

その一言で場が凍りつく。

見ると、八木カナのすぐ隣で踞っている男子生徒が、「火織先輩が、火織先輩が」と、顔を真っ青にしながら呟いている様だった。

と言うか、「カオリセンパイ」って誰だっけ？何処かで聞いた名前だが――

「生徒会長ーっ！ご無事ですかーっ?!」

一人の女子が火の中に叫ぶ。ああ、生徒会長か。――……じゃなくってっ！

「大変じゃないか！早く助けないとっ！」

近くにいた教師に問い詰める。

「それが出来ないからこうしてるんだ!……くそっ！消防はまだ――」

もつかれこれ十分近く経っている。消防なんて待ってられない

じゃないか。

この先は焼却炉だよな、なら、

「ちっ！」

「お、おい、君?!」

消火器を投げ出して走り出す。

教師が俺を止めようと手を伸ばすが、それを避けて前へ進む。自分でも不思議なほどに、カラダが前に出ていた。

――が、炎の壁への一步を踏まずして、俺の体は後から、引つ張られるようにして押し倒されていた。隣を紅い波が過ぎる。

「い、今誰が行ったんだ?!」

あれは、紅花さんだった。

直ぐに、さっき俺を止めようとした教師と、八木カナが隣へと走ってくる。

「ちよつと峰渡君！後先考えないで変なコトしようとししないで！

――それより、今のつて」

「ああ、紅花さんだと思う」

教師に聞こえないよう、小声で八木カナに耳打ちする。

今を見て、この状況をより不安がっているのか、周りも更にざわついてしまう。あの状態の紅花さんなら大丈夫だと解ってはいたので、寧ろ、会長の方が心配だった。

しかし数秒もすると、数人が炎を指差して叫び出す。そこからは生徒会長を抱えた紅花さんが飛び出してきた。

二人とも服のあちらこちらが焦げている割に、身体の方は無傷のようだった。流石、と言うべきか。

紅花さんは生徒会長を地面に寝かせると、そのまま走り去ってゆく。

だからって、壁を走り、そのまま飛び上がって行くのはやり過ぎだ。皆、啞然と見上げるだけだった。

「おい、夏織！しっかりしろっ！」

側にいた教師の叫びで皆が振り向く。一斉に此方に向かって駆け

出す辺りに、生徒会長の人望が伺えた。

「峰渡君、私たちはコウを追いかけてよ」

「そうだね」

人並みを掻き分け、屋上へと急いだ。

紅花さんは、屋上の隅に隠れていた。鍵は彼女が予め開けていたらしく、あっさりと扉は開いた。

「もおっ！コウも無理しないで！」

「ごめんなさい、カナちゃん……」

ＬＩＭ化はまだ解けていないのか、髪はまだ真^{まっ}つ紅なままだった。その割に、いつもの凜々しい姿ではなく、八木カナに叱られて小さくなっているんだから、なんだか可笑しく思ってしまった。

「でも、私が行くのが一番かな、って」

「はあ……。峰渡君もだけど、あんまり無茶しないでよホント。心臓に悪いんだから」

ぶつくさと文句を言っているかのようにだが、俺にはもう分かる。こいつなりの心配の仕方なのだろう。

だから、此方も努めて礼を言うことにする。

「ありがとな、心配してくれて」

「別に、心配なんてしてないっ！」

赤く膨れ上がる八木カナのほつぺたを見て、素直じゃないんだからと、俺と紅花さんは、顔を見合せ笑っていた。

俺達が上に来ている最中に火が消されたらしく、今では白い、薄い煙が軽く昇っているだけだった。一先ず安心、と言ったところか。

後は会長の容態だが――

「そう言えばカナちゃん、変なコト聞くけど、生徒会長さんって男性、だよな？」

「そつだよ？まあ、名前はどっちも女つぽいけどね。夏織蛸^{けい}つて」
「そつ、だよね……」

こんなことを聞くなんて、何かあったのだろうか？

俺からしてみても、生徒会長はとて格好よく、憧れているほどののだが。

「うっん、何でもない。二人とも、今は気にしないで」

「別に気にするほどじゃないよ。」

それより八木、そろそろ体育会の方へ行かなくてもいいのか？

騒動も収まってきて、消防も来たところで、準備のことを思い出した。

「そつだね、行きましょ。——あ、コウはさつさと帰りなさいね？」

「え？どうして？」

「その服」

先程の件で、制服はかなり汚れていた。スカートの端なんて焦げてしまつてボロボロだ。

「後で私の——じゃ小さいだろうから、お姉ちゃんが使つてた予備の、持つてくから」

「うん、ありがとう、カナちゃん」

小さいと聞いて、思わず視線は二人の身長差を確かめてしまった。

……15センチ、といったところか。

そのまま視線を、天辺から下の方へ持つていく。そちらは……大差無い、といったところだった。

「いでっ！」

「失礼だよっ！！」

八木カナに殴られた。

いつも思うのだが、俺はそんなに分かりやすい表情をしているのだろうか？

「——っ！？」

見れば、次には鳩尾^{みぞおち}に正拳がクリーンヒットしていた。え？紅花、さん……？

「少しだけ、反省して下さいっ！」

「ちよっ……」

全身から力が抜ける。そこで暫らく、俺の意識は遮断されたみたいだ。

この後遅れて体育会に行った俺が、二つの意味で八木カナに怒られたのは言うまでもない。

気絶させられて、置いてけぼりにされた挙げ句ソレなんだから、正直理不尽さを隠せなかった。

……あと、どっちに失礼だったのかは、個人的に聞いてみたかった。

l i m 1 1 : N e w T e r m (後書き)

礼於達がその場を離れ、蛍が保健室へと運ばれた後。校舎の隅、ある水道前にて。

「仕方ないな……。……うん、アタシの出番だよねっ！」

おもむろに眼鏡を外し、スカートのポケットへとそれを突っ込む一人の少女。

すると、頭の上で尹でいる二つの団子結が自然とほどける。その時、髪の色がより鮮やかになったのに気付ける人は、あまり多くないだろう。

それは、そんな些細な変化より、他の、明らかな変化——結い目だった場所から生える猫の様な耳、そして、スカートを持ち上げるようにして伸びてきた尻尾に、気を取られてしまうからに違いないだろう。

「うーっ！やっぱこの格好、外だと恥ずかしいっ！……にゃん♪なんちで」

一人でポーズを決めたり、恥ずかしがったり、一体何がしたいのか。そう言いたいのは最もだが、今から彼女がしようとしているのは”ボランティア”だ。勿論、如何わしい意味ではなく、正真正銘のだ。

蛇口を順々に捻ってゆき、全てから水を勢いよく出す。

端から走り始め、ハープでも奏できるようにそれに触れてくと、蛇口から作り出された線は、まるで魔法でもかかったかのように起動を曲線に変え、彼女の真上、一ヶ所へと集まってゆく。そしてそれは、巨大な縦長の楕円となり、静止していた。

「よーし……——いつちゃえええええええっ！！」

掛け声一閃、それは鋭い無数の水流となり、火の壁へと直進してゆく

「な、何だ?!」

「ヤバっ! 逃げろ!」

突然襲い掛かってくる水流に、その場にいる全員が驚き、避難する。

炎の中を縦横無尽に、まるで生きている龍の様に駆け回った水流は、あるうことが、いくら消火器を使っても弱まらなかった炎を、一瞬で覆いつくし、消してしまったのだ。

その一方で、それを産み出した当の本人は、それこそ猫の様に、その場から去っていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6583v/>

time LIMit → ZERO

2011年11月4日02時04分発行